
Mr.Justice episode0 ~夏の盛りに~

奥山メイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Mr. Justice episode0 夏の盛りには

【Nコード】

N6801I

【作者名】

奥山メイ

【あらすじ】

蝉時雨の中、ヨークは警察官・隼人と、甘く幸せな恋をした。一方、隼人の元カノ・エレナも、彼への想いを募らせる…。そんな時、人を無差別に襲う『通り魔事件』が発生。隼人や岩波刑事は解決に乗り出すのだが…！？美しい夏の、切なく甘い2つの恋。

『Mr. Justice 真実と現実』の番外編。本編を読んでいなくてもわかるストーリー編成ですので、ご安心下さい。

お知らせ

R15表現を抜き、年齢制限を外しました。

プロローグ

〜蝉時雨〜

今から、三年前の夏。

蝉が鳴き盛る季節。

一つの恋が、
愛を育んでいた。

ヨークは、高校生。
隼人は、警察官。

二人の夢は、同じ。
刑事になること。

二人は、出会ってすぐに
恋に落ちた。

もう一つの恋は、
切ない想い。

独りぼっちのエレナは、
いつも

温もりを求めている。

大好きなひとに
傍に居てほしくて。

それが例え、

『叶わない恋』

だったとしても
。

二つの恋が、
運命のように
重なり合う…。

夏空の下、

物語が

始まるうとしていた。

始まりの愛

東京駅のホームに、1人の青年が降り立った。

「隼人っ！！」

ヨーコが叫んで、青年の名を呼ぶ。デニムのサロペット姿の彼女は、すぐにスーツ姿の青年に飛び付いた。

「おかえりなさい！出張研修、お疲れさまっ」

「ただいまっ、ヨーコ」

青年　隼人は、綺麗な横顔でニッコリと彼女を抱き締める。

ホームで抱き合う二人を、人々が目をぱちくりさせながら見る。

「…それにしても、出張研修の予定って、急に変わるものなのね。明日帰ってくるはずだったのに」

ちよっと首を傾げて、ヨーコが隼人を見上げた。二人の身長差は、三十センチほどある。ヨーコが小柄で、隼人が長身なのだ。

「まあ、ヨーコの所に早く戻って来れたから、俺は満足だけどなっ隼人は優しく、ヨーコの頬に触れた。

「一週間も離ればなれだったもんな。元気にしてたか？ヨーコ」

ヨーコは、必死に、こくと頷く。

ホントは、元気なんかではなかった。隼人に、傍にいて欲しかった。しかし、そんな我儘は言えない。

隼人は、大切な警察官の仕事をしているのだから。寂しかったりして、余計な心配をかけてはいけない。

でも。

ヨーコは、心の中で呟いた。

強がってるけど、寂しかったんだよ。隼人に会いたくて会いたくて、どうしようもなかったんだよ…。

隼人が、それを感じ取ったかのようにヨーコを見つめた。

「ヨーコ。俺も、寂しかった…」

パツとヨーコの顔が真っ赤になった。

そんな彼女が愛しくて、隼人は今すぐに抱き締めたくなった。

隼人とヨーコの出会いは、半年前。ちょうど今日のような、夏空だった。

隼人は警官。ヨーコは、普通の高校生。彼女が、落とし物のハンカチを交番に届けたとき、二人は一目で恋に落ちた。

あまりに違う生活を送る隼人とヨーコ。けれど、同じ夢を追う二人の心は、すぐに通いあったのだ。そして、離れられなくなった…。

日差しの中で、蝉が鳴く。短い生命を、惜しむように。

「もう、しばらく出張はないから。これからは、ずっと一緒にいような…。」

隼人が、ヨーコの耳元で囁く。

その幸せを噛み締めながら、ヨーコも囁き返した。

「約束よ…。」

2人は、知らなかった。

これからやってくる、胸が張り裂けてしまうような、悲しみを…。

*

相手を愛しているわけではない。

ただ、温もりが欲しい。

18歳の少女…エレナは、そんな理由から、夜毎に男を誘った。

街で声をかけてくる男は、いくらでもいる。不器用な奴は苦手だから、一応相手の顔はじっくり観察する。彼女が目当てとするのは、こういう付き合いに慣れていそうな男だ。

そのテストに合格した男は、行き付けのカラオケボックスに誘われる。

けれど、彼女はいつもあの青年を想う。自分の家族とも言えるような、中学時代の恋人を。

いつも、朝が来て、相手と別れるたび　　彼女は脱け殻のようになる。目的を失って、再び街をさまよう。また、誰か自分を慰めてくれる人を探して。

けれど、彼女はわかっている。彼女は、決して満足することは出来ないのだ。あの青年と一緒にでなければ。

でも。

もう、その人は、彼女を抱きしめはしない。彼は、もっと大事なものを見つけてしまった。

『エレナ。綺麗だよ』

そう言った彼の唇は、遥か遠くへ行ってしまった。それでも、彼女は、今も彼を待っている。

満たされない心を抱えながら…。

想うのは、ただ1人だけ。

…
律人
…。

ゼリーと水羊羹

けだるく夕日の差し込む交番の中で、彼はデスクに突っ伏していた。

「あ。隼人また寝てる」

誰かに肩を突つかれ、隼人はだるそうに少し動く。出張から戻り、まだ一日しか経っていない。疲れ切って寝てしまうのは、当然のことだった。

眠りながらも、青年の口元は僅かに微笑んでいた。見ているのは、もちろんヨークの夢。

幻想的な花畑の中で、ヨークと戯れている夢。

彼女のことを思うだけで、幸せを感じる。

それは、恋の成す不思議な業だ。

「隼人ってば」

耳元で、誰かが名前を呼んでいる。

…ヨーク。

そう思っつて、隼人はパツと眠りから覚めた。

しかし、彼を覗き込んでいたのは、ヨークではなかった。くるくるにウエーブした、ミルクティー色の髪が鼻をくすぐる。

それだけで、隼人の幸せは吹き飛んでしまった。

「何の用だ？エレナ」

呟いた唇に、笑みは無かった。

「何よ、その反応」

その女性が怒った猫のような声を出す。

「せっかくゼリーもってきてあげたのに」

隼人は身を起こして、トンとデスクに置かれたビニール袋を見つめた。

その背景は、女性のゼブラ柄のミニスカートだ。

「隼人の好きなソーダ味。感謝してよねっ」

強気に言うと、彼女はデスクに腰掛け、薄緑色のカラーコンタクトで隼人を見つめた。

「別に…」

隼人はエレナと眼を合わせないように気を付けながら呟く。

「…今ゼリー食べたい訳じゃないし」

「何よそれっ」

エレナは膨れた。

「昔はスキだったじゃない!!どんなに満腹でも、ゼリーだけは別腹って言うてたでしょ!？」

彼女がしゃべる最中に、道行く人は「何事だろう」という目で交番の中を覗き込んでいく。

交番にキャバ嬢のような女がたむろしている姿は、人々の眼に異様に映ったに違いない。

それを感じて、隼人は焦り始めていた。

…もし、ここに「あの」エレナがいると上司に知れたら。

隼人の立場が危なくなる。可哀想ではあるが、もう昔の関係では無くなった今、エレナには早く帰ってほしいと思った。

「何の用なんだ？」

隼人は切り返した。

「まさか俺にゼリー食べさせるためだけに来たんじゃないだろ？」

エレナのことだ。

きつと何か、裏があるはずだ。

隼人の中で、疑いの念がムクムクと膨れ上がった。

しかし、エレナはゼリーカップを袋から取出しながら、首を横に振った。

「用なんて無いよ。隼人とゼリー食べに来ただけ」

カップの側面からは、鮮やかなブルーのゼリーが見えている。

そうつと蓋をはがすと、エレナはゼリーを口に運んだ。

真っ赤な口紅とゼリーのブルーが、隼人の目を焼く。強烈な色のコントラスト。まるでそれは、エレナそのもののように感じられた。

「おいしいよつ。隼人も食べようよ」

はしゃぐようにそう言うと、エレナは自分のプラスチックスプーンですくったゼリーを、隼人の目の前に突き付ける。

「ほらつ。早くっ」

スプーンの上で、ゼリーが細かく震えている。

甘いソーダの香りが、交番中に満ちた。

「…いらぬい」

隼人はゼリーから目を反らした。

「言っただろ。俺、今ゼリー食いたい気分じゃないんだ」

蝉の鳴き声が、うるさい位に響いている。

「あつそ」

あっさり言うと、エレナは再びゼリーを口にした。

ぷるん、としたそれは、冷たく喉を通り過ぎていく。もう一さじすくってから、エレナは隼人を見た。

「…じゃあ、何なら食べたいの？」

「…」

隼人は、不機嫌そうに伸びをしていた。

何も答えない。

「ねえつてばあ」

エレナは、甘ったるい声を出した。

いつも男に甘える時に使う声。

これで「落ちない」男はいない。

昔は、隼人だつてその気にさせることが出来た。
それなのに。

今の隼人は、全く動じる気配が無い…。

「ねえ」

エレナは甘えるのをやめ、声を低く落とした。

「何で？なんで答えてくれないの？」

「…」

隼人は一瞬だけエレナを見やった。

しかし、またすぐ視線を離す。

その綺麗な横顔は、どこか遠くに向けられていた。

「ゼリーは、もう要らないんだよ」

「何で？飽きたから？」

エレナがしつこく追及する。

「いや」

隼人は呟いた。

「今は、水羊羹の方が好きかな…」

エレナが、プツと吹き出した。

「何ソレ！地味いー。隼人に似合わないあーい」

「…」

「水羊羹なんてさ、おじいちゃん臭いじゃん！趣味おかしいって、
隼人」

けれど、隼人は少しだけ口元で微笑んだ。

どうして、そんな表情になったのかは自分でもわからない。

ただ、それを見て、エレナの胸がどきん、と鳴ったのは事実だった。

「お前、水羊羹とか知らねーだろ」

隼人が言った。

「ゼリーより地味に見えるけどよ、水羊羹の方が甘いんだよ」

「ふうん…」

納得しきれない顔で、エレナはゼリーに目を戻した。まだ沢山余っている、ブルーのゼリー。
しかし、彼女はそれをデスクに置くと立ち上がった。「また来るね」
急いで言うと、そそくさと交番を出ていく。
振り替えることもしなかった。

「ふう……」

エレナが行ってしまつと、隼人は息をついて椅子の背にもたれた。
なんだか、ひどく疲れた。それに、このゼリーの酷い臭いときたら……。

「あつ。隼人がゼリー食ってる」

キキイツと嫌なブレーキ音がした。

交番の前で、1人の警官が自転車を止めたのだ。

短く刈り込んだ髪。

まだ若い、少し年がいつているようにも見える、西郷隆盛に似た人物。

「松田さんっ！」

隼人は弾かれたように立ち上がった。

「旨そうだなあ。俺にも食わせろよ」

松田は入ってくるなり、サツとゼリーを取り上げた。「うん、うまい。暑い日はこういう涼しげな甘味が良いなあ。なつ、隼人」

「はっ、はい、松田さん」まさかエレナの食べ残しだとは言えず、隼人は凝り固まっていた。

少し年上の同僚・松田は、この秋から本町署の刑事に昇格することになった。

その気さくな人柄から、隼人も尊敬している。

「松田“さん”はやめるよ、堅苦しいからさ」

松田がゼリーを完食してから、隼人に笑いかけた。

「仲間なんだし、呼び捨てで良いよ」

「呼び捨ては、ちよつと……さすがにムリっす」

隼人は苦笑いした。

「じゃあ、松田“くん”にしよう。それなら良いだろっ?」
松田があっはっは、と笑う。つられて、隼人もニッコリした。
夏の日差しは、けだるく交番を照らしていた。

エレナは、まだ去ってはいなかった。

遠くから、しばらく交番を見つめていた。

しかし、やがて俯くと、背を向けて歩きだした。

ささやかな喜び

「ただいまあー」

叫ぶなり、ヨーコは鞆を玄関先に放り投げて、家に駆け込んだ。家の中には、誰もいない。

両親は共働きをしていて夜遅くまで帰ってこない。

1つ上の兄は、今年から一人暮らしだ。

ヨーコはそれでも、毎日「ただいま」と言う。

幼い頃から身につけてしまった習慣は、なかなかとれるものではないのだ。

今日は、隼人の仕事が早く終わる日。

なぜって、ヨーコの誕生日だから。

ヨーコが1人で誕生日を迎えることになりそうだと知った隼人は、両親が帰ってくる夜9時前まで、2人でパーティーをしていようともちかけてくれた。

だから、ヨーコは楽しみでたまらない。

…隼人が尋ねてくるまでに、家の中を片付けておかなくっちゃ。

ヨーコはてきぱきと、準備を始めた。

家中くまなく掃除機をかけ（傍から見れば乱雑に）、窓を磨き（傍から見ればガラスを割りそうな勢いで）、散らかったものをパパッと片付ける（実は見えないところにグチャグチャに突っ込んだだけ）。

家が綺麗になったところで、ヨーコはふう、と息をついた。

あと、何か準備しておくものはないか。
食べ物はお母さんがターキーを冷蔵庫に入れておいてくれたから大丈夫。

レンジでチンすれば、すぐに食べられる。

隼人には物足りないかも知れないが、シャンメリーもある。

お父さんのワインラックにはウオッカが入っているが、強すぎて隼人ですら、とても飲めそうにない。

あとは…。

…私が、準備しなきゃ…。

メイクもいつもより念入りにしたい。服も、可愛いものを着たい。

隼人に会うことを考えるだけで、ヨーコは嬉しくも気恥ずかしくもなってしまうのだった。

*

「おつ、隼人今日は早上がりか」

松田が声をかけた。

「ハイ。大事な日なんすよ」とびきりの笑顔で隼人が答えた。

制服から、楽なTシャツとジーンズに着替える。

Tシャツは、ヨーコが選んでくれたものだ。

真っ白な生地に、金のインクで飛行機のイラストが描かれている。

飛行機の後ろには真っすぐのびる飛行機雲。

『飛行機と雲って、隼人みたい』

ヨーコは、そう言っていた。

『力強くて、真っすぐで。隼人そっくり』

そうかなあ、と隼人は照れた覚えがある。

…それは、どちらかというところ、俺じゃなくて…。

とにかく、このTシャツは大切な日だからこそ着る、お気に入りなのだ。

「大事な日って何だい？」松田がにやけながら聞いてきた。

「彼女の誕生日かなんか？」

「おっ、松田くん勘良いですねえっ」

隼人は感心した。

松田はフフン、と胸をはる。

「男にとつての大事な日なんて、大体がソレさ…で、どうなの？隼人の彼女。」

お前のことだから、選んだ彼女はべっぴんさんなんだろうっ？」

隼人は、大きく頷いた。

「俺にとつては、世界一可愛いです」

「おおっ！いいねえいいねえ！！隼人、オトコマエっ！」

松田が誉めはやした。

ヨーコのことを考えると、隼人はでれっつと照れてしまう。

どうして彼女をこんなに好きになったのか、それは隼人にもよくわからない。

今まで付き合ってきた女性は、みんなエレナのようなタイプだったけれど、警察官になり、ヨーコを一目見た瞬間、全てが隼人の中で変わったのだ。

特に美人という訳でも、気立てがいいという訳でもないヨーコ。

しかし、彼女の無垢で飾らない笑顔は、隼人を奥底まで照らしだした。

まるで、今日の太陽のように…。

「じゃ、あがります」

松田に別れの挨拶を告げ、自転車にまたがった。

昔はバイクに乗っていたものだが、今は自転車が心地よい。

朗らかな気分で、隼人はペダルを漕ぎ、風を切った。

*

「何だとお!!」

ガッシャーン。

グラスが床に叩きつけられた。

中に入っていた赤ワインがこぼれ、白い床に血のように広がる。キレている男を取り囲む仲間達は、恐ろしさに一歩ひいた。

ここは、廃墟となった小学校の理科室。

薄暗い中に、使われなくなつてドロドロになつたフラスコや人体模型が、うつすら見える。

「酒井! もういつペン言つてみる!」

椅子に座る、スキンヘッドのボス的人物　　臼田が、怒鳴り声を上げていた。

酒井と呼ばれた、グリーンの髪のひよろい男は、冷や汗を大量に流しながら、必死に弁解しようとしている。

「西公園界隈を…う、奪われましたっ」

「誰に!?!」

臼田が唾を飛ばしながら叫ぶ。

目は見開き、今にも飛び出てしまいそうだ。

「ひっ」

酒井が悲鳴を上げて後退りしたが、周りの仲間達に押し戻された。

「誰が西公園を奪つたんだ!?!」

臼田が怒鳴り散らした。

あまりの大声に、仲間達はみな縮み上がり、半分割れてしまったよ
うな窓がビリビリと音を立てた。

「…ブルーシャーケの奴らです」

酒井が告げた。

「ブルーシャーク!？」

白田が聞き返す。

「奴ら、戻ってきやがったか。この界限に…」

エレナは緊張した面持ちで、ボスを見つめた。

彼が今、何を考えてるのか、エレナには解るような気がした。

「隼人を呼び戻せエ…」

白田がうなづいた。

```
- - mimek01
Content-Type: text/html; char
e="iso-2022-jp"
Content-Transfer-Encoding: quo
ted-printable
```

```
& amp; : n b s p : = 1 B $ B ! $ V $ ? $ @ $ $ $ ^ $ ! : ! & a
m p : : n b s p : = 1 B $ B 6 + $ V $ J $ j ! : " % h ! : ? F $ O
6 & a m p : : F / $ - $ r $ 7 $ F $ $ F L k C Y $ / $ ^ $ G
5 " $ C $ F $ 3 $ J $ $ ! # = 1 B ) B 1 = 1 B =
$ B $ D < e $ N 7 : : $ O ! : " : # G / $ + $ i 0 1 ? M J k $ i
$ 7 $ @ ! # = 1 B ) B = 1 B $ B % h ! : ? F $ , 5 " $ C $ F $
/ $ k l k = 1 B ) B 9 = 1 B $ B : : A 0 $ ^ $ G ! : " # 2 ? M
$ G % Q = - : ! : 3 =
H $ l $ ? ? 3 =
P $ ) $ ) $ " $ $ k ! # = 1 B ) B & a m p : : n b s p : = 1 B $
B ! : D $ = 3 D $ l $ O ! : " $ I $ A $ i $ + $ H $ $ $ & a m p : :
"
$ H ! : " 2 6 $ 8 $ c $ j $ / $ F ! D ! # = 1 B ) B & a m p : :
n b s p : = 1 B $ B $ H $ K $ + $ / ! : " $ 3 $ N # T % =
7 % c % D $ O B g @ N $ j F | $ @ $ + $ i $ 3 $ = 3 D C e $
k ! : " $ * 5 $ $ K F $ . j $ j $ N $ @ ! : # = 1 B ) B = 1 B $
```

=B)B11=W!-!9\$>J.\$~.\$ \$
"\$-!c\$8\$V!-!11B\$B\$&B)B11=
..pza&f\$Z\$]M@BZ\$|F#.. "-G\$K\$>\$\$B\$
B11=B)B11=#?#\$7\$>\$H^G\$>\$I-D|
=r\$M?..H"-!O\$4P^\$J\$J\$J\$%B\$B\$B11=
B)B11=#?#\$7\$>\$Q\$@\$M.\$\$D E^<B\$B\$B11=
W!-!*(C\$)%>%H%3%*%M!..?..*H!..*!..M\$
\$\$-M\$-\$G\$!..*%\$*\$*C\$!..*\$*\$V!..*B\$B\$B)B
1=W!-!9\$&D2110?..pza&3\$@"-!
O\$T\$C\$H\$K\$6\$2\$V!..!..B\$B\$B)B11=#?..?..\$\$
.\$99B"-!O\$M?..?..H\$B\$B11=B)B11=W!-!C\$B\$
@\$S\$J\$S\$S\$S\$5\$S\$T\$C\$Y\$O\$W\$D333@H\$S\$S\$
@\$H\$3\$3\$Z\$A*\$B\$B11=B)B11=W3DW!..#==',H
Z\$M?..?..H(\$Z\$J\$J\$.?..pza&\$H\$G\$D!..\$5!
%1\$5!..G\$D!..\$G\$D3D=D3D=
.\$ZB99B"-!T\$S\$S\$J\$|T\$J\$V!..99B\$B\$Z\$T\$C\$H\$
K\$K\$C\$V!..!..B\$B11=B)B11=#?..?..*H\$!..
#11B)B11=B)B11=W!-!C\$B\$
9\$M\$=\$
\$G\$H\$Z*\$4\$S\$/\$\$D E^<^"-!C\$*\$V!..!..B\$B\$B11=
B)B11=W!-!(\$+\$\$S\$J\$J\$|T\$O@B\$C\$Z\$W3D3D=
'
\$B11=B)B11=#?..?..\$P\$P\$J\$J\$J\$.?..\$1\$d
\$K\$D E^<W!-!(\$!..\$@\$?..?..T\$T\$C\$|T\$J\$V!..99
\$B!..V\$B==

ムーン・リヴァー

「かんぱーい！！」

カチン、と2人のグラスが音を立てる。中に入っているのは、シャンメリー。ただし、ちよつとだけ冒険して、スプーン一杯ずつウォッカをいれてある。

それを一気に飲み干すと、ヨーコは満ち足りた気分になった。

ターキーも食べ、隼人からのプレゼントも貰った。

鮮やかなオレンジ色のワンピース。

すつきりとしたデザインのは、まるで太陽みたいな輝きだ。

「ヨーコみたいだろっ」

隼人が笑った。

「俺の中のヨーコのイメージ。明るくて、人をあつたかくしてくれ
る」

「えーっ。そんなこと言われたら、照れちゃうなあ……」

ヨーコはポツと赤くなった。

「私、人をあつたかくなんで、する？」

「ああ」

隼人が優しく言った。

「少なくとも、俺はヨーコといると、すごくあつたかくなるよ」

ヨーコは恥ずかしそうに下を向いた。

そんな照れた彼女の顔も見たくなくて、隼人は指でヨーコの顎を上に向けさせる。

「ヨーコも、刑事になりたいんだよね？」

聞くと、ヨーコは元気一杯に頷いた。

「うんっ、小さい頃からの夢なの。
刑事になって、色んな事件を解決して、沢山の人を幸せにしたいな、
って」

「ヨーコならできるよ」

隼人がニツコリした。

「俺が言ったんだ。間違いないよ。お前は、最高の刑事になれる」

「やだあ、隼人ったらお世辞うまいんだから！」

「お世辞じゃねーよっ」

そのまま、隼人はヨーコの唇に優しくキスした。

今日のヨーコは、薄いピンクのルージュを引いている。

それが、隼人の一番大好きなヨーコの唇の色だった。他の誰にも似合わない、ヨーコだけの色。

いとしい。

いとしいヨーコ。

隼人は、彼女の黒く真つすぐな髪を手で包み込んだ。優しい時間が流れる。

オーディオから静かに流れている曲は、なぜか「ムーン・リヴァー」
。
泣きだしたくなるような、美しいメロディー。

*

『ムーン・リヴァー？』

エレナは聞いた。隼人が静かに頷いた。

『きれいな曲だぜ。知らない？』

『知らない…』

『オードリー・ヘプバーンの映画に使われてたんだよ』

ここは、薄暗いバーの中。カウンターに並んだ2人のグラスには、

水で割ったシャンパン。

2人とも、酒には弱い。

隼人の口から飛び出した人名に、エレナは思わず吹き出した。

『オードリーって！古くさあい！隼人っぽくないよ』しかし、隼人はただ、そのメロディーに耳を傾けていた。

曲はいよいよサビを迎えようとするところ。

『いい曲だよなあ……』

隼人が言った。

盛り上がるメロディー。

高鳴るヴァイオリンのヴィブラート。

『…隼人、変わったね』

エレナは、ぼつっと言葉を吐き出した。

ミルクティー色の巻き髪が、彼女が俯くと同時に揺れる。

『私が好きだと言った色の髪。』

隼人が好きだと言った色の髪。

少し前まで、隼人とお揃いだった色の髪。

けれど、彼の髪は今、漆黒に変わっている。

それが何だか、彼の心変わりを象徴しているみたいで、エレナは苦しくなった。『どうして……』

彼女は呟いた。

『どうして、レッドイーグルを抜けたの？』

曲は穏やかな静けさを取り戻し、蕩々と流れている。『隼人、レッドイーグルの中で一番強いじゃない。またブルーシャークの奴らが来たら、私達……』

『俺は』

隼人がシャンパンを一口飲んで、答えた。

『もう真っ平なんだよ。喧嘩して、傷つけあって、界限奪い合って。そんなことを続けたって、俺たちは何も変わらない』

『……』

『今のままじゃ、爺さん婆さんになっても殴りあいしてなきゃなん

ねえよ。

俺はそんな人生嫌だ。

仕事について、人の役にたちたい』

エレナが小さく笑った。

『何言ってるんの。』

私達中学も卒業してないし、何度も捕まってるのよ？誰も雇ってな
んか出来ないわよ』

ムーン・リヴァーが、静かに全終止を迎えた。

音の余韻が、バーをふわりと包み込む。

隼人は黙ってグラスを口に運んだ。

カラン。

中で、氷がわずかに溶ける。

『俺、刑事になる』

隼人が言った。

*

「隼人と一緒にいられて、嬉しい…」

「ヨーコ…」

彼女は手を伸ばして隼人の頭を抱いた。

そのまま自分に引き寄せ、唇を寄せる。

優しい、やさしいキス。

とろけてしまいそうに甘い…。

隼人は強くヨーコを抱き締めた。

「俺も」

彼が、彼女の耳元で囁いた。

「ヨーコと一緒にいられて、幸せ。世界一幸せ…」

ムーン・リヴァーが部屋を包み込む。

外では月が、静かに2人の世界を照らしていた。

その少年

「おい隼人!!」

岩波が怒鳴った。

不機嫌な印だ。

隼人は身を固くして、上司の前に棒立ちしている。

彼ですら、岩波のエネルギーには叶わないのだった。

早朝の交番に、刑事である岩波が現れるのは、珍しいことではない。忙しい身でありながら、何故やってくるのだろうか?…答えは、ただ一つ。

隼人を見張るためだ。

「お前、まさかとは思っけどよ」

岩波はズイツと隼人に詰め寄った。

眉間の皺が、くつきりと見える。

「まだ、奴らと接触してんじゃないだろうな?」

「まさか」

隼人はぎこちない笑みを浮かべた。

「あいつらとは、完全に縁が切れてますって」

しかし、岩波は納得しないようだった。

チラホラと隼人を見やりながら、ゆっくりと彼のまわりを歩き始めた。

「…1週間前のことだ。

俺と仲のいいデカが、たまたまこの交番の近くに通りがかってよ。見たんだそうだ。

お前が立川エレナと話してるのを、な」

…やつべえ。

隼人は、顔をしかめた。

あの時は気付かなかったが、見られていたのだ。

エレナは今まで何度も補導されてきた。

この界限では問題児として有名だ。

小学生すら、彼女を知っている。

エレナを扱ってきた刑事なら、遠くからでも彼女を識別できるだろう。

「どうということなのか、説明してもらいてえなあ？

隼人」

岩波の顔が、くつつくのではないかと思うほど接近してきた。

「立川エレナ…確か、“レッドイーグル”のメンバーだったな？」

「…はい」

隼人は岩波を見つめて答えた。

顔同士がくつついてしまわないよう、注意しながら。

「いくら元カノだろうが、お前が容易く接触していい相手じゃねえ筈だ」

岩波が低く唸った。

「お前、忘れたんじゃないだろうな？例の約束」

「忘れてません」

隼人が呟いた。

「ちゃんと覚えてます」

「じゃあ何で立川エレナと喋ってた!？」

ドンツ。

岩波がデスクを叩いた。

デスクが情けない音を立てて軋む。

しかし、隼人はぴくりともしなかつた。

動じることなく上司を見ている。

「…あいつが勝手に来たんスよ」

彼は答えた。

「俺は、…迷惑してます」

岩波の不信の眼差しが、隼人の全身を舐めるように探った。

「例の約束。もう一度言ってみろ。」

そのボンクラ頭に叩き込みなおせ」

隼人は、岩波から目を逸らし、瞼を閉じた。

…わかっている。

岩波と交わした約束は、この身に染みこんでいる。

彼が傍にいてくれたからこそ、隼人は今、警察官として生きているのだ。

元いた暗い世界から足を洗って…。

隼人は目を開け、その言葉を口にした。

「レッドイーグルのことは忘れる。

二度と戻らない。

「二度と接触しない」

「そうだ。わかってんじゃねえか」

岩波が隼人を軽く睨み付けた。

「どうやら、機嫌を直したようだ。」

「今度、立川エレナと接触したら…俺はお前を突き出すぞ。元いた世界にな」

「勘弁してくださいよ」

隼人はふうっ、と息を吐いて微笑んだ。

「俺の生きる世界は、もうここにしか無いんすよ」

「……わかってるよ」

少し間をおいて、岩波が言った。

「お前がこの世界の住人だってことは、俺が一番わかってる」

一瞬の沈黙。

そして。

「…プッ」

こらえきれず、隼人が吹き出した。

「岩波さん、今の似合わないっすよ…っ」

「何がおかしい!?!」

岩波はムキになって怒鳴りつけた。

「お前がシケたこと言うから、わざわざ慰めてやったんだろっが!」

「あ、慰めてくれてたんすか？」

岩波さんに、あんなカッコいいセリフは似合いませんって
隼人はクスクス笑った。

「おい隼人っ。どういう意味だ!？」

怒鳴りながらも、岩波も笑みをたたえている。

なぜか、隼人は憎めない。どんなに彼が減らず口を叩こうと、かわ
いもの思えてしまう。

さっきまでの張り詰めた雰囲気嘘のように、二人は笑い続けた。

久しぶりに笑った岩波は、隼人と出会った日を思い出していた。
あれは、ちょうど今日のような、涼しい夏の朝だった…。

*

それは、二年前のこと。

岩波は、ある殺人事件の犯人を追っていた。

カラオケボックスの裏の空地で、ポリバケツに入れられた男子高校
生の遺体が見つかったのだ。

高校生は、全身アザだらけで、どう見ても暴行を受けたように思え
る。

警察は、早速捜査を開始した。

被疑者として捜査線上に浮上したのは、ろくに学校にも通っていな
い少年達のグループだった。

“レッドイーグル”

少年達は、そう名乗っていた。

市内各地で暴れ回る彼らは、万引きやカツアゲは勿論のこと、店のショーウィンドウや車を破壊したり、暴行に及ぶこともしばしばだった。

ドラッグを使っているのではないかという情報もあった。

岩波は夜中、レッドイーグルのメンバーを探して街をうろつきまわった。

途中、数人の家出中学生を補導した。

しかし、それ以外に収穫は得られない。

レッドイーグルのことを聞くと、若者達は震え上がって、何も話してくれなくなるのだ。

…クソッ。

どこにいる！？

岩波はイライラを募らせながら、街を走り続けた。

東の方から、夜の闇が晴れていく。

紫からピンクへ、ピンクから金色へと、空が色を変えていく。

一息つこうと、岩波は近所の寂しい公園に立ち寄った。

そこは、あまりに人気ひんげのない場所。

公園とは言っても、さびついたブランコしかない。

子供が遊んでいるのを見た例はなかった。

岩波は、ブランコに座れば、それでよかった。

走り回った疲れをとりただけだった。

しかし、ブランコには先客が腰掛けていた…。

人目見て、岩波は戦慄した。

ブランコに座る少年の手が、血で真っ赤に染まっているのに気付いたからだ。

少年は、虚ろな眼をして、ただ座っていた。

岩波の存在にも、気付いていないようだ。

少年の長いくしゃくしゃの髪が、朝の風に揺れている。

岩波の妻が大好きなミルクティーの色に、よく似ていた。

「おい」

岩波は、気持ちを落ち着かせながら、声をかけた。

少年は、全く動かない。

眠っているかのようだ。

しかし、彼の暗い眼は、確かに開いていた。

「お前：“レッドイーグル”か？」

岩波が囁いた。

「…」

少年は、岩波を見ることもせず、かすかに頷いた。

風が吹いた。

夏の朝の、青い大気が、二人の間を通り抜けた。

「お前…その手どうした？」

岩波は、少年にゆっくり歩み寄った。
近づいたら、少年が突然暴れだすかも知れなかった。けれど、岩波は少しもそんなことを考えなかった。

感じたのは、少年の虚ろさだけ。

彼は、「空っぽ」だった。

それが、逆に痛々しかった。

「無視すんなよ」

岩波は呼び掛けた。

「手。血まみれだぞ」

「…」

少年は、石の如く動かない。

その眼は何も見つめてはいない。

「…面倒くせえ奴だな」

ため息をつくとき、岩波は少年の隣のブランコに腰掛けた。

「お前、名前は？」

「…」

「答えろよ。人が聞いてんだからよ」

「…」

「お前が答えるまで、俺はここにいるからな」

岩波は、大声で言った。

本当は早く補導すべきなのだが、できなかつた。

何故？

そう聞かれても、理由などない。

ただ…

傍にいてやりたい。

この、空っぽの少年の傍に…。

パアッ。

急に世界が明るくなった。太陽が薄雲の間から昇ってきたのだ。

キラキラと、輝きながら。

事件発生！

ジリリリリ。

ふいに、交番の電話がけたたましく鳴り響いた。回想にふけていた岩波は、ハッと我に返った。

…思い出に浸るなんて、俺らしくねえな…。
自分で自分に舌打ちする。

一方の隼人はビクツと肩を震わせると、デスク越しに受話器に手を伸ばす。

その無駄のない流線型の動きに、岩波は感心した。

普通の警官に比べ、隼人は身のこなしがいい。

刑事に昇進すれば、間違いなく第一線で活躍できるだろう。

「こちらは武蔵野警察です。どうかされましたか？」

落ち着いた声で、隼人が応対した。

片手にボールペンを握り、メモの準備はバツチリだ。電話の奥からは、焦ったような、泣いているような声が洩れてくる。

何と言っているかは、岩波には聞こえなかった。

しかし、みるみるうちに険しいものに変わっていく隼人の表情から察すると、何か大変なことが起こったようだ。

「…はい。それで、現場はどうなっていますか？

怪我人などの状況は…」

相手を落ち着かせようと、隼人はゆっくり喋ることに気を配った。警察官が慌ててしまえば、現場にいる人はパニックに陥る。

警察官にとって大事なものは、正確な情報を得てから、どう動くべきか指示することだ。

隼人のペン先が、手帳の上を素早く走る。

岩波は、その乱雑な筆跡を覗き込んだ。
なんとか読めた。

『吉駅 通り魔 3人重』

“吉駅”は“吉祥寺駅”、最後の“重”というのは、“重症”のことだろう。

そして…通り魔…。

これは一大事だ。

被害者の救出は勿論、犯人も早く取り押さえなければならない。
一刻を争う。

岩波はサツと携帯電話を取出し、本町署に連絡を入れた。

「…ああ、麗奈か？俺だ。吉祥寺駅前で通り魔だそうだ。

…そうだよ、通り魔だ。

至急現場に刑事を送ってくれ。

…ああ。俺も今から行くから安心しろ」

隼人と岩波が電話を切るのは、ぴったり同時だった。「通り魔です」
隼人が告げた。

「わかってる。今、本町署にも連絡した」
岩波が答えた。

「…行くか？」

「ハイ!!」

機敏に、隼人は頷いた。

「チャリじゃ遅いつすね。俺のバイク出しますか？」

「アホ。お前と二人乗りする趣味はねえんだよ」

岩波は、軽く部下を睨み付けた。

「俺の車で行くぞ」

一分もしないうちに、二人は黒のローレルに乗り込んでいた。

岩波が運転席、隼人が助手席。

岩波は、腰を下ろすと同時にエンジンをつかした。

ボタンと扉を閉めると、アクセルを踏む。

車は、猛スピードで走りだした。

「岩波さん、シートベルトしてないっすよ」

隼人が驚いた顔で岩波を見る。

「良いんスカ？刑事が道路交通法を無視しても」

「細かいことネチコチ言うなよ」

岩波は涼しい顔だ。

「要するに、事故を起こさなきゃいいんだろ？」

確かに。

事故さえ起きなければ、シートベルトという窮屈なものはいらない。
しかし…。

隼人は苦笑いした。

このローレルは、あちこちへこみ、傷が付いている。岩波は、今まで相当に危険な運転をしてきたに違いない。

「奥さんと娘さん…この車、乗ります？」
隼人は何気なく聞いてみた。

「いや、乗らねえな。

この間の連休も、せっかく俺がドライブに連れてくって言うてやってるのに断るし…

このローレルが古いモデルだから嫌がってるんだろ。女つてのは、贅沢な生き物だよ、全く…」

…嫌がってるのは、車じゃなくて岩波さんの運転だと思えます。

心の中で、隼人は訂正しておいた。

車は、レースカー並の早さで走った。

信号にぶつかりと、前につんのめる程の急ブレーキがかかる。めったに車に酔わない隼人でさえ、胸がムカムカしてきた。

これで一回もスピード違反になったことが無いというのだから、岩波は相当な運の持ち主なのだろう。

車はやがて、駅に続く大通りに飛び出した。

*

「きゃああああっ!!」

「早く救急車を呼んで!早く!!」
あちこちで悲鳴が上がっている。

いったい何が起こったのだろうか？

学校で行われていた部活の夏合宿から帰ってきたヨーコは、電車から降りてきたばかりの、困惑した人の群れに混じっていた。駅ビルの中は人々でごった返し、まるで元旦の神社のような渋滞を引き起こしている。

吉祥寺に長く住んでいるヨーコでも、こんな事態は経験したことがない。

やっこのことで駅ビルの一階　花火の広場と呼ばれる空間に降りると、そこには更に信じられない光景が広がっていた。

いつもは人々が行き交ったり、休憩したり、待ち合わせをしたりしている広場は、様変わりしていた。あちらこちらで呻き声や泣き叫ぶ声がある。

ヨーコは、泣き声を上げている一団の一つを、チラッと見た。

そして、恐ろしい真実を知った。

野次馬や友人たちに囲まれて、血まみれの男性が力なく横たわっている。

胸を刺されたらしく、だらんとした手が虚しく傷を押さえていた。血は止まっておらず、広場の床に赤く広がっている。

ヨーコは、あまりにショッキングな光景に、思わず口をふさいだ。見渡すと、同じように傷を負って倒れている人が沢山目に入ってきた。

取り囲む人たちは騒然とし、あるいはパニックに陥って悲鳴を上げている。

「ケンイチ、しつかりしろ!!」

「お願い、目を開けてえっ!!」

「早く、はやく誰か救急車を…!!」

小さい子が恐がって泣きじゃくるのも聞こえる。

そんな中、ヨーコは広場に駆け込んできた人物に目を吸い寄せられた。

長身、黒い髪、綺麗な横顔、まつすぐな表情…。

見間違えるはずもない。

だって、彼はヨーコが好きな人だから。

ヨーコを安心させてくれる人だから…。

「隼人!!」

ヨーコが叫んだ。

通り魔の被害者

「はやと!!!」

ヨーコは叫んだ。

花火の広場に駆け付けてきた、警察官。

間違いない。

隼人だ。

しかし、周りの騒動に掻き消される彼女の声に、隼人は気付かない。上司らしき、いかつい顔の男と共に、ヨーコとは反対の方向へと走っていく。

43

ほぼ同時に、他の警察官もバラバラと走り込んできた。

「皆さん、おちついて!」「落ち着いて下さい!」

「怪我人はどこですか?」

外からは、救急車のサイレンが聞こえてきた。

「一体、何が…」

ぼんやりとヨーコは呟く。近くで怯えていた小太りのおばさんが、答えてくれた。

「あら、何も知らないの?通り魔よ」

「通り魔…?」

「15分ほど前だったかしらねえ。
黒ずくめの男が、いきなり叫びながら走ってきて…次々に人を刺したのよ」

おばさんは恐ろしそうに身を震わせた。

「怖かったわ。わたしの隣を歩いていた人も刺されたの」

「…！」

ヨーコも、ゾツとした。

通り魔は、無差別に人を襲う。

いつ自分が被害者になっても、おかしくはないのだ。

「その通り魔、捕まったんですか？」

ヨーコは、おばさんに訊ねてみた。

「今は、もういないみたいですけど…」

「逃げたのよ」

おばさんが顔をしかめた。「取り押さえようとした人もいたんだけどね。」

…ほら、あの男の人」

おばさんが指し示したのは、血の海の中に倒れている若い男だった。金髪に、ピアスだらけの耳たぶ。

腕には龍の刺青まである。ヤンキーにしか見えないな、というのがヨーコの第一印象だった。

しかし、その若者は、もうびくりとも動かなかった。自分の血に浸かって、仰向けに倒れている。

眼は開いたままだったが、もう死んでいるのは誰の目にも明らかだった。

「あの人はねえ、勇敢だったよ」

おばさんがポツリと言った。

「犯人が恐ろしくて、誰も取り押さえられなかったのに、あの人は立ち向かったのよ」

「でも、刺されてしまったんですね……」

ヨーコは、若者の死体から目を逸らしながら呟いた。見ているのが、つらい。

こんなショッキングな光景に出くわしたことは、今まで無かった。辺りに漂う血の匂いに、吐き気すら覚えた。

広場は、黄色いテープで塞がれていき、外からの通行はシャットダウンされた。

次々に救急車が到着し、担架が運ばれてくる。

傷ついた人たちは、周りの人々に抱きかかえられて担架に乗せられた。

警察官たちは、そこかしこで事情聴取を行っている。ヨーコは、ハンカチで口と鼻をふさいだまま背伸びして、隼人を探した。

こんな時、ちょっとでもいいから声をかけてもらえたら。

そうしたら、この吐き気も、きつと安心に変わる。

隼人の仕事の邪魔をしてはいけないと解ってはいるものの、ヨーコは心から彼を求めている。

*

「通り魔は、逃げたんですよ」

おじいさんが、ゼイゼイと言った。

「…逃げた？」
隼人が、表情を暗くする。誰も取り押さえることは出来なかったの
だろう。
それにしても、逃げられたとなると危険だ。
第二、第三の事件が起こるかもしれない。

「どちらの方向に逃げましたか？駅ビルの外？中？」隼人は早口で
聞いた。

「あっちの方です」
おじいさんは、駅ビルの奥を指さした。
その方向には、スーパーマーケットや惣菜売場が並んでいるはずだ。
今は朝早いのでオープンしていないだろうが、もう少しすれば人が
増えてくる。そんな場所に犯人が潜んでいたら、大変だ。

「ご協力ありがとうございました！」
そそくさとお礼を言うと、隼人は走りだそうとした。しかし、おじ
いさんがパツと隼人の腕をつかんだ。

「やめなさい！」
おじいさんは、真剣な顔で隼人を見据えていた。

「えっ…でも、早く捕まえないと」
隼人は困惑して、おじいさんを見つめる。

おじいさんは、隼人をつかむ手に力をこめながら、一生懸命にひき
とめた。

「行つてはならん！！」
殺されてしまう！あの人のように…」

「あの人？」

隼人は訝しげに、おじいさんの視線を追った。

そこには、血だまりの中に倒れる男の姿があった。

*

「おい…あの死んでる男は…もしかして」

ヨークの近くで、男子高校生の一団がヒソヒソ話し始めた。

「なあ、あいつだよな？」 「ああ…間違いねえよ」

ヨークは気になって、耳をそばだてた。

もし重要な情報が得られたら、隼人に教えてあげなくてはならない。しかし、高校生達は更に声をひそめて喋っている。

子音ばかりが聞こえ、何を話しているかはわからなかった。

「あの…」

ヨークは遠慮がちに話し掛けた。

「ちょっといいですか？」

男子高校生たちは、一斉に飛び上がり、パツと振り返る。

どうやら、相当驚いたようだ。

しかし、声の主が女子高生だとわかると、ホツとしたように肩を下ろした。

「あの殺された人、誰なんですか？」

今、話してみたいですけど」

ヨークは小さな声で聞いた。

ヒソヒソ話していた高校生達の様子から考えても、堂々と聞くのはやめたほうが良さそうだった。

「知らねえのかよ、お前。あいつ有名人だぞ」

高校生の一人が眉をひそめる。

もう一人が、しげしげとヨーコを見つめてきた。

「お前、遊んでなさそうな女子だしな。」

知らなくても不思議じゃねえかもな」

ヨーコは首を傾げ、高校生達を見つめ返した。

何の話をしているのやら、さっぱりわからない。

すると、とりわけチャライ男子高校生が、ヨーコに手招きした。

「耳貸せよ」

言われるがまま、ヨーコは彼に近づく。

もし耳に息を吹き込むような悪戯をされたら、ぶん殴ってやるつ…とヨーコは思った。

しかし、高校生は悪戯することも無く、ヨーコの耳元で囁いた。かすかな、消え入りそうな声で。

「…あいつは、坂上竜也。“ブルーシャーク”のリーダーだよ」

「ぶるーしゃーく?」

思わずヨーコは聞き返す。すると、男子高校生たちは飛び上がってヨーコの口をふさいだ。

「バカ!大声だすなっ」

「でも…」

ヨークは仕方なくヒソヒソ声になった。

「ブルーシャークって？」

「有名なグループさ」

高校生が答えた。

「ミニチュア暴力団みたいなものだ。レッドイーグルと対峙してる」

何が何だか、ヨークにはわからない。

けれど、有力な情報を得ることはできた。

…早く隼人に伝えなきゃ。

ヨークは、男子高校生たちにお礼も言わず、駆け出した。

痛みを与える言葉

「なんだよ、あいつ」

駆けていくヨークの後ろ姿を見つめながら、男子高校生の一人が呟いた。

「礼くらい言えっつの」

「まあまあ、拓人」

もう一人がなだめる。

「解ってないんだよ、あのコは。ブルーシャークもレッドイーグルも知らないんだから」

「…そうだな」

拓人と呼ばれた高校生は、ガムを噛みながらヨークを目で追っている。

「あいつ、本当に無知なんだな。そのうち痛い目にあっぜ」

「俺たちには関係ねえよ」別の一人が、肩をすくめた。

*

「あれは…」

隼人は、おじいさんが指し示した人物から目を離せなくなった。死んでいる、その男。

確かに、見覚えがあった。腕の龍の刺青も、金髪も、ジャラジャラのピアスも。隼人の記憶の中にあるのと同じ姿だ。

「坂上…竜也…」

無意識に、その男の名を呟く。

ブルーシャークのリーダーだった筈だ。

何の時だったかは忘れたが、会って話したことだってある。

凶暴な男で、話し始めて数分もしないうちに殴りかかってきた。

もつとも、ずっと昔の話だが…。

「知り合いかい？」

おじいさんが訊ねてきて、ハッと隼人は現実に戻された。

「…イエ」

隼人は、硬直してしまった口元をなんとか上げた。

「気のせい、でした」

訝しげな表情を浮かべたままのおじいさんに頭を下げた。

…嫌な予感がした。

*

「岩波さん、どうしましょう」

派手な口紅。

高いヒール靴。

こんな格好が許されているのは、彼女が「筑摩麗奈」だからだ。

マドンナが現れた瞬間から、現場の警察官たちの目は釘づけになっている。

ある意味、公務執行妨害である。

「どうしましょう、って言われてもよお…」

岩波はため息をついた。

「俺だって途方に暮れてんだよ」

「あらあ、情けない」

マドンナが白い指で岩波をつつく。

「岩波さんなら、何か解決策があるんじゃないかしらって期待してたのに」

「俺に期待するのが悪い」岩波は、あくまでも冷静を装った。

ただし、頬の筋肉がピクツとしたのを、マドンナは見逃さない。

「そんなことないわ。」

あなたは、他の誰よりも信頼できる刑事だもの」

周りの警察官たちが、一斉に岩波をジトツと睨んだ。彼らは、こう思っているのだった。

“…こんなセリフをマドンナに言ってもらえたら、この世は薔薇色だ！”

が、岩波は薔薇色どころではなかった。

マドンナがこんな風に言うのは、必ず岩波を責めている時なのだ。

「一番最初に通報を受けた刑事は、あなたよね。」

一番最初に現場についた刑事もあなた。

当然、犯人を捕まえているかと思っただわ」

微笑むマドンナ。

しかし、言葉は辛辣だ。

「あなたほどもあるう人が、犯人が逃げるのを阻止出来なかったなんて。」

犯人は、よほど知能派ね」

「おいおい、俺は出来る限り急いで来たんだぞ。着いた時には、もう犯人はいなかった。

俺が取り逃がした訳じゃねえからな」

岩波は、イライラと説明した。

マドンナは微笑みを崩さぬまま、続けた。

「私は、あなたより遅く来たにも関わらず、もう犯人の目星はついたわ」

「なに!？」

岩波はギョツとした。

「ビックリしたかしら」

マドンナは楽しむように言った。

「教えてあげましょうか。私の推理」

岩波はブスツとして頷いた。癩だが、聞いてみなければならぬ。マドンナはニツコリし、喋りだした。

「犯人を取り押さえようとして殺された男は、坂上竜也。ブルーシヤークのリーダーよ」

「ブルーシヤーク?」

その名は、岩波もよく知っていた。

レッドイーグルと並んで、街の裏で力を振るう少年たちの集団だ。確か、レッドイーグルとブルーシヤークは敵対していた筈だ。

「ブルーシヤークのリーダーなんて、不良の中の不良よね」

マドンナが言う。

「彼が、通り魔を止めるなんて道徳的な行動に出たなんて、普通なら信じがたい話よ。でも、もし通り魔がレッドイーグルだったら？」

岩波は、目を見開いた。

…そうか…！

「もし、通り魔がレッドイーグルのメンバーだったなら…坂上は、犯人を捕まえて警察に引き渡そうとするだろうな…」

「そのとおりよ」

マドンナが不敵に笑う。

「警察が乗り出せば、レッドイーグルは大胆な行動は出来なくなる。代わりに、ブルーシャークが街を占拠できるわ。」

坂上はそれを見込んで通り魔を止めようとし、逆に刺されたのよ」

「…なるほど…」

岩波は舌を巻いた。

マドンナの言っていることは、理路整然としている。おそらく、犯人はレッドイーグルのメンバーなのだろう。

完全に岩波の負けだ。

「本庁に応援を要請して、はやくレッドイーグルを洗い出さなきゃ」
マドンナの目が、怪しく光った。

「楽しみだわ。今まで手をこまねいてきた不良達を、一網打尽にできると思ったら…ね」

舌なめずりするヒョウウのような表情だった。

*

「隼人ー!!」

ヨーコは、広場の隅にたたずむ彼の姿を見つけた途端、笑顔になった。

仕事を邪魔してはいけないけれど、早く情報を伝えてあげたい。

彼女は、その一心だった。血の跡が生々しく残るフロアを駆け、隼人の元にたどり着く。

しかし、隼人はヨーコに気付いていない様子だった。綺麗な横顔は少し俯きがちになり、眼は宙を見つめている。

「はやと?」

ヨーコは、きよとんとして彼に歩み寄った。

「はーやーとっ」

目の前でブンブン手を振ってみせる。それで、ようやく隼人は我にかえた。

「よっ、ヨーコ?」

隼人はビクツと震えた。

「何でこんなところに?」

「たまたま、よ」

ヨーコは微笑んだ。

学校帰りなのだろう、夏のセーラー服姿だ。紺と白のシンプルな基調に、胸リボンの深紅が映えている。ヨーコによく似合っている。彼女の飾り気の無い、無邪気な表情に、隼人の胸がトクンと鳴る。

「何か考えてたの？」

「ヨーコが聞く。」

「あ、いや…そういう訳じゃないよ。ちょっとボーツとしてただけだ」

隼人は、少し笑ってごまかした。

本当は、深く思い悩んでいた。

けれど、そんなことをヨーコに言う訳にはいかない。ヨーコには心配をかけたくないし、何より、自分の過去を知らせたくない…。

隼人の気持ちを察したのか、ヨーコもそれ以上は聞かなかった。

代わりに、背伸びして隼人の耳元で囁いた。

「実はね、大事なこと聞いたの…」

「？」隼人は瞬きした。

「大事なこと？」

「うん。ちよつとでも隼人の役に立ちたいから、教えに来たの」

ヨーコは、真剣な表情だ。

「あのね。通り魔を止めようとして殺されちゃった人、坂上竜也っていうんだ」

「！」

隼人はビクンとした。

…なぜ。

なぜ、ヨーコがあいつの名前を知ってるんだ？

「ブルーシャークっていう団体のリーダーなの」
「ヨーコが続ける。」

「その団体、ミニチュア暴力団みたいなものらしくってさ。おっかないよね」

「あ…ああ。そうだな…」
「ヨーコの言葉の一つ一つが、ガンガンと隼人に突き刺さる。」

…どうして知ってるんだ、ヨーコ…??

「それでね…」

「ヨーコが、一段と声を落とした。」

「そのブルーシャークが、敵対してるグループがあるの。一応教えるね」

嫌だ、と隼人は思った。

イヤだ。

聞きたくない。

頼む、ヨーコ。

やめてくれ。

お前の口からは、その名前を聞きたくないんだ…。

しかし、ヨーコは隼人が何の反応も出来ずにいるのに気付いていなかった。

「“レッドイーグル”っていうんだ」

「ヨーコが告げた。」

「相当怖い集団みたい。」

「教えてくれた人達も、名前を言うのすら怯えてたから…。」

「…」

「ミニチュア暴力団なんて言われる程、酷いことばかりしてたみたい…そんな人達、私きらい」

ヨーコは言い放った。

その言葉が、どんなに強く隼人に痛みを与えたかなど、知りもせず

に。

「…はやと？」

彼女は、何も反応しない隼人を見上げた。

そして、首を傾げた。

隼人は、唇を噛み締め、うつむいていた。

言い知れぬ痛みが、心臓から血管を巡って、全身に広がっていく。指先までが、ピリピリと痺れている。

痛い。

いたい。

今まで感じた、どんな痛みよりも…。

「隼人、大丈夫…？」

ヨーコが心配そうに隼人の顔を覗き込んでいる。

「具合悪いんじゃない？顔、真っ青だよ。休んだほうがいいよ…？」

「…ごめんな…心配させちゃった」

隼人は、強ばった表情を、何とか笑みに変えた。

「俺は、大丈夫。教えてくれてサンキューな」

本当は、ちっとも大丈夫ではなかった。
痛くて痛くて、たまらなかった。

「ほんとに……？」

なおも、ヨーコは気遣うように見つめてくる。
彼女は背伸びして、隼人の額に手をあてた。

「はやく、隼人が元気になりますように……」

ヨロコに迫る危機（前書き）

更新が遅くなってすみません…（、、）

受験勉強のため、ご了承ください。

ヨーコに迫る危機

駅ビルから出た途端、ひたすら気だるい熱風がヨーコを襲った。カッと照りつける日差し。肌がジリジリと焦げる。

「本当は家まで送ってやりたいんだけどな」
隼人が、固い表情のままヨーコに言った。

通り魔は、どこに潜んでいるかわからない。
駅ビルを搜索中だが、すでに街中に逃げ出してしまっている可能性もある。

こんな危険な時に、ヨーコを一人で出歩かせるのは気掛かりなことだ。

しかし、ヨーコは輝く笑顔を見せた。

「大丈夫よっ。一人で帰れないんじゃない、刑事なんて目指せないでしよっ」

「ヨーコ…」

「心配しないで。隼人は、私なんかより仕事に集中しなきゃ」
威勢よく言うと、ヨーコはバイバイと手を振り、雑踏の中に消えていく。

隼人は、その後ろ姿を黙って見送った。
ざわざわと波のたつ心を抱えたまま…。

…ヨークは。

俺のしてきたことを知ったら、どう思うだろう？

警察官になるまでは、人に暴力をふるい、傷つけてきた。

学校にもろくに行かず、夜の街でほっつき歩いていた自分を、今までと同じように『好き』だと言ってくれるだろうか？？

隼人の脳裏に蘇ったのは、やはり先ほどのヨークの言葉だった。

『私、そんな人きらい…』

…俺のことも、嫌いになるのかな。

そう思うと、隼人は身が凍てついてしまうような気がした。

だから、言えなかった。

自分もレッドイーグルのメンバーだったことを。

*

駅から大分歩いた。

日はますます高く昇り、気温もどんどん高くなる。

暑い…。

肌にピリピリとした痛みを感じたヨークは、日焼け止めを塗ってくるのを忘れたことに気が付いた。

「やばっ。肌、赤くなってる…」

あちゃ、と顔をしかめる。これ以上焼かないためにも、はやく家に着かなければ。

ヨークは足を早めた。

後ろから、不審な影が彼女を見つめているとも知らずに…。

*

岩波は、花火の広場で行われている現場検証の間を塗って、走り回っていた。

一度など、指紋採取をしている監察官たちの中に突っ込んでしまった。

「おい！何やってんだテメ…」

怒鳴りながら振り向いた監察官は、相手が岩波だと気付くなり、言い掛けていた言葉を飲み込んだ。

ガクガク震えながら指紋に顔を戻すとき、

「すいませんでした…」

と小さく呟くのが聞こえた。

岩波は、誰からも恐れられる存在なのだ。

本庁のエリートですら、実績のある岩波には何も言えない時がある。この男を制御できるのは、妻子の他にはマドンナしかいないだろう。

そんな彼は、あわてたように広場を走り回っていた。

目的は、ただ一つ。

隼人を探すためだ。

レッドイーグルとブルーシャークに話が及んだ以上、隼人を頼るの

が最善策だと岩波は直感していた。

もちろん、部下に頼るのは気が進まない。

しかし、犯人逮捕を急がなければ、第二、第三の通り魔事件が発生しないとも限らない。

くだらないプライドは捨て去らなければならないのだ。

しかし、隼人の姿は広場のどこにも見当たらない。

…サボってんじゃないだろうな。

もしそうだったら、タダじゃおかねえぞ。

そんなイライラを、岩波は何とか押さえ込んだ。

*

ヨーコは、家へと続く住宅街の路地を曲がったところだった。

日差しは、相変わらず強く差し込んでくる。

その光を家々の庭の常緑樹が受けとめ、キラキラと照り返す。アスファルトから湯気が立ち上ってくるかのように感じる。

「ゆだつちやいそー…」

ヨーコは、思わずひとりごとを呟いた。

ダラダラと流れる汗を拳で拭う。

彼女は、ハンカチのような女子的小物を持っていない…。

『アイロンかけるのが面倒くさいから』
というのが、その理由である。

隼人は、彼女のこの腐女子ぶりも、個性のうちだと感じているのだ

が…。

その時、背後から車がゆっくり近づいてくる音がした。

*

「どこ行ってたんだ、お前はあぁっ!？」

岩波の大声。

「スイマセン！」

隼人はあわてて頭を下げた。

岩波は、怒らせるとなかなか止まらない。

『言い訳するより、サツサと謝ってしまった方が長引かない』のである。

「…まあいい」

隼人の予測どおり、岩波は落ち着きはじめたようだった。

ここは、花火の広場から少し奥に入ったところ。

井の頭公園への道に抜ける通路だ。

普段は人が激しく絶え間なく行き交っているが、警察が通行止めを行っている今、ここにいるのは岩波と隼人だけだ。

「話がある」

岩波が切り出した。

「…予想はついてます」

隼人が答えた。

「坂上竜也について、聞きたいんすよね」

岩波は頷く。

「その通りだ。警察内部で、やつらに一番詳しいのはお前だからな」

「……」

隼人は、フツと笑ってみせた。

「詳しいって言っても、ここ2年間はいつらと接触してないんで話せることもアテにならないっスよ？」

「かまわない」

岩波は唸った。

「なんでもいい。坂上達也……いや、ブルーシャークとレッドイーグルの関係について教えてくれ。」

今回の事件に繋がりそうなことなら何でもいい！」

*

後ろから近づいてくる、車の気配。

ヨーコは、パツと道の脇に寄って、車が通るスペースを空けた。

こんな住宅街に車が入ってくるなんて、珍しい。

ヨーコはチラッと振り向いて、車を見た。

黒いボディのワゴン車だ。後部座席にはカーテンがひかれ、まるで容疑者を護送する車のよう。

車は、スーツとヨーコの横を通り過ぎていった。

すれ違った瞬間、車の放つ熱気がむわっと襲いかかってきた。

蝉が、急に鳴きはじめた。

ヨーコは首を傾げた。

そのまま行ってしまうだろうと思っていた車は、ほんの3メートルほど先で停車したのだ。

「？」

ヨーコも、つられて歩みを止める。

ボタン。

車の扉が開いた。

そして、中から黒ずくめの男達が飛び出してきた！！

必死のチェイス

ヨーコは、立ちすくんだ。

ワゴン車から飛び出してきたのは、数人の男達。

こんなに暑い日だというのに、目出し帽を被り、全身黒ずくめの出で立ちだ。

…ただ者ではない。

すぐさま危険を察知したヨーコは、本能的に身を翻して駆け出した。野うさぎのような早さだ。

それを見た男達も、一斉に彼女の跡を追って走りだす。

…なぜ追われなければならないのか？

それも解らないまま、ヨーコは必死に脚を動かした。

追手は、明らかに怪しいグループだ。

捕まれば、何をされるか解らない。

ヨーコは、脚に力をこめて走り続けた。

住宅街から出さえすれば、人目のある大通りにたどり着く。

誰かに助けを求められるかも知れない…。

全速力で、走る、走る、走る。

男達が追ってくる足音が迫ってくる。

ヨーコは、もう無我夢中で駆けた。

熱い空気を吸い込む度、肺が焼け付くかのように痛む。息が苦しい。

けれど、立ち止まるわけにはいかない。

耳元で風がビュンビュン鳴っている。

後方からは、車の走行音も聞こえてきた。

恐らく、男達が乗ってきたワゴン車だろう。

もしそうならば、ヨーコがいくら懸命に走っても追いつかれてしまう。

ヨーコは、ありったけの力を振り絞って駆けながら、カバンから携帯電話を引っ張り出した。

画面を見る余裕も無いまま、使い慣れた番号を呼び出す。

「待てオラア!!!」

すぐ後ろで、男の一人が叫び声をあげた。

「止まれエっ!」

「イヤ!」

コールし始めた携帯電話を耳に押しつけながら、ヨーコも叫ぶ。苦しい。

けれど、脚は止めない。

前につんのめりそうになりながら、挫けてしまいそうになりながら、精神力だけで走る。

ふいに携帯電話のコール音が切れた。

“彼”の音が、機械の奥からヨーコの耳に届いた。

『ヨーコ？家に着いたか？』

優しい、彼の声。

それを聞いただけで、ヨーコに力が漲ってくる。

「隼人！助けて！！」

ヨーコは、必死に呼び掛けた。

「追われてるの！！」

『！』

電話口の向こうで、隼人が息を呑んだのが伝わってきた。

『今どこだ！？』

優しい声は、急激に険しいそれに変わる。

「もうすぐ五日市街道に出るわ！」

ヨーコは答え、前方を見た。

50メートルほど先まで行くと、激しく車が行き交っている通りにぶつかる。

五日市街道だ。

この道沿いに出さえすれば、助かるかもしれない…！

その時、ふいに行く手に車が飛び出してきた。

ジープだ。

住宅街には似合わないその車から、黒づくめの男達が3人、次々に姿を現す。

ぎよつとして、ヨーコは立ち止まった。
背後からも黒ずくめの男達が追ってきている。

逃げ場は、ない。

『ヨーコ！どうした、ヨーコ！！』

携帯電話から、隼人の焦った声がもれてくる。

それに答える時間は、もう残されていなかった。

両側から男達が迫る。

とっさに、ヨーコは近くの家のブロック塀によじ登ろうとする。

その脚を、腕を、胴を、男達はわしづかみにして地面に引きずりおろした。

携帯電話が、熱いアスファルトの上に転がった……

*

「ヨーコ！返事しろっ。ヨーコ！！」

隼人は、携帯に怒鳴った。

辺りの空気が、彼の声に静かに震える。

通話口の向こうで、ブツツと音がして電話が切れた。

ツー、ツー、ツー…

虚しい音だけが、隼人をつつみこむ。

「…どうした？」

岩波が怪訝そうに部下を見た。
何か起きていているらしい。それも、よくない何か。

隼人は、歯を食い縛って、乱暴に携帯を閉じた。

バキン！

携帯は大きな音をたてる。

それが合図となったかのように、隼人はダツと駆け出した。

「おい！どこ行くんだ！？」

岩波が叫ぶのが聞こえる。

けれど、隼人は立ち止まらなかった。

ヨーコ。

どうしたんだ？

誰に追われてたんだ？

今、どこにいるんだ？？

隼人は、駅ビルから飛び出した。

近くに止めておいた岩波の車に目をとめる。

黒のローレル。

運良く、鍵はエンジンに刺さったままだ。

「岩波さん、借りますっ！！！」

聞こえるはずもないが、精一杯の大声で叫ぶと、彼は車に乗り込んだ。

…待ってるよ、ヨーク。

すぐに助けてやるからな…！

ヨーコとエレナ

ドサッ。

固く冷たいコンクリートの床に、乱暴に降ろされる。ヨーコは小さく呻き声をあげた。

…あの後。

ジープに連れ込まれたヨーコは、手足を縛られ、目隠しをされた。ジープは発進し、ひた走り続けた。

その時間は、永遠に思えるほど長かった。

もしかしたらほんの短い間だったのかもしれない。しかし、恐怖に苛まされているヨーコにとっては、ただただ、長い時間だった。

「目隠しを解いてやれ」

男の声が出て、誰かの足音が近づいてきた。

コツツ、コツツ。

ハイヒールの音。

ヒンヤリとした細い指が、ヨーコの顔にかかる。身を固くしていると、スツと目隠しが外されて、視界が広がった。

そこは、全面コンクリートに覆われた部屋だった。

天井には、切れかかって点滅する蛍光灯が一本。入り口は一つ。

窓は無い。

向かって左側の壁からは、水が染みだして線を描いていた。どうやら地下室のようだ。

「後は任せるぜ、エレナ」黒ずくめの男が言った。

「ちょっとお、何であたしなのっ？」

ヨーコの傍に屈みこんでいた少女が、抗議の声を上げる。明るい色の、パーマのかかった髪が揺れた。

「男の誰かが、この女に手エ出したら困る」

黒ずくめの男が、ヨーコを顎で示した。

「レッドイーグルには、女はお前しかいねえだろ。女は女が面倒見るよっ」

「何なのよソレ！」

エレナが怒って立ち上がる。

しかし、黒ずくめの男は、クツクツと笑いながら部屋を出ていってしまった。

バターン。

重々しい音と共に鉄のドアが閉まる。

牢屋のような地下室の中には、ヨーコとエレナだけが取り残された。

「……」

エレナは黙ったまま、縛られて動けないでいるヨーコを見下ろした。ヨーコも、エレナを見上げた。

さつき、黒ずくめの男は「レッドイーグル」という名を口にした。

…私は、レッドイーグルに連れ去られたの？

そう思うと、ゾワツとした。花火の広場で、高校生たちが怯えているのを思い出す。

ミニチュア暴力団だと、彼らは声をそろえた。

白に近い、淡いベージュの髪が乱れ、ヨーコの真上で踊っている。ミルクティーみたいな色だ、とヨーコは思った。

「あんたさあ」

エレナが口を開いた。

唇は、グロスのラメでキラキラしている。

「なんで攫われたかわかってる？」

ヨーコは、黙って首を横に振った。

声を出したいとは思っただけけれど、なぜか出来ない。誘拐された恐怖のせいなのか、喉がガサガサに乾燥している。

「ふーん。何も知らないんだあ」

エレナがつぶやいた。

蛍光灯の点滅にあわせて、彼女がまとうспанコールのジャケットが、ガラガラとヨーコの目を焼く。

「あんたを攫ったのは、あいつを呼び出すためよ」

エレナは笑みを浮かべ、ヨーコの顔を覗き込んだ。

「あいつ、きつと慌てるだろうなあ。どういう行動に出るか、見物だわ」

「…あいつ、って…?」
痛む喉の奥から、ヨーコは何か声を絞りだした。
発した声は弱々しく、自分でも情けないと思ってしまう。

「隼人よ」

エレナがニツとした。

「はやと?」

ヨーコは、その名前にぴくんと反応した。

…最愛の人のことを、どうして知ってるの?

エレナは、ヨーコの反応を楽しむように、彼女の顔をじいっと覗き込んだ。

「なーんにも知らないんだ、あいつのコト。彼女のくせに…」

ヨーコの瞳が、微かに揺らいだのを、エレナは見逃さなかった。

こぼれ落ちる髪を荒く後ろに払いのけ、エレナは続けた。

「あんたより、私達の方がずうつと隼人を理解してるよ。」

隼人は、今ちよつと気が変わってるだけだから。

あんたなんか、すぐ捨てられるんじゃないの?」

「…何言ってるのか、よくわかんない」

ヨーコは、震えながらも
はつきりと言った。

「隼人は、あたしのこと大切にしてくれてるもん。」

捨てたりなんてしない!」

「あいつを信じてるの?」エレナは、声を上げて笑った。

「あんた、可哀想な女だねえ。」

いつか裏切られるのが関の山なのにさ」

「隼人は裏切ったりしないっ!!」

ヨーコは、擦れた声を荒げた。

…隼人は、裏切るような人じゃない。

どうして彼の事を知ってるのかは判らないけど、不良集団に何がわかるっていうの？

隼人について、根も葉もないこと言わないで!!

怒りに、ヨーコの唇がわなわなと震えた。

淡いピンクのルージユが、微かに彩りを濃くした。

「……ホントに、可哀想な子……」

エレナが呟いた。

どこかから、水の滴る音が響いていた。

隼人の本性

「可哀想な子…」

エレナが呟いた。

その声は、今までの楽しんでいるかのような響きを失い、ただ虚ろに部屋に染み渡った。

「私は、隼人を信じてる」ヨーコが、強く言った。

「どうしてあなたがそんな事言うのか…私には判らない」

「あんたが隼人を信じてるのは、隼人を知らないからよ」
エレナが冷たく返した。

「あいつの本性を知ってごらん。二度とそんなセリフ吐けなくなるわよ」

「隼人のことをそんな風に言わないでっ！」

ヨーコは怒りに任せて立ち上がるうとした。

けれど、それは出来なかった。

何かが、ヨーコの身体を床に引き止めて離さない。

ヨーコはガクンとコンクリートの床に尻餅をついた。

「…？」

見れば、右足首に錆びた鉄の輪がはめられている。

輪からは太い鉄の鎖が伸び、その先端は壁に打ち込まれている。動くたび、ジャラジャラと不快な音がヨーコを襲った。

「なに、コレ…」

ヨーコは眉をひそめる。

それを見て、エレナがニンマリした。

「犬には鎖をつけとかなないと、逃げ出しちゃうでしょ」

「犬って…」

…あたしのことなの!?

ヨーコは、怒りで目の前が真っ暗になった。

強引に連れ去られ、隼人をバカにされ、おまけにこの仕打ち。どうして、こんな目に遭わなければならないのか。

「そのうちわかるわ」

ヨーコの心を読んだように、エレナが告げた。

「何もかも、ね」

*

「…クソツ!!」

岩波は携帯電話をバキンと閉じた。

「何で出ねえんだよっ、あのガキ!」

ガキとは、もちろん隼人のことだ。

先刻、謎の電話を受けた途端、彼は飛び出して行ってしまった。

岩波は、どうせすぐ戻ってくるだろうと高をくくっていた。

しかし、いつまで待っても、隼人が帰ってくる気配は無い。

イヤな予感が、岩波を襲う。

…まさか、あいつ。

捜査線から一時的に離れ、駅ビルから駆け出る。

嫌な予感、的中した。

停めておいたはずの、岩波のローレルがない。

思い出してみれば、エンジンにキーを差し込んだままだった。

…隼人！！俺の車を勝手に使ったあ、いい度胸してるじゃねえか…。
帰って来たら、ただじゃ済まねえからな！！

ため息をつきながら、岩波は駅ビルに戻っていった。

…まあいい。

必要な情報の大半は、隼人から引き出すことができた。あとは、レ
ツドイーグルと接触するだけだ…。

*

岩波が噴火寸前ということも知らず、隼人は猛スピードで車を走ら
せていた。

シートベルトをしていないことにも気付かない。

彼の頭の中にあるのは、ヨーコ、ヨーコ、ヨーコ、ヨーコ、それだけだった。

電話の向こうでヨーコが叫んだ言葉が、頭の中を駆け巡る。

『もうすぐ五日市街道に出るわ』

五日市街道沿いの住宅地は広範囲に及んでいる。普通なら、これだけでは探しようがない。

しかし、ヨーコがどこで襲われたか、隼人には大体の見当はついていた。

ヨーコは、家に帰ろうとしていた途中だった。

それならば、必然的にヨーコが襲われた場所は、彼女がいつも使っている道に限られる。

隼人は、今まで何度もヨーコを家まで送った経験がある。

だから、彼女の使う道も知っている。

あとは、そこを徹底的に調べあげ、ヨーコが連れ去られた場所を特定するのだ。

しかし、それにしても、何故ヨーコが狙われたのか？

ヨーコを襲ったのは、一体誰なのか？

ヨーコは、無事なのか？

様々な疑問が次々に浮かび、泡のように胸の中で弾けていく。

言いようもない不安を抱えたまま、隼人はローレルを走らせていた。

*

「ねえ、教えてよ」

エレナが高圧的な態度でヨーコを見下ろした。

「隼人って、本当にあんなのこと愛してる？

あんたで遊んでるだけじゃないの？」

「……」

ヨーコは不快さを覚えて、エレナから目を逸らした。どうしてこの少女は、隼人のことをそんな風に言うのだろう。

聞いていて、腹が立ってしょうがない。

「隼人は遊ぶような人じゃないつ。」

何も知らないくせに、メチャクチャなこと言わないで!!」

そんなヨーコに、エレナは冷たい眼ざしを向けただけだった。

「言っただけよ。あたしの方が隼人の本性をわかってるって…当然でしょう？」

あたし、隼人の元カノだまの」

「!!」

ヨーコは、ぎょっとして目を見開いた。

「驚いた？」

エレナが勝ち誇ったように笑う。

しかし、眼は冷たく、少しも笑ってはいなかった。

「あたしは、中学の頃から彼を知ってるの。」

あたしのヴァージンを奪ったのは隼人だし、あいつの童貞を奪ったのはあたし。家になんか帰らずに、ずっと二人で暮らしてたわ。

生活費がなくなったら、仲間と一緒に夜の街に繰り出したし。

弱っちい奴らから金を巻き上げたりもしたわ」

「…」

エレナは得意げに続ける。「隼人って、喧嘩も強いだよ。」

ブルーシャークが吉祥寺界隈からいなくなったのは、隼人を怖がったからよ。

あいつの拳をまともに受けて、失神しない奴はいなかったわ」

「…嘘よ…」

ヨーコは、震える声で否定した。

「うそ。そんなの嘘。
隼人は、そんなことする人じゃない…人を傷つけたりたんか、できる人じゃない。人違いよ！」

エレナが吹き出した。

「あんだ、どこまでも可哀想な子よね…隼人のこと、全然わかってない」

彼女は言葉を切り、羽織っていたレザージャケットの胸元からヒラリと何かを取り出した。

それは、写真だった。

ずいぶんくたびれて、皺がよっている。

エレナは、その写真をスツとヨーコに差し出した。

「…」

全身を細かく震えさせながら、恐る恐る、ヨーコはそれを受け取る。見たくない。

見たいけない。

けれど、エレナが写真を押しつけてくる。

「見る」とでも言わんばかりに。

ヨーコは、恐々と写真に目をやった。

その黒い瞳は、写真の中の人影にピタリと吸い寄せられ、動かなくなる。

そこには、見覚えの無い少年が映っていた。

エレナに似たミルクティー色の髪。

日焼けサロンで焼いた、浅黒い肌。
わざと破った、サイケな色のレザージャケット。
首からは髑髏の形をした、銀のペンダントが下がっている。

その少年の眼は、斬るように冷たく、見下すような高慢な表情を浮かべてカメラを見ている。

彼は、今より少し幼い顔のエレナと共にバイクにまたがり、写真の向こうからヨーコを貫き続ける。

ヨーコは、この少年を知らないかと思いたかった。けれど、彼女は、少年を「知っていた」。
今とは大分違うけれど、写真に写る少年の面影は…。

「はやと…」

ヨーコが、呟いた。

エレナが高笑いした。

その笑いは、コンクリートの部屋中に響き渡り、反響して、ヨーコの耳にガンガンと襲い掛かる。

「そうよ。それが、隼人の本性」

エレナが楽しげに言った。「隼人が、レッドイーグルのメンバーだった頃の写真よ」

隼人の本性（後書き）

ついに、ヨーコちゃんは隼人くんの過去を知ることになりました…。

どうやら、彼女は恐ろしくショックを受けている様子。

それもそのはず、憧れの警察官であり、最愛の人である隼人くんのイメージが、ガラガラと崩れ落ちたんですから。

二人の関係は、どうなってしまうのか…??

次回更新をお楽しみに

『犬』

「隼人が、レッドイーグルのメンバーだった…？」

ヨーコは、信じられない思いで写真を見つめた。

…嘘。

これは悪い嘘よ。

だって、普段の隼人は優しく、真面目で、誠実で…。

この間のデートの時だって、そう。

転んじやったおばあさんを真つ先に助けに行ったのは、隼人だったじゃない。

「隼人が人を傷つけてたなんて、ありえないよ…」

しかし、今現実を目にしているのは、隼人の写真。

今とは似ても似つかないけれど、確かに、彼の写真。

エレナの言葉が嘘ではないことを告げる、証拠。

「これでわかった？」

エレナが言った。

「あんたは、隼人のことを何も知らないんだよ」

「…」

「隼人はね、心変わりするのが早い男だから。今は警察官ぶってても、そのうちこっちに帰ってくるわ。あんたを捨てて、ね」

「…そんな…」

ヨーコの肩が、わずかに揺れた。

うつむいた顔は、黒いミディアムの髪に隠れてしまっている。

「…そんなっ…」

泣いているのだろう、とエレナは思った。当然だ。今まで優しいと、誠実だと思っていた人の、正反対の一面を見せつけられたのだから。

「隼人は、もうすぐここに来るわ」

エレナは、ヨーコの元にしゃがみこみながら言った。

「あんたを攫ったのがレッドイーグルだってこと位、あいつにはすぐ察しがつく筈よ。」

隼人が来たら、あんたは解放してあげる。

あんたは隼人をおびき出す為に攫っただけだから」

「…」

ヨーコは、うつむいたまま細かく震えていた。

何も答えない。

エレナは、勝ちを確信した。

あの写真が、隼人に対するヨーコの気持ちを打ち砕いたことは、明らかだ。

「隼人が来るまで、一人にしといてあげる。その方が良いでしょう？」

吐いたセリフとは裏腹に、エレナの声には優しさは無かった。むしろ、ヨーコを痛め付けるのが楽しくてたまらないという口調だ。

「じゃあね。可哀想な子犬ちゃん…」

спанコールをきらめかせながら、エレナは立ち上がった。

その後ろ姿を見ることもなく、ヨーコはうずくまっていた。

*

刑事たちは必死に搜索したが、ついに駅ビル内で通り魔を見つけ、することはできなかった。

恐らく、野次馬に紛れて逃げてしまったのだろう。刑事たちは、駅前に警察犬を出動させた。

通り魔は、少なからず『返り血』を浴びている筈だ。

血のあとを辿っていけば、犯人を追い詰められるかも知れない。

…そんな捜査線の中で、一人だけ硬直しきっている刑事がいた。

「ちよつとオ、何なのよ鬱陶しい！」

マドンナが声を荒げる。「そんなにくつつかないでっ！！気味悪いわよっ」

周りでは、他の刑事たちが面白そうにこの状況を見ていた。

野次馬の数は、総勢30人といったところだろうか。それもそのはず、マドンナに密着して震えているのは…

「岩波さん！いい加減にしてっ！！」

マドンナが叫び、岩波を突き飛ばした。

「ひいつ！」

岩波は爪先立ちになり、悲鳴にも似た叫びを上げる。

彼のすぐ目の前で、茶色いぶちの警察犬達がグルグルと唸り声を上げた。

「あのねえ、いくら犬が苦手って言っても、限度があるでしょう」
マドンナは呆れ顔だ。

「につ、苦手なんかじゃねえぞっ」
そう言いながらも、岩波は出来るだけ犬達から離れようとして、マドンナの背中の後ろにしがみついている。
「俺に怖いものなんざねえんだよっ…ぎゃあっ！」

とりわけ大きい一匹の警察犬が、威嚇するように歯を向いたのだ。
岩波は飛び上がって、取り囲んでいる部下達の輪に潜り込む。
普段から岩波に怒鳴られている刑事達は、ニヤけながら上司を押し戻した。

再び、野次馬の円の中にいるのは岩波とマドンナだけになった。

「さて、鑑識の人手も足りないことだし…岩波さんにも捜索に参加してもらいましょうね」

マドンナが、優しく微笑みかけた。

『岩波を威嚇した犬』の手綱を、彼の手に押しつける。

「怖いものは何にも無いんでしょう？」
それじゃ、警察犬とお仕事だっつて簡単よねーえ？」

マドンナの笑顔の下に隠された蛇のキバは、確実に岩波に突き刺

さった。

「あつ、あつたりめえじゃねえか」

震えながらも、何とか彼は言った。

口元がヒクヒク痙攣している。

「俺の手にかかりゃ、こつ、こんな犬つコロなんて…」

次の瞬間。

岩波を取り囲む刑事達は、犬の眼が鋭く、キラーンと光るのを見た。

タンツ。

犬のたくましい脚が、アスファルトを蹴る。

犬の巨大な体が、大きく伸び上がる。

そして…

「ぐわあああ〜!!!」

岩波の叫びが、天にこだました。

彼のズボンの尻部分は噛み裂かれ、女性にとっては見たくない部分がチラリと見えている。

犬は、すました顔をして彼の脇に着地した。

これには、周囲の刑事達も大爆笑だった。

マドンナなどは、笑いすぎて大きな瞳に涙を浮かべている。

彼女は、座って尻尾を振っている犬の頭を撫でた。

「よっぼど岩波さんが気に入ったみたいね。

この子、普段は大人しいのよ。
ねえ、マルグレーテ？」

「マルグレーテ!？」

岩波が目を剥いた。

「何だっ、その名前は!」

「この犬の名前よ」

マドンナが答えた。

「血統書付きの、立派な犬なんだから。」

本名はマルグレーテ「セミラミスっていうの」

∴メス犬!?!?

尻を押さえながら、岩波は唾然とした。

こんなに獰猛なメス犬は、初めて見た。

「じゃあ、岩波さん。」

マルグレーテと一緒に、犯人を追ってちょうだい」

マドンナが言った。

「え”ッ!？」

岩波はたじろいだ。

「この犬と、か?それは、ちょっといただけねえな……」

キラリ。

マルグレーテの眼が、再び怪しく光った。

まもなく、岩波が第二の叫び声をあげたのは言うまでもない……。

*

隼人は、その建物の前に、静かに車を止めた。

廃校になった小学校。

隼人がメンバーだった時、ここはレッドイーグルのアジトだった。

あれから、もう二年が経過している。

レッドイーグルが拠点を変えていないということが、ありえるだろうか？

疑問を胸に秘めながらも、隼人は車を降り、ひからびた校庭に足を踏み入れた。

足下で、砂の塊がザクツと音をたてた。

…隼人は、ヨーコを襲ったのがレッドイーグルであることを確信していた。

ヨーコが襲われたのは、駅ビルでブルーシャークのリーダーが殺された直後のことだ。

ここでまず、レッドイーグルの関連が疑われる。

更に、何故ヨーコをターゲットにしたのかを考えると、どうしても推論は隼人自身に帰結するのだった。

…ヨーコは、俺と付き合っていたから襲われたんだ…。

ヨーコとレッドイーグルを結び付けるもの それは、隼人以外にはない。

…レッドイーグルの狙いはヨーコじゃない。

…俺だ。

俺のせいで、ヨーコは狙われたんだ…。

隼人は、歩きながら唇を噛み締めた。

確かに、二度とレッドイーグルに接触しない、と岩波と約束した。けれど、大切な人が奪われてしまった今、その約束は隼人に何の効力も持たない。

彼は、ダツと走りだした。

…ヨーコ。

彼女を想うだけで、苦しくなる。

レッドイーグルに、傷つけられていないだろうか。

もしかしたら、ヨーコは隼人の過去を教えられてしまったかも知れない。

それを知った時の彼女の反応を想像すると、胸に重しが乗って締め付けてくるような心地がする。

それでも、隼人は走る速度を緩めなかった。

たとえヨーコに拒絶されようと、隼人は彼女を守りたかった。

これは当然、警察官としての義務感から生じるものではなかった。隼人の正義感から生じるものだった。

…ヨーコが、二度と俺と会うことが無くなったとしても。

俺は、あいつを守りたい…！！

誰もいない校舎内に飛び込む。

汚らしい床には埃が分厚く積もり、走るたびにモウモウと舞い上がった。

隼人は、地下へと向かう階段を駆け降りた。

もし、レッドイーグルが二年前と同じ場所を拠点にしているのなら、彼らは理科室にいるはずだ。

階段を一気に6段飛び降りる。

隼人は、持ち前の運動神経で難なく着地した。

地下一階。

階段の踊り場を右に曲がると、理科室への廊下にでる。

闇に包まれた廊下の突き当たりからは、ぼんやりとオレンジの光が漏れている。アルコールランプでも灯しているのだろうか。

…いた。

隼人の勘は、当たっていた。

息を整えることもせず、彼は真っすぐ突っ込んでいった。

「ヨーコ!」

隼人の危機

「ヨーコ!」

バーンッ。

理科室の扉が、大きな音を立てて開いた。扉は壁にぶつかって跳ね返る。

隼人は、息を切らして立ち尽くした。

…そこには、誰もいなかった。

がらんとした理科室。

気味の悪い人体模型。

埃がドロドロにこびり付いたフラスコ。

かつて小学生が班に分かれて実験したであろう12台のテーブルそれぞれに、アルコールランプが一つずつ置かれ、朧気な光を放っていた。

隼人は、狐につままれたような心地で部屋の中央に歩いていった。

カッン、カッン…

彼が歩むのと同時に、足音が凜と響き渡る。

炎に照らしだされた隼人の影は、幾重にも壁に映った。

アジトは、気味悪いほどに二年前と全く同じだった。何も変わっていない。

アルコールランプの位置さえも。

違っているのは、レッドイーグルのメンバーがいないことだけ。

隼人は、注意深くアルコールランプを見つめた。

まだ、アルコールはたっぷり入っている。

それは、レッドイーグルが近くに潜んでいることを示していた。

隼人は、理科室の隅にある鉄の扉に目を向けた。

そこは、昔は理科倉庫として使われていた。

レッドイーグルが学校を占拠してからは、違う用途に用いられた。

例えば、敵グループの『捕虜』を閉じ込めて拷問し、情報を吐かせた。

その扉を見た瞬間、激しい嫌悪感が隼人を貫いた。

ここで行われていたことに対してでもあるが、何より、それに自分が関わっていたという事実が、恐ろしかった。

しかし、ここしかあり得ない。

隼人の大切な人がいるとしたら…。

隼人は、その扉を押し開いた。

扉に、鍵はかかっていたいなかった。

まるで、入ってくれと言わんばかりに。

ギイイ…

ゆっくりと、重い扉が開いていく。

その向こうに、『彼女』の姿が見えた。

「ヨーコー！」

隼人は思わず大きな声を上げた。

コンクリートの部屋の中に駆け込む。

「はよと…?」

うずくまっていたヨーコは、ハッと顔を上げた。

「ヨーコっ!!」

もう一度叫ぶと、隼人は彼女をしっかりと抱き締めた。

「大丈夫か? ケガは!??」

「…うん。大丈夫」

小さく鼻を噉り、ヨーコが隼人にギュッと抱きつく。

「ごめんね。仕事だったのに…」

「バカ。そんなのどうでもいいんだよ」

隼人は、ヨーコが無事だったことにホツとし、彼女の真つすぐな黒髪を撫でた。「ヨーコが無事なら、俺はそれでいいんだ」

「隼人…」

ヨーコは、泣きそうな顔をして隼人を見上げる。

「怖かったっ…」

「もう大丈夫だから」

隼人は、優しく声をかけた。

「ちよっと待ってる。そんな鎖、すぐに外してやるから」

その時だった。

「外せるモンなら、外してみるオっ!!」

バーンッ!!

いきなり扉が開き、理科室から棒を持った男が飛び掛かってきた。棒は真つすぐ、隼人めがけてり下ろされる。

「やつ…!!」

ヨーコは、思わず顔を覆った。

…絶対に、隼人はやられてしまう!!

しかし、隼人は冷静だった。

振り下ろされた棒を後ろ手で受けとめると、そのまま軽く突く。

「ぐあつ!!」

男は、自分の持っていた棒で腹を突かれ、仰向けに吹っ飛んだ。

ドサツ、と男が倒れる。それと同時に、隼人はサツと立ち上がった。

「うわああああ!!」

雄叫びを上げ、次の男が素手で向かってくる。

隼人は、男の腕を掴んで一捻りした。

この男も、あっけなく飛ばされた。

「まだいるんだろ?」

隼人は、理科室の暗闇に向かって叫んだ。

「来いよ。ヨーコをこんな目に遭わせた奴は、許さねえから」

その声に応えるように、闇の中からフウツと人影が湧いて出た。10人はいるだろうか。

それぞれが鉄パイプやらバットを手にしている。

色とりどりの髪はボサボサで、数人はガムをクチャクチャやりなが

らこちらを睨み付けていた。

「はっ、隼人!!!」

ヨーコは焦って呼び掛けた。

「無茶だよ!こんな大人数相手にしたら、隼人が…」

しかし、隼人は手を上げてヨーコを制した。

「大丈夫だから、ヨーコ。心配すんな」

「でも…」

ヨーコが何も言わないうちに、バットを手にした男がズイツと前
に出てきた。「久しぶりだなあ、隼人よお」

「…」

隼人は、答えない。

じつと男を見つめた。

「覚えてねえのか?俺のこと。白井だよ、白井。レッドイーグルの
リーダーだよっ」

白井は、鼻息荒く隼人に迫った。

「…お前よオ、一人で俺らを相手にする気か?」

「…」

隼人は、静かに頷いた。

「死ぬぜ?」

白井が、ハンツと笑い、ガムを吐き捨てる。

その言葉に、ヨーコの全身がゾクリとした。
あわてて叫ぶ。

「隼人っ！やめて！！私のことはもういいから、早く逃げてっ！！」

けれども、隼人は動かない。

それどころか、臼井に向かって微笑んだ。

「俺は、戦う気はない」

「…んだと？」

「俺は、警察官だから。喧嘩なんて出来ねえよ」

「…」

臼井の顔が激しく歪むのを、ヨークは見た。

隼人は続ける。

「ヨークは、返してもらおう。俺に用があるなら、最初から俺ンとこに来いよ。」

…関係ないヨークに手を出すなんて卑怯、俺は絶対に許さねえ」

「なんだとオラア！！」

早くもキレた臼井は、バツと隼人の胸ぐらを掴んだ。「殺すぞ！」

「やめてえっ！！」

ヨークが、半狂乱で金切り声を上げる。

「隼人を傷つけないでえっ！！」

立ち上がるうとするものの、鎖が邪魔してできない。

ヨークは、少しでも隼人に近寄ろうと必死に身を乗り出した。

「隼人！はやと！！」

ヨークの叫びも虚しく、臼井の拳が隼人に襲い掛かった。

隼人はとっさに顔を逸らしたが、強烈なパンチを右頬に受け、床に

転がる。

「隼人っ!!!」

ヨーコの眼から、涙が溢れてきた。

「いやあっ…!」

臼井は再び拳を振り上げる…!!

「やめてええええっ!!!」 ヨーコの叫びが、空気をつんざいた。

許さない

「おいこらっ、犬コロ！止まるんだ！俺の言うことを聞けッ」

岩波ががなりたてる。

しかし、その犬 マルグレーテは、全く聞く素振りを見せなかった。それどころか、鋭い目を光らせながら、恨めしそうに岩波を睨み付ける。

「な、なんだ？その目はっ」

相手が犬だというのに、いや犬だからか、岩波はたじろいだ。

先刻、いやというほど尻を噛まれた。痛いわ、恥ずかしいわ、ズボンも履き替えなければならぬわ、もう二度とあんな目には遭いたくない。仕方なく、岩波はマルグレーテに従うことにした。

あの岩波にとって屈辱的な『噛み付き事件』の後、駅ビルで『血の匂い』を嗅がされたマルグレーテは、その場で二、三回ぐるぐる回ったかと思うと、すぐに地面に鼻をこすりつけ、匂いの痕跡を辿りはじめた。そのスピードは普通の警察犬よりもはるか速い。手綱を握る岩波は、マルグレーテについていくのに小走りしなければならぬ程だ。噛み付く癖さえなければ、最高の警察犬の一匹と言えるだろう。

マルグレーテは岩波を引っ張りながら、あちらの道からこちらの道へ、こちらの道からあちらの道へと、迷うことなく進んでいく。商店街、住宅街、大通り、細い路地。岩波とマルグレーテが駆け抜ける度、道行く人々は何事だろうと振り返った。ものすごいスピー

ドだ。血の匂いは、それだけ強い痕跡を残しているのだ。

タフな岩波も、さすがに息が荒くなってきた。しかし、少しでも走る速度を落とすと、マルグレーテがぐいぐいと引っ張る。その強さに、岩波は何度も前につんのめった。

「おいっ、待てっ。待てったら!!」

岩波は叫ぶ。しかし、マルグレーテは止まらない。口を開け、舌を垂らし、ハツハツと興奮した息遣いを見せている。そして、ちぎれるくらい尻尾を振っている。まるで、犯人を追うことを楽しんでいるかのようだ。

「くっそおっ。犬コロになんざ負けねえぞ!!」

岩波は怒鳴った。

…ハタから見れば、かなり怪しい人間である…。

*

「やめてええええっ!!」

ヨーコの金切り声が、理科室中にこだまする。

臼井の拳は、真っ正面から隼人の顔面に飛んでいく。

「いやあっ!!」

ヨーコは無我夢中で身を乗り出した。少しでも隼人に近付けるように。

ボグッ。

鈍い音がした。

隼人が跳ねるように立ち上がると同時に、臼井の身体が宙を飛ぶ。一連の動きは、あまりに滑らかで、スローモーションを思わせた。

ドサアッ！！

派手な音を立て、臼井が床に転がった。うつぶせに倒れ、ぴくりとも動かない。

「ひいっ！！」

後ろで様子を見守っていたレッドイーグルのメンバー達は、悲鳴を上げて後ずさった。

「…次の相手は誰だ？」

隼人が、切れた唇から流れ出す血を拭いながら言った。臼井に殴られる寸前で身をかわし、逆に相手を投げ飛ばしたのだ。

右頬からも血を流している。その眼光の鋭さに、レッドイーグルは震え上がった。

臼井は、グループの中で一番強靱な体格の持ち主だ。そんなライダーが倒された今、隼人に抵抗しようとする者は誰もいない。我先にと、理科室を駆け出ていく。

あっという間に、アジトはがらんどうになった。残っているのは、気絶して倒れている臼井だけだ。

隼人はかがみこんで、臼井のジーンズにぶら下がっているチェーンに手をかけた。チェーンから、スルリと何かを引き抜く。隼人が振り向いた時、それが鎖の鍵であることをヨーコは知った。

「ほら…」

隼人は、ヨーコの足元にかがみこんだ。カチャカチャッと鍵の回

る音がして、静かに鎖が外れる。

「ありがとう…」

弱々しく擦れた声で、ヨークは微笑んだ。その身体は、まだ少しガタガタと震えていた。ゆっくりと足を鎖から離し、立ち上がる。

「本当に大丈夫か？」

隼人は、不安げに聞いて、手を貸そうとした。ヨークが、ふらふらしているように思えたからだ。

しかし、ヨークはその手を止めた。

「大丈夫」

顔中でニツコリして、そう告げる。

「こんなことでナヨナヨしてたら、とてもじゃないけど刑事になんかなれないよっ。あたしのは、気にしないで」

「…ヨーク」

その笑顔が『貼り付けられた物』のような気がして、隼人は伸ばしかけていた手をひっこめた。

一方、ヨークは服の埃を、勢い良くパンパンツとはたく。おかげで、隼人も埃を浴びた。

「帰ろっ。隼人も、まだ仕事途中なんだから。早く戻ないと怒られるよっ」

「怒られねーよ」

隼人が言った。

「俺、遊んでたわけじゃねえもん。これも警察官の仕事のうちだろっ」

「それでも、よ」

ヨークが強く彼を見つめた。

「今度は、通り魔の方を片付けなきゃ。…隼人にしか出来ない、大

切な仕事でしょ？」

その刹那、隼人の唇がピクツと動いた。

…隼人にしか出来ない、大切な仕事。

その言葉は、今まで何度もヨーコの口から語られてきた。まだ高校生であるヨーコが、仕事に向かう隼人を勇気づけるために使う言葉。大好きな彼が、精一杯働くことができるようにと祈る言葉。別れ際に、必ずヨーコが囁く、隼人にとっての『御守り』。

しかし、今は。

今は、その言葉から、いつもの暖かさが感じられないのだ。考えたくない『ある可能性』に思い当たり、隼人は怖くて怖くてたまらなくなる。

「ヨーコ、お前もしかして…聞いたのか？」

「何を？」

「…」

隼人は、口籠もってしまった。自分らしくないとイライラしながらも、いざ聞こうと思うと出来ない。自分の過去を、ヨーコが知るのが怖い。知られた後の、彼女の反応が怖い。この世で一番大切な人が、隼人の前から逃げていってしまうのではないかと思うと、苦しい…。

「隼人…」

隼人が何か言う前に、ヨーコが彼の名を呼んだ。ゆっくりと、その冷えた手を隼人の傷ついた右頬にあてる。そのひんやりとした感

覚は、彼の背骨をゾクツとさせた。

ヨーコはちよつと背伸びして、隼人の頭を抱き締める。そして、その頬に、そつと唇を寄せた。

初めてヨーコから仕掛けたキス。不器用だけれど、ふわふわとマシユマロのような優しい感触を隼人に与える。薄いピンクのルージユが、ちよつぴり隼人の頬に移った。

「ごめんね…」

ゆつくりと唇を離しながら、ヨーコが呟いた。

「全部、聞いちゃった。昔の隼人のこと…」

「…」

覚悟していた瞬間が来たな、と隼人は思った。確かに、ずっと隠し続けてはいられないことではあった。いつかは話さなければならぬと思っていた。

しかし、それがまさかこんな形で伝えることになるうとは…。

「…ごめん」

隼人は俯いた。

「俺、本当は…ヨーコが好いてくれるような人間じゃないんだ」

コンクリートの天井から、ポタツポタツと水が落ちた。

「俺、中学もろくに行つてないし。毎晩ケンカして、金巻き上げてた。…嘘じゃねえよ」

信じられないという顔で隼人を見つめていたヨーコの肩が、びくと震える。それを見て、隼人はもうどうにでもなれという気持ちになり始めた。彼女の中での『隼人』というイメージが崩れ去ってしまったのなら、もう、何も隠すべきことはない。全て喋ってしまった

いたい、と思った。

しかし、いざ口を開こうとすると、言葉が出てこない。全てバレてしまっているというのに、自分を正当化してしまいたくなる。自己を美化し、まだヨークに好かれようとしている自分がいる。もどかしさと情けなさで、隼人は一杯に満たされていた。

すると、ヨークが再び唇を寄せてきた。今度は頬ではなく、隼人の唇に重なる。まるで、隼人の口から出てこない言葉を吸い取ってしまうように、激しく舌を絡めた。

そうしたまま、長い時間が経った。ヨークは、息をつぐために唇を離す。ヨークと隼人、二人の瞳の中に、お互いの姿が映った。

「全部喋って」

ヨークが囁いた。そよ風の如く耳元を吹き抜けたその声は、しかし、凜と力強かった。

「あたし、隼人に隠し事されてたのが一番許せない…」

「…ヨーク」

「教えて。…昔の隼人のこと。今の隼人も、昔の隼人も、大好きでいられるように…」

その少年の名は

『全部話して…』

許さないから。

『何も隠さないで…』

キスの合間の熱い息で、ヨーコは隼人に語りかける。

「教えて…あなたが、何をしたのか」

*

「キャンッ!!」

マルグレーテが、高く可愛らしい声で鳴いた。

「何だ今のは！？共謀な犬コロの癖に、そんな声出しやがって
あ、嘘だぞ。噛むんじゃないやねえ」

岩波は、マルグレーテに合わせて立ち止まった。

周囲は、夏の午後の日差しで満ちていた。吉祥寺から大分離れて
しまった気がする。何しろ、マルグレーテに導かれるままに二時間
程走ったのだ。

今、岩波は閑静な住宅街の一角にたたずんでいる。。古くから続
いてきた町並みなのだろうか、立派な造りの家が多い。どの家も日
本風の木造家屋だ。重厚な瓦屋根の頂には家紋をかたどった鬼瓦。

それぞれの家は、長い白壁の塀を持ち、真ん中には堂々たる門までついている。

そんな家並みの中で、マルグレーテはようやくその足を止めたのだ。一軒の屋敷の前にチヨコンと座り込み、『ここだ！』と叫ぶかのように一声吠える。

「…ここに、通り魔が潜んでるっていうのか？」

目をパチクリさせながら、岩波はマルグレーテに聞く。

「こんな立派な家に、レットイーグルが？そんなバカな…」

岩波は、昔レットイーグルを追った経験から、知っていた。レットイーグルのメンバーの大半は、家に居場所を無くして飛び出してきた子供達だ。路上やカプセルホテル、漫画喫茶で夜を明かす。稀に実家に住んでいるメンバーもいるが、その生活は荒んでいる。こんなきちんと手入れされた屋敷に住んでいるという例は、見たことがない。

「何かの間違いじゃねえのか…？」

思わず、岩波は呟いた。とたんに、マルグレーテが目をむき、グルグルと唸り声をあげ始める。

まるで『あたしが間違ってるなんて言わせないわ』とでも言いたげな表情だ。

「わかったよつ。ここなんだな!？」

少々キレ気味に（恐怖混じりで）岩波が言った。

その屋敷の門には、三角型の屋根までついていた。屋根の表面には苔がむし、夏の熱波に負けて茶色く干からびている。良い木を使って建てたのだろう。門からは微かに、優しい森の香りがした。

表札には、「庄司」とあった。

…庄司？

何かが、岩波の脳裏を掠める。

その名前、どこかで…。

テレビカメラ付きのインターホンを押しながら、彼の意識は記憶の向こうへと潜りこんでいった。あれは、二年前だった。

*

風が、吹き過ぎる。

少年のミルクティー色の髪が、さやさやとそよいだ。

高校生殺害事件を捜査し、レッドイーグルに疑いを持った岩波は、ビルの谷間の公園で、その少年を見つけたのだった。

…手を真っ赤に染めた、空っぽの少年を。

『お前どうした？…その手』

岩波はブランコから身を乗り出し、隣に座っている少年の腕を掴んだ。

『…』

今まで何の反応も示していなかった少年が、びくんと震える。岩波から逃れようと身を引くが、刑事の力強い手は少年を掴んだまま、離さない。

『この手に付いてるのは…血、だろ？』

岩波が言った。

『何をしたんだ？』

『…』

少年は、答えない。唇を噛み締めると、諦めたように身体から力を抜いて、抵抗するのをやめた。

『お前が、殺したのか？』

岩波が聞いた。

『お前が、あの高校生　庄司祐太を殺したのか？』

岩波を見つめる少年の瞳が、わずかに揺れた。

それが何故なのかは、刑事にはわからない。犯した罪を言い当てられて動揺したのか、それとも全く身に覚えのないことを言われて困惑したのか。

少年は、自分に向けられた殺人容疑を認めることも、否定することもしなかった。ただ、黙ったまま、目を伏せる。そのまま、少年はぐったりとうなだれた。岩波は思わず、助け起こすように彼を支える。

『お前が、やったんだな？』

その言葉は、風となって少年の髪をなびかせた。

『お前…』

岩波が唸る。

次の瞬間、彼の手が空気を裂いて、バシッと少年の頬を打った。

『っ！！』

少年は声にならない叫びを上げ、地面に転がる。もわっと土煙が立った。

『大人をナメてんじゃねえぞっ、このガキ!!』

岩波が、少年の頭上から怒鳴り散らした。

『黙ってたらそれで済むと思っただら!?! そうは問屋が下ろさねえっ』

岩波は、少年の胸ぐらを掴んで引き付けた。

『っ……!!』

岩波の剛力に喉を絞められ、少年の顔が苦しげにきゅっと歪む。しかし、声をあげることもしなければ、抵抗することもしない。

その表情が、あまりにも幼くて。

幼すぎて。

岩波は、フツと手を緩めた。

瞬間的に少年は岩波の手から逃れる。けれども、この場から逃げてしまおうという気はないらしく、黙って岩波を見ていた。

『名前は?』

岩波が聞いた。

『それ位は言えんだろ? 名前が無い訳じゃなし』

少年の瞳が、再び揺れた。首を絞めてくる程凶暴なこの男が何者なのか、計りかねているようでもあった。

それを感じ取った岩波は、まず自分から名乗った。『俺は、岩波。吉祥寺本町署の刑事だ』

『…刑事…』

初めて、少年が口をきいた。擦れた声は、しかし、空気を突き抜けてはつきりと通った。

『フン。刑事って知ったら態度変えるのか』

嘲るように岩波が呟く。『いいか。同情ひこうとしたってムダだからな? 俺はもう、お前を補導するって決めてんだぞ』

少年が、瞬きした。岩波はその時初めて、少年が例を見ないほど綺麗に整った顔立ちをしていることに気付いた。

『刑事さんさあ』

少年が呟いた。

『俺から逃げないの？』

『何で逃げる必要がある』 岩波が不敵な笑みを見せる。

『殺人犯だろうがヤクザだろうが、俺は追っぜ。刑事なんだから当然だろ？』

『…』

『お前みたいなヒヨッコから逃げてたら、やってけねーよ』

少年は、静かに岩波を見ていた。しかし、どういう訳か、彼はもう空っぽでは無かった。朝日を受けて、彼の瞳は光を宿し始めていた。

『俺は…隼人』

少年が名乗った。

新しい絆

『…隼人、か』

岩波は息をついて隼人を見つめた。

『ハヤブサの意味だ。すばしっこく、勇敢な男に育つように、ってことか…いい名前だな』

『…別に…』

隼人は視線を落とす。

『よくある名前じゃんか。フツーだよ』

『いや、いい名前だ』

岩波は頑として言い張った。

『なあ、隼人。お前が生まれたとき、お前の両親が何でこの名前をつけたと思う？』

『…知らねーよ』

隼人は、ゆっくりとブランコに腰を下ろした。岩波に殴られた頬は、赤く腫れあがりつつある。

『…親とかどうでもいいし』

そう言った少年の瞳が暗く陰つたのを、岩波は見逃さなかった。

『親とは、うまくいってねえのか？』

『…』

少年は答えず、再び黙り込んだ。ミルクティー色の髪が、小さく風に揺れている。彼の血まみれの手は、隠すようにジーンズのポケットに突っ込まれた。

『なあ。もうだんまりはやめようぜ』

岩波は少年の肩に手をおいた。

『せっかく名前言ってくれたんだしよ。仲良くしようじゃないか』
『仲良く？』

隼人が、クスツと笑った。初めて見せた、微かな笑顔だった。

「オツサン、俺のこと小学生だと思ってる？」

「いや」

岩波は真顔で少年を見た。

「返事もろくに出来ねえ奴は、小学生以下だ」

「なんだよソレ」

隼人は、あどけなさの残る表情でちよつぴり膨れた。

「ナメんじゃねーよ。学校には行ってねえけど、これでも18だぜ、俺」

「ほおー。あんまりガキっぽいもんで、わからなかった。まだ童貞か？」

「ちつ、ちげーよつ。ちゃんと済ませたつて」

「誰と？年上のねーちゃんにでも遊ばれたか？」

「同年の女だよつ。お互い初めてだった。遊ばれてなんかねーし！」

「…で、きちんと男としての役割は果たしたか？」

「最初はムリだったけど、だんだん…つてか、何訊いてんだよ！オツサン刑事だろ！？」

隼人はムキになって、少し赤くなった。

こんな子供が、人を殺したのか？

岩波は、半ば信じられない思いだった。隼人は、頑固で聞き分けは悪いが、根は素直な少年のようだ。どうして、人殺しに手を染めたのだらうか。いや、本当に彼は人を殺したのか？

岩波は、隼人の手をポケットから無理矢理引きだした。隼人は、それに抗うことなく応じた。

「…庄司祐太という高校生を知ってるか？」

刑事が、静かに訊いた。

「彼は、昨日北町のカラオケ店の裏で、ポリバケツに入れられた状態で見つかった。当然、殺された訳だ。俺達警察は、レッドイーグルをずっと疑ってた。レッドイーグルのメンバーが、庄司祐太を殺したんだと…そして、俺はお前を見つけた」

「…」

隼人は、黙って岩波を見上げていた。

岩波は続ける。

「お前の両手は、見てのとおり血まみれだ。どっからどう見ても怪しい。…けどよ、俺は証拠もないのにお前を逮捕する気はねえんだ。…答えてくれ。お前の手は、どうして血まみれなんだ？庄司祐太を殺したからか？それとも、違う理由からか？」

公園を囲む灰色のビルの窓ガラスが、高く昇ってきた朝日に反射して、キラリとした光を、二人の上に投げ掛ける。同時に強く風が吹いて、古く錆付いたブランコをキイキイと軋ませた。

隼人の瞳が、岩波を真っ直ぐに見上げていた。その奥には、何かを必死に求めているような色が、渦巻いていた。

「オッサンさ…」

ガサガサに荒れてしまった少年の唇から、切実な声が漏れた。

「俺の話…聞いてくれんの？」

「ああ」

岩波が答えた。

「人生相談から女の扱い方まで、何でもこい」

「女はいいや。俺、慣れてるし」

悪戯っぽい表情を浮かべて、隼人は立ち上がった。『…いいよ。オッサンになら、何でも話す』

「オッサンと呼ぶな！！」 岩波が一喝した。

『まだそんなに老けたつもりはねえからな。岩波と呼べ』
隼人の口元が、少し微笑んだのを、岩波はしっかりと見た。

都会の真ん中の、ぽつんと取り残されたような場所で、一つの絆が始まったのだった。

後に岩波は、隼人が祐太の事件とは全くの無関係であったことを、知ることになる。そして、今も…祐太を殺した犯人は、捕まっていない。

愛を信じて…

ヨーコは、考えていた。

隼人は、同じようにエレナと付き合っていたの？あたしは、エレナよりも隼人を理解していないの？

隼人に過去を隠されていたという事実は、強い苛立ちとなってヨーコを覆っていた。隼人がレッドイーグルに所属していたことよりも、隠されていたことの方が、ヨーコにはショックだった。

あたしは、どんな隼人でも好きなのに。隼人は、昔のことを喋ったら、あたしが隼人を嫌いになるって思ってる。

そんなにあたしを信じてないの？あたしは、そんなことで嫌いになつたりしないのに。むしろ、隠されてたほうが辛いよ…。

そんな彼女の思いは、次第に鬱憤となつて降り積もつた。

あたしは、隼人の全てを知りたい。何も隠されたくない。過去なんて、どうでもいいから。あたしを信じて、隼人…！！

その時。

すっ、と隼人がヨーコの頬にキスをした。

「!？」

「…こんなとこに連れ込まれて、俺の昔話聞いて…ごめんな、ヨ

ーコ」

「隼人…」

ヨーコは、潤んだ眼差しで、一瞬愛しい人を見つめた。それから

決心したかのように、ぎゅっと隼人に抱きつく。その強さに、隼人は驚いた。

「あたしね、…隼人のこと、知りたいの。じゃなきゃ、気持ちが楽になれない」

「ヨーコ…?」

「何も隠されたくないの。お願い…全部、隼人のことぜんぶ教えて。あたし、隼人が昔何してたか知っても、隼人のこと嫌いになったりしないから」

「…ヨーコ…」

「昔の隼人があったから、今の隼人がいるんだよ。ぜんぶひっくりめて、あたしの大好きな隼人なんだよ。だから、約束して…全部話してくれるって」

ヨーコの瞳は、真剣だった。強い眼光は隼人を奥底から刺し貫く。彼女の気持ちは、痛いほど伝わってきた…。

隼人は、優しく彼女の背に腕を回した。

「…俺、ヨーコに気苦労させてばかりだな」

「…」

「ごめんな。守ってやるとか言いながら、ヨーコを傷つけてる」

ヨーコは、そつと隼人の広い胸に頭を預けた。トクン、トクンと脈打っている、大好きな人の温もり。その暖かさに安心して、ヨーコは目を閉じた。さっきまでの狂おしいまでの気持ちは、自然に鎮められていく。

「ヨーコ」

隼人が囁いた。

「戻ったら、今までのこと、ちゃんと全部話すから。俺は…もう、ヨーコには何も隠さない」

その力強い声の響きに、ヨーコは目を閉じたまま頷いた。

信じてるからね。隼人のこと。

俺も。お前のこと信じてるよ、ヨーコ。

もう、言葉は要らなかつた。ヨークはしっかりと隼人に抱きついたら、目を閉じた。

*

その男の人は。

身にまとっている着物は鶯色で、どこか仙人を思わせた。年の割に老けて見えるのは、二年前に味わった心労のせいだろう。

彼は、変死体となって見つかった高校生・庄司祐太の父親なのだ。

「ご無沙汰してます、庄司 保さん」

マルグレーテを門に繋ぎながら、岩波は頭を下げた。マルグレーテは、すました顔で座って、太い尻尾をゆっくりと振っている。

犬のくせに、猫かぶりやがって！！

岩波は一瞬犬を踏ん付けてやりたい程憎らしく思ったが、それを飲み込んだ。「来るなら言って下さればいいのに。菓子の一つも用意してないもので……」

庄司保は、困った顔で笑った。

「いや、いいんです」

岩波は慌てて言った。

「俺も、ここに来るとは思ってたから」

「は？」

庄司が首を傾げる。

「何でもないっすよ」

口が滑ったのを、サラツと岩波はごまかした。まさか、通り魔を追ってここに辿り着いたとは言えない。

「…上がってもいいですか？祐太君に挨拶しないと」「ああ、どうぞ」

庄司は、ゆつたりと岩波を誘った。

「ちょうど、祐太の従弟も遊びに来てるところです」

*

実験用蛇口からポタツ、ポタツと垂れ落ちる水音が、二人の話し声の合間から響き渡った。

アルコールランプの火が、僅かなすきま風に反応してチラチラと揺れる。火の周りのぼんやりとした明るさは、かえって他の場所に暗い影を落としていた。

そんな闇の中に、彼女は一人蹲って、二人の声を聞いていた。ランプの光に、ミルクティー色の髪が反射する。

「…もう、やめてよ…」

彼女の食い縛った歯の奥から、嗚咽に近い声が洩れた。

「もう、もういいから…やめて…」

レッドイーグルの仲間は、皆逃げてしまった。警察の手が入ることを恐れて、しばらくはここに帰ってこないだろう。それでも、エレナは残っていた。隼人と、きちんと話があった。彼をレッドイーグルに連れ戻すことなど、彼女にとっては、本当はどうでもよかった。

ただ、隼人に会いたかった。家を飛び出してきてから、兄妹のように共に成長した人と。どんなに隼人が心変わりしてしまったても、エレナはずっと変わらない。

隼人が、すき…。

それなのに、彼は遠すぎて。こんなにも近くにいるのに、遠すぎて。もう顔を合わすことすらままならない。

息苦しいほどの哀しみが、エレナを襲っていた。

罪の告白

「こちらにどうぞ」

岩波が通されたのは、八畳ほどのがらんとした和室だった。日本庭園に面しているので、若い松や紅葉を思う存分眺められる。そこはかとなく、香の匂いが和室を包んでいた。

片隅には、小さな木の仏壇がポツンと置かれていた。扉の中で、庄司祐太の遺影が笑っている。ふさふさした髪の持ち主で、利発そうな顔立ちだ。

「祐太。岩波さんが来てくださったよ」

庄司保が、優しく仏壇に声をかける。

「覚えてるかい？事件の犯人を探してくれた刑事さんだよ」
遺影の中の祐太は、勿論答えることはない。ただ黙って笑っているだけだった。しかし、保は満足そうに微笑んだ。まるで、息子が彼に返事をしたとでもいうように。

そんな保を見ていると、岩波はいたたまれない気持ちになった。

「秋の紅葉は、それは綺麗ですよ」

保が、線香を用意しながら和やかに言った。

「祐太に、季節の遷ろいを見せてやりたくてね。この子が死んだ後、庭に新しく紅葉を植えたんです」

「ああ…あの若い紅葉か」 岩波は縁側まで歩いていき、庭園を眺めた。

白い砂を敷き詰めた地面から、細くなよよかとした幹が斜めに伸びている。夏の今は、瑞々しい青い葉をまとっているが、秋にはきつと美しく色付くことだろう。

「もう二年経つのか…」

紅葉を見つめながら、岩波が呟いた。

「すまん。結局、あの事件で、俺は何も出来なかった…今だに、祐太くんを殺した犯人は捕まってない」

紅葉の葉が、柔らかな風にそよいで、涼しげにサヤサヤと音を立てた。

「そんなことないですよ」 保は、静かに畳に正座した。

「…隼人君を助けてあげられたのは、岩波さんだけでしたよ」

「…」

保は、隼人のことをよく知っている。隼人は、当初は祐太殺しの犯人ではないかと疑われていた。その関係で、保は隼人と接触する機会があったのだ。結局、隼人は、祐太の事件には全く関係がなかった。むしろ、別の事件の責任を追及されることになったのだが…。

「事件の頃のあの子は、今思い返しても可哀想になるくらい虚ろだった…そんな彼に、生きる喜びを教えてやれたのは、岩波さんだけでした」

「…」

「祐太の事件があったから、隼人君は岩波さんに出会って、今こうして生きてる。真犯人が見つかっていないのは勿論悔しいですが…あの事件は、決して無益ではなかったと、私は思います」

岩波は紅葉から目を離し、保を振り返った。

保は柔和な微笑みを見せた。しかしその表情の奥には、言い知れぬ哀しみが秘められている。息子を喪った悲しみは、時を経て癒える事はない…。

それを感じて、岩波は深々と頭を下げた。

保は続ける。

「隼人君には迷惑千万な話かもしれませんが」

「？」

「私は　私は、信じているんです。祐太が、隼人君の中に生きています」

「隼人の中に…？」

「ええ」

保が目を閉じて頷いた。「彼には、ずっと幸せでいてほしいんです。祐太の分まで…」

どこからか、鳩の鳴く声が聞こえていた。

「…祐太君に、挨拶してえな」

岩波が呟くと、保は厳かに彼を仏壇へと誘った。

ちょうどその時だった。仏壇脇の障子が、スツと音を立てて開いた。岩波と保は、ほぼ同時に顔を上げる。

「おお、拓人か」

保が嬉しそうな声を上げた。

そこに立っていたのは、制服を着た男の子だった。高校生くらいだろう。ガムを噛み、深緑色のネクタイを緩めながら、驚いたように岩波を見つめている。

「おっさん誰？」

少年が声を発した。髪の色や表情は違うものの、どこか亡き祐太に似ている。

「おっさん、は失礼だな」 岩波は眉根を寄せた。

「初対面の人間には、きちんと挨拶しろよ」

しかし、少年はただガムを噛み、岩波を見つめるだけだった。

「拓人。こちらは、岩波さん。祐太の事件を捜査して本町署の刑事さんだ。礼儀正しくしなさい」

保がため息をつき、それから岩波に向き直った。

「すみません、だらしない奴で」

「そうだな」

「これは、甥の拓人。祐太の従弟です」

*

「もう二年くらい前になるかな…俺さ、ブルーシャークの奴と決闘したことがあったんだ」

ヨーコが制服を着るのを眺めながら、隼人が言った。

「二年前って…レッドイーグルにいた頃？」

ヨーコが聞き返す。

「うん」

隼人は少し俯きがちになった。

…今まで、まさか自分の昔話をヨーコに聞かせる日が来ようとは、

思ってもみなかった。しかし、隼人はもう臆することはない。ヨークを、彼女の愛を、信じる事が出来るから。

「相手は、坂上哲也。今日殺された坂上竜也の、弟だ」

「ブルーシャークのリーダーの…弟？」

ヨークが心配そうに訊ねる。

「やだつ、隼人大丈夫だったの？ケガしなかった？」 「本気で喧嘩したら、俺がケガなんかする訳ねーだろ」

隼人は顔を上げて、ちよつと得意げに笑った。

「まっ、今はもう喧嘩は卒業したけどな」

「…じゃなきや、今頃ぶん殴ってるわよっ」

ヨークがリボンを整えながら、悪戯っぽく隼人の胸をどついた。

「それで？どうなったの？」

「…うん、途中までは普通の喧嘩だったんだけどな」 隼人は、また少し目を伏せた。

「哲也が、ナイフ出してきたんだ」

「えっ…!!」

ヨークが息を呑んだ。ナイフという飛び道具を出してきたということは、もうそれはただの喧嘩ではない。相手を傷つけるか、もしかしたら殺そうという意志を持った闘いだ。

「そ…それで？」

ヨークは、おずおずと聞いた。聞くのが怖い気もした。けれど、話の先が気になってしまう。今まで自分のことを語らなかつた隼人が、初めてヨークに聞かせる話なのだ。きっと彼には、ヨークに伝えておきたい大事なことがある。

「奴が、ナイフを前に突き出して飛び掛かってきたんだ。流石に俺も怖くなって…。それまでも、喧嘩の相手が脅すつもりでナイフを使ってきたことはあつた。だけど、哲也は違った。あいつは、本気だつた…」

隼人の声がだんだん低くなり、小さくなった。彼の眼は、ヨークを見ているようで、見ていながつた。昔のことを思い出しているの

だと、ヨーコにはわかった。

「あの時…俺は、とにかく刺されないことに必死になってた。でも、逃げるのは癪だった。“弱っちい奴に背を向けた”ってレッドイーグルの仲間から言われるのが、想像しただけで嫌だった」

「うん…」

ヨーコは、小さく頷いた。隼人は、負けず嫌いな性格だ。決して困難からも逃げたりはしない。彼が一番嫌うのは、『逃げる』ことなのだ。

「…けど、そんなのはつまらない意地に過ぎなかったんだ。哲也が向かってきた時、俺はナイフをかわして、あいつともつれあって。そしたら…」

言葉が、そこで途切れた。

「隼人…？」

ヨーコは、不安げに隼人を見上げる。隼人は目を伏せたまま、言葉を探るように瞬きを繰り返していた。

「はやく」

ヨーコは、そっと手を伸ばし、恋人の手を握った。激しく愛し合った余韻で、まだ火照ったように熱いヨーコの掌は、氷のように冷えきっている隼人の指を包み込み、優しく温めていく。

「大丈夫よ」 ヨーコが囁いた。

「どんな隼人でも、あたしは受けとめるから。大好きだから…」
その声に反応して、隼人が小さく頷く。

「ありがとう。ヨーコ」

「話せそう？」

「ああ」

彼は、深く息を吸い、それを吐き出すかのように言葉を洩らした。
「気付いた時には、遅かったんだ」

「…」

「纏れあった時、何かがくるったんだ。気付いた時には、ナイフが、哲也の胸に刺さってた…左胸に。あいつは、即死だった」

信じるという事

「あいつは、即死だった」

隼人は、吐き出すように言った。

「呼び掛けても揺すっても、全然動かなくて。辺り一面、血だらけで…俺が殺したんだって解った瞬間、頭の中が真っ白になった…」

「…隼人…!!」

思わず、ヨーコは彼に抱きついた。話す隼人の表情が、あまりに苦しそうだつたから。隼人は、話し続けた。

「俺、とりあえず救急車は呼んだんだ。でも、捕まるかもしれないと思つたら、怖くて堪らなくなつてさ…。救急車が来る前に、逃げたんだ」

その言葉を口にした時、ヨーコの手の中で、隼人の指がキュツと握り締められた。一番嫌いな“逃げる”という行為に及んだ自分を悔いるかのように。

「逃げてきて、公園のブランコに座つて初めて、自分の手が血まみれだつて気付いた…」

「返り血…?」

ヨーコが、恐々と呟く。「そう。哲也の血だった」隼人の声が震えた。

「逃げたつてムダだつて思ったよ。どうせ捕まるんだ、人生なんか台無しだ、つてね」

「でもっ」

ヨーコが口を挟んだ。

「ナイフを出してきたのは、坂上哲也だった%「俺の言うことを、警察が信じると思うか?」

「えっ…」

「俺はレッドイーグルの中でも喧嘩強さで有名だつた。しかも、事

件の目撃者はいない。警察にとってみれば、俺が哲也を殺したと考
えるのが自然だ」

「でも、でもよ」

ヨークは食い下がる。

「きちんと話せば、警察だってわかってくれるわよ…」

「いや」

隼人は、ヨークの言葉を遮った。

「こういうことは初めてじゃなかった。“レッドイーグルだから”
っていう理由だけで、やってもない罪を押しつけられたことはいく
らでもある。万引きとかな。…世間の人は、不良の話なんて聞いち
やくれねえ。話を聞く前に、『お前がやったんだろっ』と決め付け
る」

「そんな…」

呟いてから、ヨークはハツとした。

吉祥寺駅で、通り魔があった時。高校生の少年たちに、“レッド
イーグルとブルーシャーク”の存在を教えられた時、ヨークも確か
に嫌悪を感じた。

確か、その直後に隼人にこう言った気もする。

そんな人達、あたし嫌い。

今から思えば、その言葉は、どれほど隼人を傷つけたことだろう。

「ごめんね…」

ぼつり、とヨークは言っつて、隼人の胸に頭を預けた。自分も、偏
見というものを持つ人間の一人なのだと、彼女ははっきりと自覚し
た。

「ブランコに座ってる時間は、長かったな…」

思い出しながら、隼人が言った。

明けていく朝。澄み渡った、青い空気。髪を揺らしていく風。そ
のすべてが、彼にとっては、まるで別世界のように感じられていた。

「あの頃の俺は、勉強もできなかった。親とすら巧く付き合えない。人は俺達を冷たい眼で見る。出来ることは、ただ喧嘩で暴れることだけだったよ。そうしなきゃ、自分の弱さを感じて苦しくなるからさ」

「うん…」

「自分はどうせ社会のクズだから…捕まる位なら、このまま消えちまった方がマシだって思った」

「そんな…」

ヨーコは、息を呑み、ぎゅっと隼人の指を握り締める。それを、隼人もしつかりと握り返した。

「そんな時だったんだ。あの刑事が現れたのは…」

隼人は、少し微笑んだ。

あの朝、ふらつと現れた刑事。別の事件で隼人に疑いをかけ、しつこい位につきまといてきた刑事は、一度は隼人を殴り倒した。

しかし、見つめあううちに、隼人の話を聞いてくれるようになった。不良で乱暴者の、隼人の話を。

その刑事は、隼人を信じた。そして他の刑事や検事と激しく論争を繰り広げ、ついには彼の無実を勝ち取ったのだ。

その刑事は、隼人にとって父親のような存在になった。自分を信じて、守ってくれた人。いつしか、隼人は自分も刑事になりたいと思うようになった。

「信じてくれた人がいたから、今、俺はここにいる　ヨーコの隣に」

「隼人…っ」

ヨーコの瞳から、ポロポロと涙の粒が零れて落ちる。あとからあとから、止まらない。

「あたし、隼人に出会えて、本当に幸せだよ…」

「ヨーコ…」

「あたしも、なりたい…。どんな人でも、信じてあげられる刑事に

…!!」

隼人は、ぎゅっとヨークを抱き締め、囁いた。
「なれるよ。ヨークなら、きつと…」

通り魔の正体（前書き）

ついに、岩波刑事は通り魔の犯人に辿り着く…？
ストーリーは、まだこの後も続きます。

通り魔の正体

*

「刑事さん、何しに来たの？」

拓人が目を丸くしている。

「ああ、近くまで来たついでだ。祐太君に挨拶して行こうと思ってな……」

岩波は嘘をつきながら、ハツとして目を見開いた。拓人の背後に見える庭園に、マルグレーテが座っていたのだ。しつかりと門に繋いでおいたはずだが、確かにぶちの犬はそこにいた。よくよく見れば、マルグレーテの手綱が短く切れている。自分で噛み切ったらしい。

マルグレーテは、大きく尻尾をふりながら岩波を見ていた。

……そうか……！

突如、岩波は閃いた。マルグレーテが伝えようとしていることを、理解したのだ。

「祐太の事件を追ってた刑事さん……？」

拓人は何も気付かず、チラッと仏壇を見やった。

「もう二年も経つのに、まだ犯人捕まってるじゃないか。しつかりしろよな、刑事さんよ」

「拓人……！」

保が大きな声を上げた。「失礼だろうっ。岩波さんに謝りなさい……！」

拓人は、小さく肩をすくめた。

「俺は、事実を言ったただけだよ。何も謝ることなんかない」
「プイツと立ち去りかけた、その時。」

「ちよつと待て!!！」

岩波が叫んだ。

「…?」

怪訝そうに拓人が振り向く。

「何だよ」

「まだ此処にいる。聞きたいことがある」

岩波は、自分の気持ちを落ち着かせようとして、深呼吸した。

「今日の朝7時半…お前、どこにいた？」

「何でそんなこと聞くんだよ」

拓人が岩波を睨み付ける。しかし、その声色は、すでに先ほどまでのものより高く変わっていた。

「どこにいた？」

岩波は仏前から立ち上がり、拓人の前に立ちはだかる。

「聞いてるんだ。黙ってないで答えろ」

「…学校に決まってるんだろ」

投げ遣りな口調で、拓人が言った。

「そうか。学校か」

岩波は勝ち気に笑った。「じゃあ、お前の通ってる高校に確認を取ってみよう…いいな？」

その言葉を聞いた途端、さあつと拓人が青ざめた。

「…な、何でそんなことする必要があるんだよ！」

「念のため、だ」

岩波が答えた。

「どうかしたか？顔色が悪いみてえだが…ひよつとして」

刑事は、拓人にスイツと詰め寄る。押されるようにして、拓人は背後の障子に貼りついた。

「疾しいことでもあるんじゃないかねえのか…？例えば、学校には行かず

に、吉祥寺駅にいた、とかな…」

拓人の表情は石のように固く強ばり、色を失っていく。

「いつ、岩波さん」

ずっとオドオドしていた保が、ようやく口を開いた。

「拓人が、何かしたとでも言うんですか…!？」

「俺に聞くなよ。本人が一番良く知ってるんじゃないか?」

あっさりと岩波が言い放った。

「それは…どういこう…」 保が言いかけた時だった。

「ギャワンツ!!」

犬の吠え声が、屋敷中に響き渡った。

「犬コロ!」

岩波が呼び掛ける。同時に、マルグレーテが日本庭園から和室の中へと、踊りこんできた。

「ヒッ!」

保は驚いて仏壇にすがりつく。

マルグレーテは保の前を素通りして、真っ先に拓人に向かっていった。そして、背を向けて逃げ出そうとした拓人の尻にタツクルする…。

「うわあああ!!」

拓人が叫び声を上げた。

マルグレーテが、優雅に畳の上に着地する。能でも舞ってきたかのようなのだ。

そして、その口には、拓人の尻ポケット生地の一部と、真っ赤なハンカチがくわえられていた。

「よし!よくやったぞっ」 岩波は、トコトコと寄ってきたマルグレーテの頭をわしゃわしゃと撫でる。マルグレーテは、気持ち良さそうにブンブンと尻尾を振りながら、ハンカチを畳の上に落とした。

「あ…こ、これは一体…」 保が、仏壇にへばりついたまま岩波を見つめる。きちんと手入れした屋敷に犬が飛び込んできたのも驚きではあるが、彼には岩波の目的が全く判っていなかったのだ。

岩波は、真つ赤なハンカチを拾い上げた。

「血だ」

囁くように言い、それを拓人の鼻先に突き付ける。少年は、小さく震えながらハンカチから目を逸らした。

「見たところ、お前は全く怪我をしていない」

岩波が低い声で言った。

「教えて貰おうか。どうして、このハンカチは血まみれなのか。… 返り血を拭ったからじゃないのか？」

「返り血…？」

保が戦慄した。

「どういうことですか…？拓人、まさかお前…」

拓人の顔は、蠟のように真つ白だった。追い詰められ、口をきくことすら出来ない。

「お前が、今朝の通り魔の犯人だな…？」

岩波が発した言葉の響きは、しんと静まり返った和室に波の如く輪を広げた。「そんなつ…拓人！？」

保が叫ぶ。余りのショックに、彼の脚がガクガクと震えた。一瞬の後、保は仏壇にすがりながら畳に崩れる。

「嘘だ…通り魔なんて。岩波さん、何かの間違いだ…拓人が…そんな…」

「ホントだよ」

幾分か落ち着いた声で、拓人が答えた。
体の震えは収まり、逆に、不気味な程の笑顔を浮かべて岩波を見据えている。

「そつだよ…俺がやったんだ」

遠くで、蝉が鳴き始めた。短い生命を惜しむように、精一杯羽を震わせているに違いない。

「今朝はスカツとしたね。坂上竜也が出てきた時は、流石にビビったけどな。案外弱つちかったぜ？あれでブルーシャークのリーダーだなんて、笑えるね」

拓人が、楽しむように言った。彼の猟奇的な表情は、岩波の背筋を凍り付かせていく。

「トイレで制服に着替えて、返り血を落とした。俺を怖がって誰も追ってこなかったから、落ち着いて着替えられたよ…途中で友達と会ったけど、みんな、俺が犯人だとは気付かなかった。沢山いた警察官すら、だーれも俺に気付かない…楽しかったなあ。ゲームみただった」

「なんでだ？」

岩波は、キュツと眉根を寄せた。

「何故そんな口がきける？お前は、少なくとも1人殺したんだぞ。何故そんなことをした？」

「理由なんて無いね」

ヘラツと拓人は笑った。

「ムシャクシャしたからやった。ただそれだけだ」 「お前は、ムシャクシャしたら人を殺すのか!？」

岩波はガバツと拓人の胸ぐらを掴み、立ち上がらせた。

「そんな事が罷り通ったらな、俺は毎日三人は殺してるところだ。だがな、現実はそのじゃねえんだよ！」 思わず殴りつけそうになったが、岩波はそれを寸前の所で押し止めた。保に、これ以上のシ

ヨックを与えることは出来ないと思つたからだ。

岩波が手を離すと、拓人はドサツと畳に倒れこむ。それから、岩波によつて止められていた呼吸を、必死で取り戻し始めた。

そんな中、土気色の顔で、保が甥に歩み寄つた。先ほどの柔らかな微笑みは消え去り、無表情に立ち尽くしている。

バシーン!!

突如、破裂に近い音がした。続いて、「うあつ」という呻き声。

岩波がハツと気付いた時には、拓人は保に頬を叩かれ、縁側まで吹っ飛んでいた。

「この馬鹿者が!!」

保が怒鳴つた。今や、彼は鬼の形相だ。

「祐太が殺されて、私や妻が、どんなに苦しんだか。親しい者を殺される悲しみを、お前は知っているだろう!? それなのに、どうしてこんな事を!!」

頬を押さえて蹠つた拓人は、保を見上げた。

その眼は反抗心に満ち、ギラギラと光っている。

「理由なんかねーよ」

拓人が繰り返した。

「ムシヤクシヤしたんだよっ」

「拓人っ!!」

保が怒鳴つた。

蝉が盛んに鳴いている。軒先に掛かっていた風鈴の音が、風の訪れを静かに告げた。

「うあぁ…っ」

力の抜けた嗚咽と共に、保が仏壇にすがりついた。「どうして…
どうして…」

「…」

岩波は、保から拓人へと目を移す。

少年は、先程までの猟奇的な表情をジワジワと失っていき、ただぼんやりと宙を見ていた。

こんな時、岩波はいつも罪悪感に近い居心地の悪さを覚える。

果たして、保と祐太の前で拓人の罪を暴く行為は正しかったのか？家族の絆を傷つけたただけだったのではないか？

しかしその行為は、誰かがやらなければならなかったことだった。それを岩波が引き受けただけのことだ。

刑事は、時に残酷な役目だ。人の幸せを守ることもしれば、こうして幸せを壊すこともする。
けれど…。

岩波は歩いていき、拓人の腕を掴み、持ち上げた。

「庄司拓人。殺人容疑で逮捕する」

ポケットから取り出した、鈍く光る鉄の輪。それが、ガシャンと音を立てて少年の手首にはまった。

拓人は自分の手首を一瞥すると、再び眼を宙に向ける。全てを諦めきった、虚ろな表情で。

岩波は、同じ表情を昔見たことがあった。

「…おい」

岩波は、少年の前に屈みこみ、彼の顎に手をやって、顔を上げさせた。

「よく聞けよ、糞ガキ」

「…」

「お前の人生は、今から始まったんだよ。さっきの手錠の音から、な」

「…」

「被害者に、どう償っていくか。これからどう生きていくか。…決めるのは、お前の自由だ」

フン、と拓人が鼻で笑った。

「捕まったら、自由なんて無いだろ。刑務所に入れられて、裁判になつて…」

しかし、岩波は首を振った。

「確かに、お前の身体は拘束される。だが、警察も法曹も、お前の精神までは拘束できない。何を考え、どう表現するかはお前の自由だ」

「…」

「お前はまだ未成年だから、死刑にはならんだろう。恐らく、まだ若いうちに社会復帰できる筈だ。その時、お前は何をすべきか。それをゆつくり考えろ。相談になら乗ってやるよ」

「いらねーよ」

拓人が呟いた。けれど、岩波は引き下がるつもりは無かった。

この少年の表情を見て、岩波は悟ったのだ。…拓人は、決して何の理由もなく事件に及んだのではないことを。そして、彼が心の奥底から、“助け”を求めていることを…。

「さて…行くぞ。ガキ」

岩波が立ち上がりながら言った。マルグレーテがトコトコと寄りてくる。

「庄司さん、色々と迷惑をかけた。すぐ、また別の刑事をよこすかならな」

「あ…あぁ…」

保が焦点の定まらない眼をして、ぼんやりと答えた。

「…頑張れよ」

岩波は呟いた。それが保に向けての言葉なのか、拓人に向けての言葉なのか、自分でもわかってはいなかった。

「…あ。隼人に、車返して貰わねえとな…」

太陽の世界

*

隼人とヨーコは、お互いの背中に腕を回しながら、並んで理科室を後にした。

隼人としては、もう少しきちんとヨーコを休ませてから出発した方が良いのではないかと思っていた。

しかし、ヨーコはすぐに出発することを主張した。彼女は、無理矢理連れ込まれた忌まわしい場所から早く出たくて堪らなかったのだ。

背中でお互いの温もりを確かめあいながら、二人はアルコールランプの灯る理科室を通り過ぎた。その扉を抜けるとき、ヨーコは背後に人の気配を感じて振り返った。

しかし、それは気のせいだったようだ。暗闇の中に、ランプの青い炎が静かに揺れているのが見えただけだったから。

そのまま長く人気のない廊下を歩き、階段を登る。何度かチラチラと後ろを振り返るヨーコを、隼人はキュツと片腕で抱いた。

『大丈夫。俺がついてるから』

そんなメッセージが、言葉がなくなるとも伝わっていく。隼人の体温を感じるだけでヨーコは安心できた。

ふいに、二人の目の前がパアツと明るくなる。穴が空き、鉄筋が剥き出しになっている壁から、日光が差し込んできているのだ。

使われなくなつて埃の積もつた昇降口を通り抜けると、蝉時雨の大音響が二人を迎えた。

「ねえ、隼人。暑いから嫌いだったけど、夏の太陽っていいねっ。解放された感じがする」

グラウンドを横切り、校門に向かいながら、ヨーコが気持ちよさそうに言った。

「解放、か。まさにそんな気分だよな」

眩しい日差しに、隼人は笑いながら目を細めている。

「俺たちの世界って、こんなに明るいんだな」

二人は見つめあい、フツツと笑いあつた。

空の向こうに入道雲がそそり立ち、恋人たちを見守っていた…。

ピリリリリ。

急に携帯電話が鳴つたのは、その時だった。

*

マルグレーテに拓人を見張らせたまま、岩波は庄司家の門の前に立ち、電話をかけていた。

「俺の車を無断で使つたあ、いい度胸じゃねえか…隼人よお」

相手が電話に出るなり、岩波はネチネチと突っ掛かる。

「どついつつもりか知らんがな、お前にローレルなんて百万年早いんだよつ。ガキにはチャリンコで十分だつ」

『すつ、すみません！！つい使っちゃいました』

電話の向こうで、隼人が弁解した。

「つい、だあ!？」

岩波がポリウムアップする。

「俺がもうちょっと厳しかったらな、お前を窃盗で逮捕してるぞ！」

！

『あつ、あのつ、違うんですっ』

いきなり、隼人の声が女性のものに変わった。

「!?!」

驚いた岩波は、一瞬携帯電話を落としかける。

『あたし、桐原ヨーコっていいいます。高校生です。隼人に助けて貰ったんです。隼人は通り魔事件で忙しいのに、あたしの為に急いで来てくれたんです。隼人がいなくなったら、今頃どうなってたか…。だから、お願いです。彼を責めないで下さい!!』

相手の女性は、一息にこれだけを言つてのけた。あまりに物凄い勢いだつたので、岩波が言葉を挟む間すらなかった。

「…話が、全くわからんのだが」

岩波は嫌味っぽく言った。どうも、女性に対する巧い話し方というものが出来ないのだ。

「君が誰だか知らんが、隼人に早く車をよこすよう言ってくれ。緊急なんだ。通り魔を捕まえた。今すぐ護送しないと」

『えっ…!!』

相手の女性　　ヨーコの声が、裏返つた。次の瞬間、甲高いハイテンションな声が岩波の鼓膜を突き破つた。

『きゃーっ!! やりましたねっ! 捕まえたんですねっ! 早いですが、さすが隼人の上司さん!! ！どこの誰だつたんですか、犯人は!?! 朝から気になってつ。今の時代に黒ずくめだなんて、大胆な犯人ですよねっ。そうでしょ!!…あつ、ちょっと隼人、何すんのよっ…あーっ』

電話の向こうから、ガタガタツと争うような音が聞こえた。

『…もしもし…すいません。隼人です』

再び、隼人が電話に出た。どうやら、携帯をヨーコから奪いとったらしい。

「お前の彼女（？）は…何なんだ…？人間じゃないだろ、少なくとも」

ぐつたりと岩波が聞いた。

「彼女の超音波的な声のお陰で、俺の耳は完全に破壊されたぞ」

「それは俺のせいじゃ無いッス」

面白おかしそうちに、隼人が答えた。

「…ともかく、今から車でそっちに向かいます。場所はどこですか？」

「なあ、忘れるなよ？それは、お前の車じゃないからな。俺の車だからな??」 岩波が念を押した。

思いがけない真実（前書き）

突然ですが、お知らせです。

私・奥山メイも、ついに受験シーズンに突入してしまいました。カバンに思いつきり湯島天神の御守りつけてます（笑）

本当なら、連載を継続していきたいと思っていました。特に『夏の盛りには』は連載の真っ只中。ここで中断してしまうのも微妙なところですよ。

…が、流石に受験勉強と更新を両立するのが難しくなっていました。

読者の皆さんには申し訳ない限りですが、受験が終わる二月末まで休載とさせて頂きます。

『小説を書く者として甘い』というのは重々承知しております。

しかし、受験の中で、身の入らないまま書くよりも、しっかり集中して文章を作っていきたいと考えた結果、この決断をするに至りました。

何卒、ご理解の程を宜しくお願い致します。

なお、再開は三月上旬を目指しております。

その時は新連載も開始する予定です。タイトルだけはマイページに載っているのですが、既にご存知の方もいらっしゃる…かな？

パティシエを目指す女の子の恋物語です。ヨコちゃんとは違った、ちよっぴり優柔不断な主人公です。お楽しみに…

では、暫くの間お別れです。短い間でしたが、ありがとうございました！！

奥山メイ

思いがけない真実

庄司家の前に、一台の車がスツと止まった。黒のローレルだった。運転席に座っているのは、整った顔立ちの美青年。助手席には、黒髪の平凡な女子高生。

二人は、ほぼ同時に車から降りてくる。

「…彼女も連れてきちまったのか？」

疲れきった声で、岩波がぼやいた。

「俺たちは、通り魔の犯人を護送するんだぞ？女と犯人を一緒の車に乗せるっていうのは…」

「大丈夫っスよ」

明るい声で、隼人が答えた。

「ヨーコは刑事目指してるんで。逆に喜ぶんじゃないでしょうか？…なっ、ヨーコ」

くるつと恋人を振り返る。すると、彼女は顔中でニッコリ微笑んだ。

「その通りよっ。こんな機会、またと無いじゃない？」

「いや…しかし…」

予想もしていなかった彼女の反応に、岩波はうろたえた。

そんなことにお構い無く、ヨーコは隼人の隣から離れ、マルグレエテに見張られている拓人に歩み寄っていった。

「あーっ。あなたっ、吉祥寺駅にいた人でしょっ」

隼人が、不思議そうにヨーコと拓人を見比べる。

「知り合い？」

しかし、ヨーコは首を横に振った。

「ううん。今朝会っただけ」

それから、彼女は拓人に向かい合った。

「今朝は、色々ありがとうねっ。レッドイーグルとかブルーシャー
クとか、全然知らなかった。教えて貰えて助かったわ」

そう。吉祥寺駅で、ヨーコは拓人と言葉を交わしていたの
だ。彼女がレッドイーグルの名を初めて聞いたのは、拓人の口から
だった。

「
…」

気の抜けた眼差しでヨーコを一瞥すると、拓人は目を伏せた。

「どうしたの？何でこんなところに？…あ、犬の散歩かつ」

何も知らないヨーコは、しゃがみこんでマルグレーテの耳の後ろ
を撫で始めた。

犬は、気持ちよさそうにクンクンと鼻を鳴らし、ヨーコに甘えて
擦り寄る。

「かわいい〜っ!!」

ヨーコは歓声を上げ、マルグレーテを抱き締めた。「それに、あ
つたかい…。メス犬なんだね。何て名前？」

拓人は、目を伏せたまま答えない。というか、答えられない。
すると、代わりに岩波刑事が口を出した。

「それは、警察犬だ。そのガキの犬じゃない。名前は…あ…何と
いったか…まあ、そんなことはどうでもいい。俺が本庁から借りた」
「すっごーい!!」

ヨーコは瞳を輝かせた。「じゃあ、このコ麻薬とか見つけたり出
来るんだ!!カッコいいっ」

「噛み付くがな」

冷静に岩波が言った。しかし、マルグレーテは唸ることもせず、
ヨーコに身を任せていた。どうやら、噛み付く対象は犯人と岩波だ

けらしい。

ヨークは、マルグレーテの頭を優しく撫でてゐる。それから、ちよつと首を傾げて拓人に目を移した。

「あなた、何でこんな所にいるの？」

拓人の唇が、強く噛み締められた。

「そいつが犯人だよ」

岩波が言った。

「レッドイーグルのメンバーだ」

ヨークが、パチパチと瞬きした。

「え…？」

彼女の手から力が抜け、マルグレーテの頭から落ちる。

「うそ…」

「ホントだよ」

ぶつきらぼうに、拓人が声を発した。

「俺がやったんだよ」

ヨークは、驚きを隠せない。

「うそ…うそよっ。だって、…」

しかし、その先を繋ぐ言葉は、見つからなかった。あの時、花火の広場で。

ガムを噛みながら、坂上竜也の噂話をしていた拓人。

ヨークに話し掛けられても、普通に受け答えした拓人。

まさか、彼が人を殺めた直後だったなんて…。

「通り魔は、いつ現れて、誰を殺すかわからない」

岩波が呟いた。

「逆に言うと、普段は隣ですれ違ってる奴が通り魔だって可能性もある…これ位のことと驚いてるようじゃ、刑事を目指すのは生半可なことじゃねえぞ、女子高生」

拓人が、顔を上げた。

「刑事さん、一つ間違ってるぜ」

「なに…？」

岩波が目を剥く。

「何が間違ってるっていうんだ？」

拓人は、少しだけ猟奇的な表情を取り戻していた。

冷たい目をしているのに、彼の口元だけが笑みを浮かべている。

「俺はレッドイーグルなんかじゃない。奴らは、今回の事件には無関係だ」

届かぬ想い

*

アルコールランプの臙気な灯が、ゆらりと少女を映し出した。明るく染め上げた髪は乱れ、柔らかく散って、少女の肩にしどけなく垂れている。

「いや…」

真つ赤なルージュをひいた唇から、ただ一言だけ言の葉が洩れた。そこはかたなく背中が小さく震えてしまうのは、寒いからではない。少女は、何とか震えを止めようとして、自分自身を抱き締める。

乱れた髪の一房が目に入った時、彼女はビクツと硬直した。その髪の色が、少女の眼を焼いていく。忌まわしくて、でも愛しくてたまらない色。好きだからこそ、その色に裏切られたことを恐れた。

ミルクティーのような、黄金色。

少女は、その髪の一房を握り締め、小さく嗚咽を洩らした。

大好きだったもの。この世で一番大切だったもの。

同じ髪色の『彼』。

彼がいたから、泣かずに済んでいた。

独りぼっちな夜も、空

しくてたまらない朝も。

彼がいたから、笑えていた。独りではないと感じられた。温かい気持ちになれた。

彼は、少女の道しるべだった…。

けれど。彼は変わった。

彼は、『あの事件』である刑事と出会った。それを機に、別の新しい道を見つけた。

自分も刑事になるという道。

少女は、最初はそれを信じていなかった。彼の言いだしたことは、あまりに突飛で、あまりに現実味がなかったから。

でも、彼は本気だった。夜の街に出ることを止め、酒も煙草も断ち、一生懸命に勉強し始めた。目付きが真剣なものに代わり、少女と同じだったミルクティー色の髪は、いつの間にか漆黒に染まった。

彼は、もはや少女の道しるべではなくなった。ゆっくりではあるが、確実に遠く彼方へ離れていった。

別れの言葉は、無かった。

しかし、それは別れに等しかった。少女は、彼に付いていくことが出来なかった。彼の新しい道は、少女の生きてきた道と、あまりに違いすぎたから。

二人は、いつの間にか会わなくなった。

けれど、少女は信じていた。いつか彼が戻ってきてくれることを。

寂しくて、毎日泣いた。独りっきりの夜が怖かった。『彼』の身代わりを、色々な男達に求めた。毎晩街に出て、一緒に夜を明かしてくれる誰かを探した。

しかし 誰も、『彼』の代わりにはならなかった。どの男も、少女の身体目当て。少女の道しるべには程遠かった。

だから、彼女は待ち続けた。彼が戻ってきてくれるのを。それは、儚い望みに終わったけれど…。

今、ランプの淡い光の下で、少女は一人ぼっちで踞っている。彼女の眼差しは、先刻彼が出ていった扉へと注がれていた。

立派な警察官になった彼の横にいたのは、いかにも真面目そうな、高校生の女の子だった。その子は、彼と同じ、黒い髪をしていた…

「いやよ…」

少女は嗚咽の中から小さく叫びを絞りだした。

「隼人の隣にいるのは…あたしだったのに…」

少女の中に蘇るのは、とろけてしまいそうに優しい隼人の囁きと、

あの女の子の洩らしていた甘い声。

昔の隼人があったから、今の隼人があるんだよ。全部ひっくるめて、あたしの大好きな隼人なんだよ

それは、女の子が愛戯の最中に発した言葉。

「あたしだって…そう思ってるよ…!!」

少女は叫び、顔を膝に埋めて、ひっそりと泣き続けた。ほんの少し前までは、ああして抱き合い、温もりを伝えあっていた相手。遠くへと行ってしまった相手。

いつでも顔を見られるから、いつでも言葉を交わせるから、逆に少女の心は締め付けられる。

毎日、四つ角からこっそり交番を覗き、彼の横顔を見ていた。真面目に仕事をし、社会の役にたとうとしている隼人。それに比べ、ただ暴れることしか出来ない自分。

彼が、羨ましく、恋しかった。そして、彼を見つめるたび、『彼の想いはもう自分に向けられてはいないこと』を痛感した。

少女は、昔と変わらず、彼を想っているのに。こんなにも強く、彼を求めているのに。その悲痛なまでの感情は、彼に届くことはない。

想いは、少女の中で膨らみ続け、もう臨海地点に達していた。

「すきな。あなたが、誰よりも…!!」

だから、戻ってきて。
あたしを、慰めて。
独りにしないで…。

少女 エレナは、アルコールランプの淡い光の群れに紛れて、
自分が今にも消えてしまうのではないかと思った。

でも。消えてしまった方が、楽かも知れない…。この狂おし
いまでの気持ちから、逃れるために…。

エレナが、そう思った時だった。

ふいに、アルコールランプの炎が一斉に揺らいだ。どこからか吹
き込んできた新鮮な風が、少女の髪を撫でる。理科室中の電気が点
けられ、部屋は急にパアッと明るくなった。

「誰かいるぞ！捕まえろ！」

「…？」

膝の間から顔を上げたエレナが目にしたのは、警察官の群れだっ
た。先頭には、スラリとした背格好の美女が優美に立っている。ど
こか『峰不二子』に似ている、とエレナは思った。

その美女が、雅な唇を開いた。

「あなた、立川エレナね？レッドイーグル唯一の女の子…そうだし
よ？」

エレナは、突然のことにぼうつとしながら美女を見つめた。泣き
腫らした後の、紅い頬のまま。

「…だれ…？」

呟いた少女の声は、擦れ、震えていた。

「何しに来たの…?」

「警察よ。私は刑事の筑摩麗奈。レッドイーグルを摘発しに来たのだけれど、遅かったようね…」

美女が答え、理科室中を見回した。

「まあ、いいわ。あなただけでも十分よ」

「何言ってるの…?」

エレナは、全身を震わせながら訊いた。そして、マドンナの答えは恐ろしいものだった。

「あなたを、今朝の通り魔事件の重要参考人として連行するわ。レッドイーグルの残りの仲間達がどこにいるか、吐いてもらいましょうか」

『愛してるよ』

「どっぴりっト……？」

エレナは、ぎょっとしてマドンナを見上げた。

「あたし、何も悪いことしてないよ！？何で連れてかれなきゃいけないの？」

「しらはつくれるんじゃないわよ」

マドンナは冷たく言い放つ。

「知らないとは言わせないわ。今朝、吉祥寺駅で起こった通り魔事件。ブルーシャークの坂上竜也が殺されたじゃないの。犯人は、レツドイーグルの中にいるんでしょう？」

「坂上が…殺された!？」

エレナは驚愕に目を見開いた。

そんなこと、全く寝耳に水だ。普段なら、ブルーシャークに関する情報はすぐにレツドイーグルに伝わってくる。しかし、今朝は失敗に終わった『隼人を呼び戻す作戦』実行のため、誰も情報収集していなかったのだ。

「何かの間違いよ！あたし達、誰も通り魔なんてしてないわ!!」

エレナは叫び、立ち上がった。まだ涙に濡れて光っている瞳で、マドンナを睨み付ける。その眼光は、纏っている服のスパンコールと共にギラギラと威圧感を放った。

「警察は、何かあったらすぐにあたし達に目をつけるのね!!何もしてないのに、あたし達はいつも疑われる!隼人の時も、そうだった……」

少女の言葉は、そこで途切れた。隼人のことを口にするだけで、

熱い感情が身体中を駆け巡ったのだ。胸が苦しくなるほどに。

「この娘を連れていきなさい」

マドンナが、後ろに控えている部下達に命じた。

「彼らが通り魔に関わっていたかどうかは、署で調べればいいことだわ。とにかく、この機会にレッドイーグルのメンバーを出来るだけ多く検挙しましょう」

「ハイ!!!」

警察官らが一斉に返事した。そして、無表情にエレナを取り囲む。

どうして?どうしてこんなことになるの?

エレナは、事態のあまりの急展開に、ただ身を任せるしか無かった。

ちょうど同じ頃、岩波が通り魔の真犯人を捕まえていたことを、まだ誰も知らない。

*

「じゃあ、また何かあったらすぐ呼べよ」

ローレルの助手席の窓から半分身を乗り出して、隼人が念を押した。

「玄関と窓には鍵掛けとくんだぞ。誰が来たかわかんないのに、ドアを開けたりしちゃ駄目だからな」

それを聞いて、車の外に立つヨーコがクスツと笑った。

「まるで、小さい子のお留守番みたい」

夏の夕方の空気に、制服の赤いリボンがひらひらとしている。

ローレルが停まっているのは、ヨーコの家の玄関前だった。赤い瓦が特徴的なごぢんまりとした家だが、一階に母方の祖父母が住み二階に桐原家が住んでいる。通りから一段上がったところに、祖父お手製の可愛らしく白にペイントされた門があるが、今ヨーコはその門の前に立っていた。

デートの帰りは、必ず隼人がヨーコを送っていく。時には、ヨーコの家族に呼ばれ、夕食を共にしたり、彼女の祖父や父、兄とお酒を飲み交わすこともある。面食いのヨーコの母は、隼人を大のお気に入りにしてしまった。

今や、隼人とヨーコの関係は公認の仲だ。

ヨーコの家族と一緒にいると、隼人はいつも言い知れぬ安らぎを感じる。今まで知らなかった、家族の温もりを感じられるからだ。桐原家は、『ヨーコの実家』という以上に、隼人にとって大切な場所なのだ。

だが、今日はまだ仕事が残っている。ヨーコとも、ここでお別れだ。

あんなにうるさかったアブラゼミは、いつの間にか殆ど聞こえなくなっていた。代わりに、どこか物悲しくツクツクボウシが鳴いている。短い夏の生命を、精一杯謳歌しているのだ。

「今日は…ありがとね」

恥ずかしそうに、少し下を向きながらヨーコが言った。

「仕事でだったのに、助けてくれて…」

「バーカ。気にすんな」

隼人は笑ってみせる。

「それに、助けられたのはお前じゃねーよっ」

「…?」

きよとん、とヨーコが首を傾げた。その可愛らしい表情に、隼人の心臓がトクツと音を立てる。再びヨーコを抱き締めたい思いに駆られたが、運転席に岩波がいるので、何とか思い止まった。

「お前が言ってくれた言葉で…救われたのは、俺だ」 隼人は、真っ直ぐにヨーコを見つめて言った。

今の隼人も、昔の隼人も、全部ひっくるめて、あたしの大好きな隼人なんだよ

隼人がレッドイーグルにいたことなど、気にしないと告げたヨーコ。その気丈な優しさに、隼人は心打たれたのだ。

「大好き。隼人」

ヨーコがはにかみながら、助手席の窓に近づいた。そして、ちよっと屈みこみ、愛しい人の唇に、自分の唇を重ねる。

突然のことに少し驚いた隼人だったが、すぐにヨーコの肩を抱き寄せて、優しく彼女を味わった。

大好きな人。この世で一番、大切な人。一緒にいるだけで、幸せになれる人。

唇を少し離れた時、隼人は小声で囁いた。愛しい彼女の耳元で。その言葉は、ヨーコの体温を一気に上げる。

「愛してるよ…」

それは、今まで一度も使ったことの無かった言葉。恥ずかしくて、二人とも口に出せなかった言葉。

けれど今、隼人はその言葉の封印を解き放った。誰よりも大切な、ヨーコに向けて。

ヨーコは立ち尽くし、照れて笑っていた。隼人に同じ言葉を返したくても、恥ずかしくて口に出来ない。その代わり、もう一度彼に唇を寄せた。

運命の足音

再び二人が唇を重ねた時、ハラリ、と何かがヨーコの制服から落ちた。

紙のようなヒラヒラしたものだ。それは、何気なくローレルの中へと舞い込んでいく。ヨーコは気付かなかったが、隼人はすぐにそれに目を止めた。

が、ヨーコと繋がっている唇から言葉を洩らすことは出来ない。ましてや、足下に落ちてしまった『何か』を拾い上げることなどもつての他だ。

…キスが終わってから、拾えばいい。

そう考えた隼人は、神経の行く先を唇に戻した。

ヨーコが、ギョツと彼にしがみついた…。

ゴホンッ!!

突如、隼人の真横で咳払いが聞こえた!

ゴホッ、ゴホンッ!!

今度は、背後から。

「!!!」

ビクツとしたヨーコと隼人は、慌てて唇の繋がりを解いた。互い

に伝えあっていた温もりが途切れ、急に唇に物足りなさを覚える。

「おい……」

不機嫌な声を発したのは、運転席に座っていた岩波だった。

「俺が我慢してやってる間に、随分イチャイチャしてくれるじゃねえか……」

相当イラついている様子だ。ハンドルに置かれた右手の指は、せわしなくトントンと拍をとっている。

「すつ、スイマセン！！つい……」

隼人はイソイソとシートベルトを締め直した。すると、後部座席からも抗議の声が上がった。

「よく人前でチューチューできるよな。恥ずかしくねえの？」

声の主は、拓人だった。手錠をかけられた両手で、必死に顔面を覆っている。それでも、耳たぶが赤く染まっているのが確認できた。

「しつ、失礼ねっ。“チューチュー”だなんてっ」

同じくらい赤くなりながらヨーコが怒鳴った。岩波や拓人の存在を完全に忘れ、キスに熱中していたのだ。二人が咳払いしなかったら、もっと求めていたに違いない。

「……とにかく、署に戻るぞ」

ぶつきらぼうに岩波が言った。典型的な日本男児として育ち、妻に対して関白宣言までしている岩波は、早くこの甘ったるい雰囲気から逃れたかったのだ。最も、関白の座は妻に奪われてしまっているが。

仕方なく、隼人は渋々頷いた。まだ仕事は終わってはいないのだ。

最後まで、きちんとやり遂げてしまわねばならない。ヨーコと会うことは、またいつでも出来る。

「じゃ…ありがとね、隼人。気を付けて」

気まずそうに、ヨーコが笑った。

「あ、ああ。お前こそ気をつけるよ」

隼人もぎこちなく微笑み返す。

ローレルは、そのままゆっくり動きだした。黒いボディラインが、夕日を受けてスウツと光る。

隼人は、後ろ髪を引かれるような気持ちで、窓から顔を出し、振り返った。

古びたローレルは、どんどんスピードを増していく。さっきまで密着していた隼人とヨーコの距離が、開いていく。温もりが、離れていく。

だんだん遠ざかっていくーコは、笑顔で手を振っていた。その姿が、西日の中に飲み込まれていくかのように見える。ギラギラとした、オレンジと白のコントラストの中へ。

車が交差点を曲がると、もうヨーコの姿は見えなかった。

「ふう…」

息をつくくと、隼人は名残惜しそうに身体を助手席に落ち着ける。そして、窓から流れ込んでくる爽やかな風に、髪をなびかせた。

綺麗な横顔にかかる、艶やかな漆黒の髪。

それを横目で見た岩波は、ため息をついた。

… ったく、この色男め。署に帰ったら、怒鳴りつけてやる。

しかし、岩波は知らなかった。

今、ヨーコと隼人を強引に別れさせたことを、激しく後悔する時が来ることを。これから襲い掛かってくる、過酷な運命のことを。

隼人の足下に落ちていた、あの紙状のものが、風にクルツと翻った。そして、その正体を顕にした。

それは、あの衝撃的な写真だった。

レッドイーグルにいた頃の隼人とエレナの写真。先ほどエレナがヨーコに見せ付けたとき、回収するのを忘れたものだった。

隼人は、まだその写真に気付いてはいない。

ローレルは、オレンジの世界を走り抜けていった。

レッドイーグルvsブルーシャーク！！

その公園は、まだ、あの時のままだった。都会の、ガラスのビルの谷間に、ぽつんと取り残されていた。時が経った今も、変わらずに…。

古びたブランコが、唯一の遊具として風に吹かれている。そのキイ…キイ…という錆付いた音が、風景に物悲しさを与えていた。

そこに、どこからともなく、暗い影がポツリポツリと現れ始めた。肩を落として、それでも前だけはシツカリと見据えて。

レッドイーグルのメンバー達だった。

「…エレナはどうした」

ブランコにドツカリと腰掛けながら、白井が弱々しく聞いた。ブランコは突然の重みに、大きく軋んだ。

隼人に殴られた傷は、想像以上に痛む。その傷は、物理的な痛みだけではなく、精神的な痛みをも含んでいる。『かつての仲間には殴られた』という事実が、メンバー達の中に、重くたれ込めていた。

「エレナは…まだアジトだろ」

誰かが答えた。

「馬鹿だよなあ。あのままアジトに残ってたら、確実にサツに捕まるってのに」

「…しょうがないだろ…エレナは、隼人しか見えてねえんだから。今も昔も」

また別の誰かが答えた。

「隼人が、桐原ヨーコしか眼中に無いつて知ったら…エレナは、そりゃシヨックだろ。暫く動けねーよ」

一同は、黙りこくった。

「…隼人は」

臼井がポツリと呟いた。

「どうして、俺たちを裏切ったんだろうな…」

風が、吹き抜けた。

「あいつは、俺たちの生い立ちも、境遇も、全部知ってる。帰れる家も無い、金もない。こっやって暴れて暮らすしかないことだって、よく判ってる筈だろ…?」

さっきの隼人の眼は、もう昔のアイツじゃなかった…。完全に、『警察官』の眼だった

「もう、その話はよそうぜリーダー」

メンバーの一人が言った。

「もう、アイツは戻ってこないんだ…これから先のことを考えよう」

そっだそっだ、と仲間達から声があがる。

「よし」

白井が大きく咳払いをすると、レッドイーグルはザツと音を立ててリーダーを取り囲んだ。

「まず、新しいアジトを探そう。理科室は、もうダメだ。あんなことになった以上、いつサツの手が入るかわからねえ。考えてみりゃ、隼人がいるのに、今までサツが来なかったのが奇跡みたいなもんだ」

「武蔵野八幡の近くに、ちょうど良い空きビルがあります」

一人が進み出た。

「いつ取り壊されるかわかりませんが、ひとまずそこに潜伏する、というのはどうでしょう？」

「いいぞ」

白井が、隼人に殴られた箇所を押さえながら唸った。

「上等だ。誰か下見に行つてこい」

「ハイ！」

すぐに二、三人が名乗りを上げ、公園から走り去っていった。

白井は、満足げに息をついた。

隼人にぶちのめされた時は、どうなることかと思った。しかし、幸い捕まらずにすんだ。これからのことは、ひとまず新しいアジトに落ち着いてから、じっくり考えればいい……。

その時。

パン！

パン！！

派手な音が響いた。続いて、ギャーツという悲鳴。

「…何だ？」

臼井を始め、レッドイーグルのメンバー達はビクツとして、音がしたほうに顔を向けた。

「今のは」

すると、公園の入り口から、三人の青年が必死に駆け込んでくるのが見えた。つい先ほど、新アジトの下見に行ったメンバーだ。一人は、わき腹に怪我をしている。Tシャツが、血で赤く染まっていた。

「どうした?!」

ただならぬ臼井が立ち上がった。他のメンバー達の緊張感も、一気に高まる。

「ブルーシャークだ！」

走ってきた一人が、声の限りに叫んだ。

「逃げろ！奴ら、銃を持ってる！」

その言葉が終わらないうちに、公園の入り口にドヤドヤと若者の群れが押し寄せてきた。レッドイーグルと変わらない年齢層か、もしくは少し年上だろうか。いかにもガラの悪そうな一団だ。

その先頭に立つ、まだあどけない顔をした少年は、物凄い形相をして、黒々と光るモノを構えていた。

ピストル。

レッドイーグルは、皆息を呑んだ。ナイフを使ったケンカなら、いくらでも経験がある。しかし、ピストルを相手にしたことは無い。

「驚いただろ？」

少年がニヤリと笑った。まだ中学生位に見える。が、その猟奇的な表情は、レッドイーグルの背筋を凍り付かせた。

「兄貴が、去年ボクにプレゼントしてくれたんだ。まさか、こんなに早く“使う日”が来るとは思ってたなあ……」

「だ、誰だ？お前」

臼井が擦れ声で聞いた。

「ブルーシャークなのか？見慣れない顔だ。リーダー……坂上竜也はどうした」

その名を聞いたとたん、ブルーシャークは今にもレッドイーグルに掴み掛かりそうになった。

「しらばっくれるんじゃないぞ、レッドイーグルよお……」
ブルーシャークの一人が怒鳴った。

「今朝、お前らが坂上サンを殺したんだろっが！」

「！」

これには、流石のレッドイーグルも驚いた。

「坂上が…死んだ？」

白井の眉がひそめられた。

「どづいうことだ」

「てめえらが殺したんだろつが！今朝、吉祥寺駅で通り魔事件を起こしただろう！知らないとは言わせねえ！」

ブルーシャークは、今にもレッドイーグルに飛び掛かりそうな剣幕だ。

が、それを例の少年が制した。

「待て。白井は俺が殺る」

少年は、ピストルの銃口をピタリと白井に向けた。「兄貴の仇は、俺がとる…」

「お前…誰だ」

白井は、落ち着き払っていた。

「どこの馬の骨ともわからん奴に、殺されたくは無いからな。誰だ？」

少年は白井を睨み付けていたが、やがてニツと笑って銃口を下に向けた。

「じゃあ、名乗ってやるよ」

少年が言った。

「ボクは、坂上優也。坂上竜也と、坂上哲也の弟だ。兄貴は二人とも、レッドイーグルに殺された…！」

「坂上の…三番目の弟？」

レッドイーグルの間に、どよめきが走った。そんな少年が存在す

るとは、知らなかったのだ。

坂上竜也が殺されたのは初耳だったが、哲也の死については、レイドイーグルは良く知っていた。

昔、ケンカの最中に、隼人が誤って殺してしまったのだ。隼人は正当防衛が認められたが、ブルーシャークはあの事件を根に持っている。

「兄貴が二人もやられたとなっっちゃ、黙ってらんないぜ……」
幼い表情で優也が呟き、ピストルを再び上げた。

「殺してやる……」

動き始めた事態（前書き）

長らくお待たせしましたが…ついに！連載を再開しましたっ！！

これからは一日一回の更新を予定しています。三月の声を聞く前に、完結できるのではないかと思っています。

それでは、引き続き二人の夏物語をお楽しみください。

動き始めた事態

「……多分、レッドイーグルの仲間が居るとしたら、あそこしか無い……」

エレナは、憂鬱な思いで呟き、切なげな瞳で、バックミラーに映るマドンナを睨み付けた。

パトカーは、サイレンをけたたましく鳴らしながら、道路をひた走っていた。信号も無視。交差点も無視。パトカーと救急車だけに許された、非常時の特権だ。

運転するのは、マドンナこと筑摩麗奈。後部座席で、警官達に両脇を固められているのが、エレナ。

彼女は、マドンナに『レッドイーグルのいる所まで案内しなさい』と命令されたのだ。

仲間を警察に売る行為なのだと思うと、気が進まない。ずっと共に生きてきた仲間を、裏切ることなどできない。エレナは、最初のうちはマドンナの残酷な命令を無視し続けた。

しかし、マドンナの強い態度に押され…仕方なく案内している、という状況だ。都会に忘れ去られた、あの小さな公園へと。

あの公園は、昔からレッドイーグルがよく使っていた。だから、坂上哲也を誤って殺してしまった隼人も、本能的に、そこへ足を向けたのだ。

『隼人と関係のある場所に行く』という事実だけが、罪の意識に苛まれている今の彼女を支えていた。

「この交差点を左に入ったところよ」
エレナが告げたとき…。

パン！
パン！

いきなり、鋭い音が^{「たまたま」}訝した。

「…何かしら？目的地の方から聞こえたけれど…」
マドンナが怪訝そうに呟く。他の刑事たちも、キョロキョロと窓の外を見回した。

「まさか…銃声…？」

エレナは、急に嫌な予感に襲われて、擦れた声を発する。

「大丈夫よ。万が一、今のが銃声だったとしても。一応、このパトカーの窓は防弾ガラスだから」

落ち着き払って、マドンナが答えた。そのまま、交差点を左に曲がる。彼女は、バックミラーでチラリとエレナを見やると、思いつきり嫌味なセリフを吐いた。

「レッドイーグルが、痴話喧嘩でもしてるのかしらねえ…？」

しかし、エレナは聞いていなかった。

レッドイーグルは、誰も銃なんか持ってない。だとしたら、今の音は…まさか、あいつらが…？

エレナは、今までに無いほど動揺し始めていた。

*

「え？通り魔？この子が？」

混乱しきった表情で、本町署に残っていた刑事たちは拓人を見つめた。

「冗談はやめてくださいよお、岩波さんも隼人クンも」

「こんな子供が、通り魔なんてする訳ありませんよ」 彼らは、思わず笑いだし、「ねえ？」とお互いに目を合わせる。

しかし、手錠をかけられた当の本人 拓人が、サラツと言いつ返した。

「俺だよ。通り魔は」

刑事たちが、石化した。

「証拠もある。これだ」

岩波は、ビニールに包んだ血まみれのハンカチを刑事たちに見せた。

刑事たちが、サツと後退りした。いくら刑事と言えども、サスペンスドラマのように、いつも殺人事件を扱っている訳ではない。若い刑事ならば、血糊がついた物品など見たことが無いに等しいのだ。

「とにかく、早いところ麗奈に連絡をつけてくれ。今回の事件は、レッドイーグルには無関係のようだからな」

岩波が命じた。

「エエエエエーっ!!」

刑事たちは、揃って飛び上がる。

「その子、レッドイーグルのメンバーじゃないんですかあ!？」

「ちげーよ」

拓人があっさり否定した。

「あんなのと一緒にされてたまるか」

「……とにかく、麗奈の推理は間違っていたんだ。レッドイーグルは、全くの無実だ。……早く、麗奈達を呼び戻せ」

岩波が強い口調で言うと、刑事たちは慌てふためいて一礼し、先を争って電話に殺到した。

「じゃ、俺たちは事情聴取、ってことっすね」

今まで横で黙っていた隼人も、テキパキと動きだした。

小走りでフロアを横切り、書類棚を開ける。手際良く数枚の書類

を選ぶと、また小走り。そのへんに転がっていたボールペンをパツとつかみ（一応、「借りまーす」と呟いた）、試し書きもそこそこに、最低限の必要事項を記入する。

「書類、用意しました！」

隼人はニツコリと綺麗な表情で、それを岩波に手渡した。

「ああ、どうも」

岩波は呟き、サツと書類に目を通した。

…だが、ふと思いついて顔を上げる。妙に急いだ様子で聴取室に拓人を連れていく隼人が、目に入った。

「おい隼人」

岩波は不機嫌そうに、隼人の背中に怒鳴った。

「まさか、早く終わらせて彼女に会いに行こうってんじゃないだろうな」

…ピタッ。

隼人の動きが、急に止まった。

そして、悪戯っぽく岩波を振り返る。

「やっぱ…ダメっすか？」

「ダメに決まってるだろうが！！ドアホ！！」
岩波の雷が落ちた。

その時。

「いつ、岩波さん！大変です！！」

電話をかけおわった刑事の1人が、声を裏返らせて駆け寄ってきた。冷や汗をかき、小さく震えている。

ただならぬ雰囲気、岩波や隼人、拓人までが立ち尽くした。

「…どうした？」

岩波が、低い声で尋ねた。

「何があった？」

「レッドイーグルとブルーシャークが、喧嘩してるそうです！筑摩

刑事たちも、それに巻き込まれてる、って…それに」

刑事は、青ざめて今にも倒れそうだった。

「ブルーシャークの1人が、銃を持ってるそうです

」

家族のよつに

*

「ふー…」

シャワーを浴び、リフレッシュしたヨーコは、髪を乾かすのもそこそこに、リビングへと向かった。
何故って、今日は珍しい日だから。

「ヨーコ、髪くらい乾かしなさいよ。いくら夏真っ盛りだって、風邪引くわよ」

台所に立つ、やさしく深い声の持ち主。漆黒の髪。涼しげな目もと。いつもは夜まで勤めてから帰ってくる、ヨーコの母・由布子がいるのだ。

由布子は、若い頃から広告代理店に勤めている。ヨーコに似てドジだが、現在は二つの部署を任されるキャリアウーマンだ。

今日から、彼女は二週間の夏休みに入った。だからヨーコは、いつも一緒にいない分、べったりと母親にくっつきっぱなしだ。高校生とはいえ、普段から親がいないのは、心寂しいものなのだ。

「ほら、せめてタオルで髪を拭いときなさい。風邪でもひいて、隼人クンに移しちゃったら、どうするの？」

由布子は悪戯つぽく笑いながら、ヨークを見つめる。

「うーん。そうだねえ」

照れながらヨークが頷いた。そのまま、洗面所に、タオルを取りにスキップしていく。

実は、由布子は隼人が大のお気に入りだ。「あんなにカッコよくて、礼儀正しくて、優しい子は滅多にいないわ」と、よく褒める。だから、隼人が桐原家に来ると、母娘が“隼人争奪戦”を繰り広げるのだ。

おかげで、父・清志郎は、ずいぶん淋しい思いをしているのだが……。

「今日ねっ。隼人に色々助けてもらっちゃったの。でね、隼人カッコいいんだよ。今朝の通り魔事件の時なんか、すごい真剣な顔してさ」

ヨークは、母親にニコニコと話す。

それを、由布子もほんわかとした気持ちで聞いていた。

「へえー。やつぱり、隼人くんはイイ男の子よねえ。ヨーク、将来ちゃんとお嫁に行けるように、シツカリしなくちゃね」

「おっ…お嫁って!」

ヨークは、真っ赤になる。

「お母さん、気が早すぎだよ」

「あら。そうかしら?」

由布子が真顔になった。

「昨日も、父さんと話してたのよ。あの子なら、ヨーコをしっかりと守ってくれる、って。それに…もし、あなた達が結婚したら、隼人くんにも家族が沢山できるでしょ？」

「…あ…」

ヨーコの胸が、トクンと高鳴った。

親と不和で、家を飛び出した隼人。桐原家の人々と知り合うまで、家族の温もりを知らなかった。だから、一時はレッドイーグルに入ったのかもしれない。

けれど、もし隼人にも家族ができれば。とても、嬉しいのではないだろうか。

「そうだね…」

ヨーコは、幸せそうに微笑んだ。

「隼人、喜ぶよ。お母さん達がそんなこと言ってくれた、なんて聞いたら」

隼人の、お嫁さんかあ…。

考えるだけで、こそばゆい。

もし実現できたら、夫婦で刑事になるのかな。楽しそうだな…。

そんなふうには、夢を思い描く娘を見つめながら、由布子も幸せな気分浸っているのだった。

*

黒いローレルは、ビュンビュンと道路を疾走していた。傍から見れば、恐ろしくなるほどのスピードだ。

「おい、奴らが喧嘩してるってのは“あの”公園のことか？」
前を見つめて運転しながら、岩波が怒鳴った。古い車体のエンジン音に、声が掻き消されてしまうのだ。

「たぶん、あそこで合ってます！」
隼人が、助手席で怒鳴り返した。
「俺と岩波さんが、最初に逢ったところだと思います！」

「そうか。ずいぶん懐かしいじゃねえか」
岩波がニヤリと笑った。
「隼人、お前レッドイーグルに会っても平気か？」

「大丈夫ツスよ」
隼人もニヤリとした。

さつき、コテンパンにしてるんで。

「それにしても、悔しいな……」

隼人が呟いた。

「あ？なんだって？」

岩波が聞き返す。

「なんか喋るときはよ、人に聞こえるように言え！」

「こんなことに巻き込まれなかったら、」

隼人が負けじと大声を出した。

「早くヨーコのところに行けたのにな、って言ったんですっ！」

「バカやるっ。お前、警察官か」

苦笑いしながら、岩波はハンドルを切った。ローレルはキイイッと音を立てながら、交差点を急旋回する。まるでハリウッド映画のカーチェイスだ。

「岩波さんっ」

隼人が、旋回のせいで窓ガラスにへばりつきながら、また声をかけた。

「なんだよ！」

少し不機嫌気味な、岩波の返事。

「彼女の話なら、もう聞かねえぞ！」

「あ、すいません。正にその話です」

隼人がチラリと横目で岩波を見る。

「ま、別に何でもないですけど……」

「あーっ、もういいっ！わかったよ。話せ」

岩波がため息をついた。中途半端に話が途切れてしまうのは、どうも苦手なのだ。横で隼人が密かにガッツポーズをしたのを、彼は

知らない。

「ヨーコなんですけど…刑事になるのが小さい頃からの夢なんです」
隼人が、少し視線を落として話した。

エンジン音が、やけに大きく響いている。

「あいつ、熱意も正義感も、人よりずっと強くて…。周りに反対され続けても、絶対に夢を諦めないんです」

「…ほう」

「だけど、ちょっと天然で、おつちよこちよいで…。見ていて、危なっかしく感じることも沢山ある」

隼人は、フロントガラスの向こうの景色を見つめていた。いや、見つめていなかったかもしれない。彼の視線は、どこか、ずっと遠くに飛んでいた。

「あいつ、刑事になったら…色々、悩んだり、迷ったり、すると思っ
うんすよ…」

彼の脳裏に浮かぶのは、愛しい彼女の笑顔。その笑顔の為なら、

何だってできる。どこまででも行ける。

「だから…岩波さんに、見守って貰えばな、って。岩波さんは、
厳しいけど優しいし。岩波さんが見てくれたら、あいつは
絶対に自分の信念を貫けると思う」

運転中だというのに、岩波はポカーンと隼人の横顔を見つめた。

「な、なんじゃそりゃ。気味悪いな」

刑事は、少し動揺していた。『優しい』なんて言われたのは、初
めてだ。それも、よりによって、あの憎まれ口ばかり叩く隼人から
…。

「大体よお、見守るんならお前がすればいいだろう？どうして、わ
ざわざ俺なんだよ」

「だって、岩波さんの方がベテランだし。俺、まだ刑事にもなっ
てないんスよ？」

隼人がニツコリする。

綺麗な、整った顔立ちで。

「…はいはい。そこまで真面目に言われると、しょうがねえな」

岩波は鼻でため息をついた。何だかんだ言って、岩波は隼人に甘
い。厳しく接しているつもりでも、徹底的に厳しさを保つことがで
きない。

それは、もしかしたら　心のどこかで、隼人を息子のよう
に感じているからかも知れなかった。

が、その『甘さ』も一瞬のこと。

「岩波さん、『はい』はひとつっすよ」
からかうように隼人が笑う。

その途端、岩波は急ブレーキを踏み、隼人はフロントガラスにへ
ばりついた。

「態度がでかいんだよ！隼人！！」

エレナの想い

その公園は、喧嘩の荒れ狂う海だった。

パトカーは、ブルーシャークの数人がパイプで叩いたせいで、メチャメチャにされてしまった。いくら防弾ガラスでも、車体への攻撃には耐えられない。

命からがらパトカーから飛び出した刑事たちは、そのままレッドイーグルとブルーシャークの戦いに巻き込まれてしまったのだ。

「うああああ！」

雄叫びを上げて、金髪を突っ立てた男が向かってきた。

「危ないっ！」

エレナが叫び、とっさに立ち尽くしていたマドンナを地面に押し倒す。ほんの一瞬前まで二人が立っていた空中を、金髪の男が振り回すパイプが切り裂いていった。

「早く！こっちへ」

腰が抜けているマドンナを引つ張り、エレナは公園の片隅へと向かう。こんな喧嘩の場では、女は常に危険に曝される。特に、喧嘩に慣れていない、マドンナのような女性は。

「ピストルを使えたらいいけれど…」

悔しげに表情を歪め、マドンナが呟いた。実は、彼女は射撃の名手なのだ。

「仲間に当たってしまうかも知れないから　撃てない」

マドンナと同行していた男性刑事たちは、最初こそは喧嘩を止めさせようと、乱闘の中に飛び込んでいった。しかし、あっという間にコテンパンにされてしまい、今はただ逃げ回るばかり。

「刑事なんて、役に立たないわねっ！」

エレナが辛辣に吐き捨てた。

「態度ばかり偉そうでさ。何も出来ないくせに！」

ピストルを持った少年　坂上優也は、ブランコの前で腕を組み、悠々と戦いを見守っていた。あどけない表情に、ブラウンのさらさらとした長めの髪が流れている。

レッドイーグルは、圧倒的に不利な状況にあった。アジトから逃げ出してきたばかりだったので、武器となるものを何も持っていない。

それにひきかえ、ブルーシャークは用意周到だ。鉄パイプやらナイフやらを手に行っている者が多い。

みるみるうちに、レッドイーグルは追い込まれていく。

「刑事なんて、無力よ……」

エレナが、震えた声で呟いた。

「喧嘩ひとつ、止められないなんて」

こんなとき、隼人が居てくれたら……。

*

「もうすぐだ」

猛スピードでローレルを走らせながら、岩波が声をかける。

「ハイ！」

真面目な表情に戻った隼人が答えた。

そのとき。

少し開けられていた車の窓から、一筋の細い風が流れ込んできた。

風は踊り、つくつくぼうしの鳴き声と混じりあい、車内に爽やかな夏の香りを撒き散らす。

ふわっ。

風に煽られ、隼人の足下から何やら紙切れのようなものが舞い上がってきた。

「？」

隼人は、指先で紙切れを捕まえる。ボロボロで、破れてしまいうな紙。裏返してみると、そこには思いがけないものがプリントされていた。

昔の、隼人とエレナが。

「！」

隼人は、思わず息を呑んだ。どうして。何故、こんなものがここに？

そして、思い出した。ヨーコと最後にキスを交わしたとき、落ちてきた紙切れ。それが、この写真なのだ。

「エレナが、ヨーコに見せちまったんだろうな……」

小さく呟いて、隼人は写真の中の自分と見つめあった。

ミルクティー色の髪をした、少し幼い隼人。その隣で、幸せそうに笑うエレナ……。

こんなにボロボロになるまで。

エレナは、写真を肌身離さず、持ち歩いていたようだ。

「……」

隼人は、目を細め、少し哀しそうに微笑んだ。

「傷つけて、ごめんな。エレナ」

その呟きは、エンジン音に掻き消され、岩波の耳には届かない。

やがて、ローレルは運命の場所に辿り着いた。

*

「ぎゃあっ!」

叫びを上げて、また一人、レッドイーグルのメンバーが倒れた。

公園の喧騒は、果てしない。右で殴りあっているかと思えば、左でリンチまがいの暴行。前でナイフを使った決闘が起きているかと思えば、後ろで鉄パイプが派手な音を立てる。

公園中に、血跡が飛び散っている。それは、おぞましい光景だった。

隅に非難していたエレナとマドンナにも、危機が迫っていた。

「どっちから片付けてやるうか、ねーちゃん」

ドロドロに長髪を振り乱した色黒の男が、ナイフ片手に二人を見比べている。

「ただ殺っちまうのは簡単だけどよ…せっかく女なんだから、楽しませて貰うぜエ…」

男の手が、エレナの胸に伸びた。

「い…やっ!」

エレナは身を捻って逃げようとする。しかし、喉元にナイフを突き付けられ、その動きは止まった。

「お前のコトは知ってるよ、エレナちゃん」

男がニヤニヤといやらしく笑う。

「隼人に逃げられた女だろう？…寂しくねえのか？あいつに抱かれなくてよ」

エレナは、キツと男を睨み付けた。

「隼人は、もう関係ないわ」

しかし、男は笑みを浮かべたまま舌なめずりした。

「俺が慰めてやるつか…」

その手が、ギュツとエレナの胸を揉みこんだ。

「やめなさい！」

マドンナが、男に掴みかかる。ヒールの踵で男の足を踏み付けたのだ。

「ひいー！」

男がのけぞった。ヒールで踏まれるのは、この上なく痛いものだ。マドンナは、その瞬間を見計らってナイフを叩き落とす。エレナは、その隙に男の手を自分の胸から引き離れた。

「女だからって、なめるんじゃないわよ」

マドンナが言い放った。強い瞳。全身から放たれる、冷たいオーラ。

「女を辱めようとするなんて、最低の男ね。ただのケダモノじゃない」

「ひっ、ひいー！」

男が呻いた。マドンナのヒールは、男を逃がすことなく踏み付け

続ける。

しかし。

それに気付いた別のブルーシャークの仲間が、駆け寄ってきた。

「このアマー！」

怒鳴ると、マドンナの鳩尾みそおちに強烈な一発を打ち込む。

「うっ！」

くぐもった声と共に、マドンナの美しい身体が、力なく地面に崩れた。

「！」

エレナは目を見開き、とっさにマドンナの傍にしゃがみこむ。

「ちよつと！大丈夫!？」

しかし、マドンナは微かに身じろぎしただけで、起き上がる気配は無い。

「やだあ……しつかりしてえっ」

泣きそうになりながら、エレナはマドンナを揺さ振った。だが、それも束の間。男たちの強い力で押され、地面に転がる。

「堪忍しな、ねーちゃん。あがいたってムダだぜ」

長髪の男が、再びエレナの胸をまさぐりだした。

エレナは震えるばかりで、身動きできない。

助けて。誰か。

たすけて…！！

「うわあああ！」

ふいに、公園の入り口の方から、叫び声がした。

「…なんだ…？」

エレナから目を離し、ブルーシャークの男たちが振り返る。つられて、エレナも視線を走らせた。

そして、

その瞳は、
大きく見開かれた。

「ずいぶん派手にやってんな」

懐かしい口調。

綺麗な横顔。

聡明で真つ直ぐな眼光。

エレナが、ずっとずっと想い続けてきたひと。

隼人が、立っていた。

危機と蝉

「ずいぶん派手にやってんな」

彼の黒髪が風に揺れて、たなびいている。

今は、警察官。けれど、ブルーシャークにとっては、今も畏れの対象となっている人物。時を経ても、彼の喧嘩強さは、伝説のように残った。

「隼人…！」

エレナが、その名を呼んだ。

「あ…」

倒れていた臼井も、息を呑む。レッドイーグルもブルーシャークも、戦いを中断し、現れた青年を見つめ続ける。恐らく、もうどちらの味方でもない彼を。喧嘩を止めに来たであろう彼を。

「何だよ。お前が登場しただけで喧嘩が終わっちゃうなんて、つまんねえな」

後から現れた岩波が、ボソツと言った。

「岩波さん、喧嘩したかったんスか？」

隼人が意外そうに聞く。

「ちょっと、久しぶりに暴れてみたかったかも知れねえな」
岩波がフフン、と笑った。

その後ろに控えているのは、二十人ほどの刑事や警察官達だ。皆、警棒や手錠を構えて、不良たちを睨み付けている。

「とりあえず、全員検挙だ」

岩波が言った。

「誰か、麗奈を頼む」

その言葉と共に、数人の刑事たちが走った。ブルーシャークを押し退けて、倒れていたマドンナを抱え上げ、戻ってくる。その間、誰も身動きしない。『隼人』の存在が、全てを氷漬けにしてしまったようだ。

マドンナは、ローレルの後部座席に寝かされた。

「まったく、無茶しやがって」

岩波が、マドンナを横目で見ながら呟く。二人は、同期で刑事となった。だから、お互いのことを良く解っている。

「お前は、一生懸命すぎるんだよ……」

態度は、“マドンナ”みたいでもな。俺にとっては、お前はいつまでも、刑事になりたての頃の“筑摩麗奈”なんだよ……。

「さて、と」

警察官の1人 松田が、岩波と隼人を見てニッコリした。

「やりますか、検挙」

「おう」

岩波が頷く。

次の瞬間。

「ああああああっ！！」

叫び声が響き渡った。

*

ヨーコは、由布子が煎れてくれた熱い焙じ茶を、フーツと吹いてから口に運んだ。

「ところで、隼人くんは今日のご飯食べに来れないの？」
向かいあつて座り、由布子が焙じ茶を啜って尋ねる。

「うーん。事件の犯人を捕まえたから、忙しいんじゃないかな。事情聴取とかで」

ヨーコは、マグをテーブルに置いた。猫舌の彼女には、ちょっと熱すぎた。しばらく冷ましておかなければならない。

「そうかー。この機会だし、久しぶりに集まってご飯食べれたらいいな、って思ったんだけど。隼人くんもお仕事大変ねえ」

由布子が呟きながら頷く。仕事の忙しさは、身を持ってわかるからだ。

「電話、してみようかな…あ、ダメか」

ヨーコは、掛け時計を見上げた。今、五時半を回ったところだ。

「…まだきつと、お仕事してるよ」

「そうね。もう少し後にしたら？」
由布子がのんびりと言った。

*

叫び声の主は、坂上優也だった。何を思ったか、エレナの元に駆け寄ると、その細い腕をつかみ、強引に公園の真ん中に引っ張ってくる。

「ちよっ…何するのよ！」

エレナは、少年の手を振りほどこうと身を振る。しかし、その動きは、エレナが優也の目を見た瞬間に止まった。

憎悪に燃えた瞳。

狂気すら感じさせる、鋭い眼差し。

殺される。

エレナは、本能的に、それを感じ取った。

坂上優也は、エレナを後ろから羽交い締めにすると、その頭にピストルの銃口を突き付けた。

「！」

警察もレッドイーグルも、ハッとして固まる。

「おい…お前」

優也がエレナを締め付けながら、ゆっくりと隼人を睨み付けた。

「ボクの兄貴　坂上哲哉を殺したのは、お前だろうか？隼人」

しん、と公園が静まり返った。

隼人も、突然のことに目を見開く。

いきなり話題に出された、昔の事件。喧嘩でもつれ合っている最中に、隼人が誤って哲哉を殺してしまった事件だ。しかし…

「隼人には正当防衛が認められた筈だ」
岩波が静かに言った。

が、優也は不気味に笑うだけ。
「正当防衛だろうが何だろうが、関係ないね。兄貴が隼人に殺されたことに変わりはないよ　ボクが、兄貴の仇をとってやる…」

熱に浮かされたような口調。エレナはゾツとして、身をすくめる。

隼人が、エレナを助けだそうと前にでた。その途端

「…動くな！」

優也が、銃口をしつかりとエレナに向けながら怒鳴った。

「動くなよ、隼人…逃げたら、この女の命がないぜ…？」

「い…や…」

エレナは、あまりの恐怖に声も出ない。ミルクティー色の髪だけが、むなしく風に揺れる。

「エレナ…！」

隼人が、歯を食い縛った。エレナは、昔隼人が犯してしまった過ちとは関係がない。早く助けださなければ…。

「クソツ。面倒くさいことしやがって」 岩波が悪態をついた。

しかし、どうすることもできない。誰もが、ただ立ち尽くしている。

…そんな緊迫した中でも、つくつくぼうしが、鳴き続けていた。

ツクツクボーシ、
ツクツクボーシ、

ツクボーシ、
ツクボーシ、

ツクツクツク…

その鳴き声は、拳銃を突き付けられているエレナの全身に、強く染み渡っていく。

隼人が、レッドイーグルを出ていったときに鳴っていた蝉。

隼人とあたしが、別れたときに鳴っていた蝉。

隼人とあたしを、いつも引き離す、そんな、夏の蝉

。

繰り返し浮かぶ、隼人とヨーコの笑顔。

…彼の隣に立つのは、もう、あたしじゃない。

あたしは、二度と隼人と笑いあえない。

あたしは、これからも、ずっつと独りぼっち…。

「いいわよ。もう」

エレナは、強ばっていた身体から、力を抜いた。

突然のことに驚き、優也がエレナを見やる。

エレナは、目を閉じて呟いた。

「いいわよ。やりたいなら、あたしを殺してよ……」

銃声

「なっ……」

隼人は、目を見開いた。

彼女が発した眩きが、聞こえたから。

「あたしを殺してよ。今すぐに」

エレナは、再び優也に言った。今度は、さげぶような大声。

「バカ言うな!!」

隼人が怒鳴った。

「何言ってるんだよっ」

しかし、エレナは目を閉じたまま、隼人を見ようとしめない。

「あなたに、もう何も言われたくない……!」

「え……?」

隼人は、ただ彼女を見ていることしか出来なかった。頭にピストルを突き付けられている、華奢な少女を。

「独りぼっちになる位なら……もう、生きてたくなんかない……」

エレナの頬に、キラリと一筋、何かが流れた。

「生きてたって、何も良いことないもん……。帰れる家もなくて、不

良って言われて、虫けら扱いされて。何かあったら、犯人扱いされて…
通り魔だって、あたし達のせいになれる…」

「…ああ、お前の言うとおりだ…。通り魔はレッドイーグルじゃないかったよ」

岩波が言った。

「ちゃんと、別の犯人を見つけた」

一瞬の沈黙。

ピインと張り詰めた、肌を刺すような静けさ。

「…なんだって？」

ブルーシャークが、ざわめきだした。

「じゃ、じゃあ…リーダーを殺したのは、レッドイーグルじゃないのか!？」

「そうだ。レッドイーグルじゃない」

隼人が答える。

「お前ら、誤解してたんだろ？だから、こんな喧嘩になったんじゃないのか？」

ブルーシャークは、ただ呆然とするばかりだ。

「今回は、俺達にミスがあった」

岩波が続ける。

「確かに、俺達警察は…お前達をすぐ疑う。だが、これがいい教訓になるだろう。『不良だから』という先入観だけでは、お前達を疑うことは出来ない、と」

エレナは、羽交い締めになれながら、涙を零して震えるばかりだった。

「気付くのが遅すぎるわよ…!!あたしは、もう…」

彼女の潤んだ視線が、隼人を捉えた。

「大切なものを失ったのよ…」

隼人は、俯いた。

自分の存在が、エレナにとってどれだけ大きなものだったのか、改めて感じさせられた。

そして、彼女が背負う“孤独”を作ってしまったのが、自分だということも…。

自分は、レッドイーグルを抜けてから、幸せな毎日を送ってきた。岩波と出逢い、ヨーコと出逢い、沢山の温かい人たちに出逢った。

けれど、残されたエレナは。日々を生きていくのに精一杯で。どんなに寂しくても、抱きしめあう相手すら失ってしまった。

そこには、希望などない。絶望しか存在しない。死にたいと思うほどに深い、絶望しか…。

「…ごめん」

隼人が、震える声で呟いた。

「ごめん…エレナ」

「…」

エレナは、隼人から目を逸らし、泣きながら頭くちかを垂れた。

もう、いい。

あたしに、未来なんて無いから。最後にあなたを見られただけで、
幸せだよ。

さよなら、隼人。

優也が、ピストルを構え直したのがわかった。

エレナは、ギョツと目を閉じる…。

パーン！！

銃声が、響いた。

*

その瞬間、エレナは地面に叩きつけられた。

全身を襲う激しい痛み。

涙で、何も見えない。

何か、重いものがエレナの身体にのしかかっているようだ。

これが、『死ぬ』ってことなんだ…。

ぼんやりとした感覚の中で、エレナは思った。

なあんだ。あたしの人生って、こんなにあっけなく終われるものだったんだあ…。

なんだか暖かいものに包まれている気がして、エレナは、何故か

ちよっぴり嬉しかった。

しかし。

エレナの上のしかかっていた重みは、乱暴に取り払われた。

同時に、つくつくぼうしの鳴き声が、うるさい程にエレナの耳に流れ込んできた。

「……？」

エレナは、目を開けた。

目の前には、公園の地面が広がっている。そして、沢山の人の脚が見えた。スニーカーやら、革靴やら。エレナを取り囲んでいるようだ。

エレナは、プルプルと頭を振った。動かせる。全身が痛むが、エレナは、自分がまだ生きていることを悟った。

その時、怒鳴り声に近い叫びが、エレナを貫いた…。

「おい！！俺の声、聞こえるか！？返事しろ！」

エレナは、ハッと身を起こした。

彼女の辺りの地面が、血で真っ赤に染まっている。

そして、エレナは、あまりに残酷な光景を見た…。

「返事しろ！おい！！」

懸命に怒鳴り続ける岩波。

その腕に抱き抱えられた隼人は、身動き一つしなかった。

伝えたいこと

「返事しろ！隼人！」

岩波の怒鳴り声は、公園中に響き渡った。

うそ。

エレナは、何も考えられなかった。目の前の光景が、信じられなかった。

岩波の腕に上半身を抱きかかえられ、地面に倒れている、大好きな人。

「はやと…？」

身動き一つしない彼の胸から、血が流れだしている。その赤が、エレナの眼を焼いていく。

「隼人！はやと！」

岩波は、隼人に必死に呼び掛ける。彼の綺麗な横顔は、どんどん血の気を失っていく。代わりに、撃たれた胸の傷から流れる血は、止まりそうにない。

「早く！誰か、救急車を呼べ！」

叫んだのは、臼井だった。大声でレッドイーグルに指示を飛ばす。

「ハイ！」 レッドイーグルが慌てて、携帯を引っ張りだした。あ
る者は、自分のシャツを引き裂いて岩波のもとに駆け寄る。

「刑事さん！早く止血して！」

「あ、ああ！」

岩波は返事しながらも、動転していた。パニックだ。何をしてい
いか、わからない。

覚えているのは、隼人がエレナの元に駆けて行って、彼女を突飛
ばしたこと。その瞬間…彼は撃たれた。そして、ガックリと、しか
しエレナを守るように倒れた。

岩波の様子を見たレッドイーグルの一人は、しゃがみこみ、少し
隼人の身体を自分に引き寄せた。血に染まった隼人のシャツを引き
裂くと、生々しい傷が姿を現わす。傷は、ドクドクと血を流し続け
ていた。

不良少年は、自分のTシャツの布切れで隼人の傷口をギュツと押
さえる。しかし、その布もすぐに真っ赤に染まる。

「刑事さん、落ち着いて」

不良少年が岩波に声をかけた。

「今、仲間が救急車を呼んだから」

岩波は、堅い表情で頷いた。

ブルーシャークは、ガタガタ震えるばかりだ。猟奇的な笑みを浮かべる優也と共に、固まって立っている。刑事たちは次々に彼らに手錠をかけ、パトカーまでつれていく。しかし、彼らの視線も隼人に向けられていた。

優也のピストルの黒い銃身は、隼人の血の中に転がっていた。それを松田が拾い上げ、証拠物品としてビニールに包んだ。

「隼人……」

彼は擦れた声で呟いた。が、唇を噛み締めると、パトカーへと駆けていった。出来ることならずと隼人の傍にいたい。けれども、それは出来ない。まだ、彼ら警察官の仕事は終わっていないのだ。

「隼人！」

岩波は、布切れで止血を試みながら、もう一度呼び掛ける。すると、微かに隼人の目蓋が動いた。

「いわ……なみ……さ……」

擦れて弱々しい声。普段の元気いっばいな彼とは、全く違う声。

岩波は、そんな隼人が発した声にビクンと反応した。

「隼人！俺の声、聞こえるか！？」

隼人は、そつと目を開いた。が、苦しそうに、すぐまた閉じてしまいそうになる。

「隼人！ダメだつ。俺を見てろ。目を閉じるな」
岩波が怒鳴り付けた。

すると、隼人はほんの少しだけ、口元を上げた。

「岩波さん…声、でかい…」

「バカ。こんな時に減らず口叩くな」

岩波が言い返した。

「すぐ、救急車が来るからな。それまで持ちこたえろよ」

隼人は、目蓋の動きで頷く。それが余りに弱々しくて、岩波は不安に駆られた。

「いわなみさん…」

隼人が、呼び掛けた。呼吸が荒い。胸を撃たれたのだ。息をするのも苦しさが伴う。

彼の唇が何か言いたげに動いたので、岩波は隼人に顔を近付けた。

「あいつら」のこと…」

辛うじて聞き取れる程の、小さな小さな声。

「わかってる」

岩波が、ギョツと隼人の手を握った。

「それ、から…ヨーコのこと…も…」

隼人の視線と岩波の視線が、重なり合う。

「わかってるって」

岩波は、震え始めた声で答えた。

「バーカ。何を俺に頼んでんだよ。今から死ぬ奴じゃあるまいし」

隼人は、微笑んだままだった。時折、胸が激しく痛むのか、顔を歪める。

「はやと…」

エレナが、泣きながら隼人を覗き込んだ。

「何で…なんで、あたしを庇ったのよ…!! バカ!」 「なんか…俺みんなに、バカって…言われるな…」

隼人が苦笑いした。

「だって、バカなんだもん!」

エレナが激しく泣きじゃくった。

「大切な人がいるんでしょ?! どうして、撃たれちゃうのよ!」

「大方、何にも考えずに飛び込んだんだろうが」

岩波が口元を僅かに上げ、隼人を見つめた。

「直情径行型のバカだからな、隼人は」

「…バカって、いうなよ…俺のせいで、エレナを、傷つける訳にはいかなかったんだ…」

隼人は小さく笑い、しかし、苦しげに呼吸を荒くした。黒い、まっすぐの髪から、冷や汗が流れ落ちる。

ピク、と隼人の指先が痙攣したように感じて、岩波は再び彼の名

を呼び始めた。

「隼人。もうすぐ、だからな。救急車が来るから」

隼人は、大きく呼吸を繰り返すばかりで、返事をしない。呼吸の度に、肩や胸が大きく上下する。

「隼人。しっかりして」

エレナが、ぼろぼろと涙を零した。

「死んだりしちゃ、ダメだからね。あのヨーコとかいう子にまで、寂しい思いさせちゃダメだからね」

「そうだぜ」

岩波が言った。

「彼女を刑事にするのは、本当はお前の役目なんだからな」

隼人が、本当に微かに、笑ったように見えた。

「いわ…なみ、さん…」

呼吸の間から、彼は言葉を紡ぎだした。

消えてしまいそうな言葉を。

けれど、隼人の瞳は真っ直ぐ、強い光を持って岩波を見ていた。

「…俺のこと…」

信じて、くれて。

…ありがとう、う」

ふわ、と風が吹いた。

まるで、それに身を任せるように。

隼人の目蓋がスツ、と閉じていく。

同時に、岩波が握っていた隼人の手が、力が抜けて地面に落ちた……。

それは、スローモーションのように、岩波には見えた。

「隼人……？」

震える声で、呼び掛ける。しかし、隼人はもうぴくりともしない。揺すっても、動かない。綺麗な横顔が、岩波の為すがままに揺れるだけ。

「うそ……隼人……」

エレナが、首を横に振った。

「いや……！隼人……！」

レッドイーグルのメンバー達も、信じられないという顔で、立ち尽くしている。

「起きろ！隼人！」

岩波が吠えた。それでも、隼人は目を覚まさない。いつものように、減らず口を叩いたりもしない。

「隼人

！！」

岩波の叫びは、天高く舞い上がった。

ちょうどその時、どこからか救急車のサイレンが聞こえてきた。

もう、蝉は鳴いていなかった。

不安

午後六時半。

ふいに、桐原家の電話がけたたましく鳴った。

「あつ。隼人かなー？」

ウキウキした足取りで、ヨーコが電話に向かう。

「あ、もし隼人くんだったら、ご飯食べに来れないか、ちゃんと聞くのよ」

台所でトマトを洗いながら、由布子が娘に言った。

「はいっ」

元気いっぱい、ヨーコが返事する。何とも微笑ましい、母娘のやり取りだ。

ヨーコは、にこやかに電話に出る。隼人と話せるだけで、彼女は世界一幸せになれるのだ。

「もしもし。桐原ですっ」

ところが、電話の向こうから聞こえてきたのは、隼人の声では無かった。

『桐原ヨーコさん、か？』

低い男の声。

『岩波だ。刑事の』

「あ、岩波さん？」

ヨーコは瞬きした。ベテラン刑事が、何の用だろうか。
「今日は、ありがとうございます」
とりあえず、丁寧にお礼を言う。

しかし、岩波はそんなヨーコの言葉には答えなかった。
『今すぐ　本町総合病院に来れるか？』

「え？」

思わず、ヨーコは聞き返した。

病院？なんで？

『とにかく、急いで来てくれ』

岩波は、早口で告げた。

『隼人が撃たれた』

「……え……」

ヨーコの口元から、一瞬にして笑みが消え去った。

今、何ていったの？

『もう、意識が無い。とりあえず、まだ心臓は動いているが…どうなるか、俺にもよくわからん。』
とにかく、来てくれ』

そんな岩波の言葉は、混乱するヨーコを、四方八方から殴り付ける。

意識がない、って。

『まだ』心臓が動いてる、って。

どづいづいと？

頭が真っ白になる。何も答えることが出来ないまま、ヨーコは受話器を取り落とした。

ガッシャーン！！

受話器は、大きな音と共に床に転がる。

「どづしたの!?!」

ただ事ならぬ娘の気配に、由布子が驚いてやってきた。

青ざめたヨーコは、震えながら立ち尽くしている。

「隼人が…!」

*

ヨーコと由布子が、総合病院に駆け付けたのは、七時を少し回った時だった。看護師に案内され、五階まで上がる。エレベーターの速度さえ、今のヨーコにはもどかしい。

エレベーターの扉が開いた途端、ヨーコは弾けるように飛び出した。

明るく、清潔なフロア。真つ正面の突き当たりに、ステンレス製の手術室の扉が見える。扉の上部には小さなランプがあり、『手術中』の表示が灯っていた。

その扉の前を、数人の医師たちが、急ぎ足で行き交う。誰かが、輸血用の血液を追加で持つてくるよう指示しているのが、ヨーコの耳にも聞こえた。

隼人。無事でいて!!

ヨーコの胸が、不安にドキンドキンと早鐘を打つ。

「桐原さん!!」

呼び声と共に駆けつけてきたのは、松田だった。隼人の先輩で、もうすぐ刑事に昇格となる人。顔を合わせたことは無いが、お互い、隼人に話を聞いたことがある。

「松田さん、ですか…?」

ヨークは、今にも泣き出しそうな顔で松田を見つめた。
「隼人は？どうなっちゃうの？何があったの？」

「…落ち着いて下さい」

松田は、真剣な表情で言った。

「これから、どうなるかはわかりません。生きるか死ぬか…は、隼人の体力にかかっています」

「そんな」

ヨークは、小さく首を横に振った。

「いや…隼人…」

「隼人も今、手術室で頑張ってるから…」

松田は、ポン、とヨークの肩に両手を置く。

「桐原さんも、気をしっかり持ってください」

「…はい…」

一応、そう答えたものの、ヨークには『気をしっかり持つ』『自信など全く無かった。とにかく、早く隼人に会いたい。それだけだった。』

「ヨーク。お母さん、お医者さんに色々聞いてくるからね」

由布子が、娘に声をかける。流星は母親だ。不安そうではあるが、ときばきと動く。

「あなたがしつかりしないで、どうするの。きちんと隼人くんを待っててあげなきゃ。ね？」

「うん…」

ヨークは、俯いた。その目から、涙が一粒、床に落ちる。

「じゃあ…失礼しますね」

由布子が軽く松田に会釈して立ち去ると、ヨーコはますます気弱になった。何か、重たい黒雲のようなものが、彼女を締め付け続けている。

隼人。

死んじゃ嫌だよ。

また、あたしに笑ってくれなきゃ嫌だよ。

それに、あたしまだ隼人に『愛してる』って言ってないよ。

お願い。生きて。

頑張つて生きて！！

立ち尽くし、涙を流すばかりのヨーコを見て、松田も、どうしようもない気持ちに襲われていた。

マドンナが、エレナに付き添われて現れたのは、そんな時だった。

「筑摩刑事！立川さん！」

松田が、いちはやく二人の姿に気付いた。その声を聞いて、ヨーコは涙でぐちゃぐちゃの顔を上げる。

普段のスーツとは違い、ゆったりと長いカーディガンを羽織っているマドンナは、殴られた部分が痛むらしく、まだちょっと歩くのが辛そうだ。それでも、いつもの気丈さは復活していた。

「私が倒れているうちに、とんでもないことになったわね　立

川さんが、全部話してくれたわ」

ヨーコは、ハツとしてエレナに目を向けた。

エレナは、さっきと同じ服装をして、俯いていた。病院内では、ミルクティー色の乱れた髪が、とても目立つ。

しかし、髪以上にヨーコの目を引いたのは、エレナの服だった。スパンコール製のパーカーや、白いキャミソールが、見ていて恐ろしくなる位、真っ赤に染まってしまっている。それは、どう考えても血にしか見えなかった。

「それ…隼人の血、なの…？」

ヨーコは、小さく震えていた。

エレナが、俯いたまま、こくと頷く。

その途端、ヨーコは大きなものに頭を殴られたような気がした。

こんなに服が染まってしまうほど、隼人は血を流していたの？

そういえば、つい先ほど医師たちが輸血について話していた。その会話の断片が、エレナの服についた血の色と結合し、ヨーコに迫ってくる。

隼人。

こんなに血を流して。
痛いよね？

苦しいよね？

「やだ…はやと…」

涙が、止まらない。ヨークは、その場にしゃがみこんでしまった。

「ごめんね…全部、あたしのせいなの」

エレナが、小さな声で呟いた。

けれどそれは、激しく嗚咽を洩らすヨークには、聞こえてはいなかった。

彼の思い描いた目標

重苦しい空気の中、皆が手術の終わりを待っていた。隼人の無事を、祈りながら…。

その時、エレナの頭の中では、先ほど岩波に教えられたことが渦巻いていた。

それは、隼人がレッドイーグルを抜け、警察官となった、本当の理由。

*

『こいつは。お前たちレッドイーグルの為に、警察官になったんだよ』

岩波が、救急車の中で、そうエレナに告げた。

ストレッチャーに乗せられた隼人は、人工呼吸器をつけられ、あつという間に様々な管に繋がれていく。

『え…？』

エレナは、そんな隼人から目を離し、岩波を見つめた。

『嘘よ。だって、隼人言つてたもん。喧嘩するのが嫌になったから、レッドイーグルを抜けたんだ』って』

昔。

ムーン・リヴァーがBGMとして流れるバーで、並んでシャンパ

ンを飲みながら…確かに、隼人はそう言った。

『それも、理由の一つだけだな』

岩波が静かに言った。その手は、隼人の手を無意識に握りしめたままだ。

『こいつ、俺に言ったんだよ。もし、自分が一人前の刑事になって、周囲からも認められたら…レッドイーグルの仲間も、希望を持てるんじゃないか、ってな。どんなに不良で、どんなに世間から見放されていても、幸せになれるということ。隼人は、お前らに証明しようとしてたんだ』

エレナは、ただ黙って聞いていた。岩波の話は続く。

『それを聞いた俺は、隼人がレッドイーグルと接触するのを禁じた。一人前になる前に、また元の世界に戻っちゃうことの無いように。だが、お前は、隼人に棄てられたように感じただろうか』

エレナが、頷いた。

隼人がレッドイーグルを抜けてから、ずっと、そう思ってきた。

自分は、隼人に棄てられた。これからも、独りぼっちなのだと…。

『だがな。隼人は、レッドイーグルの事も、お前の事も、忘れてたりしなかった』

岩波が言った。

『そうじゃなきゃ、こいつは警察官になんかなれなかった。したことも無い勉強をして。暴力を振るうのもやめて。真面目に、横道に逸れる事なくやってこれたのは、確実な目標があったからだ』

レッドイーグルに、希望を与えると、希望という目標が…。

『隼人は、新しい彼女を見つけた。でも、恋人という感覚では無かったにせよ、“立川エレナ”のことを忘れた日は無かった。だから、俺は毎回、隼人に言い続けてきた。目標を達成するまでは、立川エレナに接触するな、と』

岩波は言葉を切った。そして、エレナを一瞬だけ見て、また目を伏せた。

『お前が、隼人に棄てられたように感じたのは、ある意味俺のせいだ。隼人を恨むな。俺を恨め』

いつの間にか、エレナの肩が震えていた。目からは、乾くことなく涙が溢れてくる。

『今までは、恨んでたよ。あたしを、独りぼっちにした隼人のこと。大好きだけど、恨んでた…。でも、もう恨んだりしない。隼人も、あなたも』

彼女が、涙の間から、何とか言った。
『あたし。独りぼっちなんかじゃ無かったんだね…』

『ああ』

岩波が頷いた。

『この世に、本当に独りきりの人間なんていねえよ』

救急車が病院にたどり着いたのは、そのすぐ後のことだった。

*

『手術中』のランプが、フツと消えた。

「終わつたみたいですな」

松田が呟く。殆ど同時に、ステンレス製の手術室の扉が開いた。

中から、青い手術服に身を包んだ医者が一人出てきて、一同に軽く会釈する。

誰もが、張り詰めた緊張の中で、医者の言葉を待った。

「出来る限りのことは、尽くしました」

医者が、マスクを外しながら言った。

「どうぞ、中へ。ご家族の方には、後でお話を致します」

松田が先頭に立ち、次にマドンナが椅子から立ち上がった。

エレナとヨーコは一瞬譲り合ったが、結局、一緒に並んでマドンナに続いた。

厳しい宣告

手術室に入るとき、各々にマスクとヘアキャップが配られた。それをきちんと身につけてから、奥へと踏み入る。

手術台とは離れたところに、三台のストレッチャーがあった。その一台に、隼人が横たわっている。

皆は、無言で彼を取り囲んだ。

いつも通りの、綺麗な横顔。黒く真っ直ぐの髪。けれど、彼は今、人工呼吸器をつけられ、様々な管に繋がれている。その痛々しい姿を初めて目にしたヨーコは、ハッと息を呑んだ。

「はやく…」

呼び掛けても、彼は答えない。いつもは、すぐにニッコリして答えてくれるのに…。

「酷なことを言うようですが」

医者が、静かに言った。

「彼は、このまま目を覚まさないかもしれません」

「！」

一同が、揃って医者を見つめた。

「どういうことですか」

尋ねる松田の聲が、擦れていた。

「隼人は、死ぬんですか」

「やめてえー!!」

ヨーコが叫び、床に崩れ落ちた。

「やだあ…そんなの、いやあ…」

エレナも、床がガラガラと崩れ落ちていくような感覚を覚えた。

「そんな…」

呟くと、キツと医者につかみかかる。

「ちよつと！あんた、ちゃんと隼人のこと手術したの！？医者でしよつ？隼人を助けてよっ！！」

「立川さん!!」

マドンナが叫び、エレナを後ろから抱きしめて、医者から引き離した。

「まだ、お医者様の話は終わってないわ。最後まで聞きましょう」

「…」
エレナは、唇を噛み締めながら、医者から手を離れた。

「医者は、このような扱いには慣れてるようだ。特に気分を害したふうでもなく、説明を続ける。」

「彼は、死にはしませんよ。ただ、目を覚まさないかも知れない、というだけです」

…誰も、何の反応も示さない。

というより、医者と言った意味が解らないのだ。

「こういえば、解りやすいでしょうか」

医者はカルテを確認しながら言った。

「彼の場合、出血が非常に多かったので、脳に供給される酸素量が激減してしまっただけですね。それが原因で、今、彼の脳は正常に働いていない。」

呼吸・消化などは自力で出来ますが、動いたり話したりは出来ません」

淡々と語られる、隼人の状態。

「それって…つまり、『植物状態』って言うんじゃないの？」

マドンナが、小さな声で言った。

「何度か聞いたことがあるわ…」

「そうお考え頂いて結構です」

医者が言った。

「正確には、この状態が三年以上続いて、初めて『植物状態』といえます。」

それまでは、意識を取り戻す可能性も大いにあります」

「……」
誰もが、無口だった。隼人の綺麗な顔を見ると、医者の言ったことが全て嘘なのではないかと思えてくる。彼は、今にも冗談を言いながら起きてきそうだった。

しかし、現実を受けとめなければならぬ。これからのことを考えなければ、未来は開けないのだ。

「彼は、心拍数も落ち着いてきているようなので、これから病棟に移します。」

ご家族の方は、重要な話がありますので、ついてきて下さい。それ以外の方は、申し訳ありませんがお引き取り下さい」「

その機械的な台詞を聞いて、一同は困って目を見合せた。

隼人に、家族がないからだ。本来なら、ついていく資格のある人間はここには居ない。

しかし……。

「あたし、行きます」

エレナが静かに言った。

「桐原さんと一緒に」

泣きじゃくるヨーコは、エレナに無理矢理立たされた。

『家族』の決断

*

病室には、すでに岩波と由布子が椅子に座って待機していた。

由布子の目は赤く、泣いていたのが見て取れる。恐らく、ヨーク達と同じ説明を受けたのだろう。彼女は無言で、入ってきた娘を抱き締めた。

岩波は、厳しい目で隼人を見ているばかりだ。エレナは、そっと岩波の隣に腰掛ける。

雰囲気は、かなり重い。しかし、この病室にいるのは、みんな隼人を愛する『家族』だった。

隼人が、きちんとしたベッドに移された後、医者は話し始めた。

「先程も説明しましたが、この状態のまま二年が経過しますと、『植物状態』となります」

「はい…そう伺いました」

礼儀正しく、由布子が答えた。

「それで、ですね…」

医者が眼鏡を光らせた。

「岩波さんは、職業柄ご存知でしょうが…『植物状態』の人間には、

ある権利が生まれます」

「権利？」

エレナが怪訝そうに首を捻る。

「意識の無い人間に、何の権利が生まれるの？」

「それは」

医者は、ちよつと言ひ辛そうに息をついた。

「『死ぬ権利』です」

びくん！！

ヨーコが目を見開き、大きく震えた。今の彼女にとって、『死』という言葉は余りに残酷に響く。まるで、目の前に横たわっている隼人が、砂となって消え去ってしまうような感覚。

「『尊厳死』という言葉があります」

医者が言った。

「機械に繋がれたまま生きるよりも、人間らしく死ぬのを選ぶことを言います。その場合、本人かご家族の意思表示が必要となります」

「…」

「彼は、」

医者は、眠る隼人をチラリと見た。

「これまでに意思表示をしていません。ですから、もし三年経って、」

『尊厳死』を望まれる場合は、皆さんが意思表示して頂く形になります」

「私たちが、隼人くんの生死を決める　　という事ですね？」
由布子が呟いた。

「そうです」

医者が答える。

「いざその時になると、答えは以外に出ないものです。念のため…
予め相談されておくことをお勧めします」

それは、隼人の『家族たち』にとっては、余りに重い宣告だった。

人の生死を、他人が決める。その責任は、ズンと四人にのしかかった。

*

「隼人を、死なせたりなんかしない…」

医者が出ていってしまった後、ヨーコが言った。小さいけれど、はっきりとした言葉で。

病室の窓からは、銀色の月の光が差し込んでいる。今日は満月。いつもより強い光は、病室中を照らしだす。

「あたしも……」

エレナが同意した。

「隼人を殺すなんて、出来ない……」

難しい問題。

隼人の『尊厳』を選ぶのか、それとも『命』を選ぶのか。

しかし、二人の少女の決断は、最初から決まっていた。

「もし」

岩波が、表情を変えないまま言った。

「隼人の世話を苦痛に感じたら、どうする気だ？」

「……」

「植物人間ってのはな。死んでないんだよ。呼吸もすれば、勿論栄養だって必要とする。髪を切ったり、身体を洗ってやったり、排泄だって面倒をみなきゃいけない。それを、一生続ける覚悟があるのか？」

「あるわ」

真っ先に答えたのは、ヨーコだった。涙を拭い、真っ直ぐな瞳で岩波を貫く。

「隼人の為なら、何だってする」

「口で言うのは簡単だ」

岩波が冷たく返した。

「お前、将来は仕事につくだろう？誰かと結婚するかも知れんだろう？それでも、隼人の面倒を見てやれるのか？」

「出来るよ」

今度答えたのは、エレナだった。

「あたしは、一度死ぬことまで考えた…。でも、それを思えば、この世で出来ないことなんて無いよ」

それから、病室を見回した。

「それに、一人で介護する訳じゃ無い。四人…ううん、もっともつと、隼人を大切にしている人が沢山いる」

「だから、隼人を殺さないで…」

ヨーコが、必死に言った。

二人の少女の説得で、ついに岩波は納得したようだ。

「お前らに、それだけの覚悟があるなら。…俺は、それでいい」

隼人を、息子のように愛しているから。

初めて公園で会った時から、ずっと。

そして、きつと、これからも…。

「私は、仕事であまり協力出来ないかもしれないけど」

由布子が、最後に話した。

「でも、出来る限りのことはするわ。もしかしたら 三十年後に、隼人くんが目覚めるかも知れないし、ね。奇跡を信じて、やってみましょう」

『家族』全員が、同じ意見に達した瞬間だった。

月は、優しく病室を見守っていた。

夜明け

岩波が署に戻ったのは、もう日が変わってしまった深夜だった。

薄暗いフロアには、まだ刑事たちが数人残っていて、岩波の帰りを待っていた。そこには、マドンナや松田の姿もあった。

皆、疲れた表情をして自分の席に座っている。何にも手がつかない状態だ。岩波を見ると、黙りこくったまま一礼した。

岩波も、無言のまま自分の席にドカッと腰を下ろした。

今夜は、とても家に帰れない。この一日で起こった出来事が、走馬灯のように岩波の中に現れては流れ去っていく。

朝、交番で隼人を戒めたのも、今日。

通り魔事件で吉祥寺駅に行ったのも、今日。

マルグレーテと走り回ったのも、今日。

けれど、あの公園に辿り着いてからは、岩波の記憶が断片的になる。

不良達の喧嘩の嵐。泣き叫ぶエレナ。彼女を守ろうと飛び込んで

いく、隼人の背中。血だまり。岩波の腕の中で、目を閉じていく隼人

バンッ！

それを思い出した瞬間、いきなり岩波はデスクを拳で叩きつけた。しかし、周りの刑事たちは驚かない。何かを壊してしまいたいような衝動は、全員が抱えているからだ。

何を思ったか、マドンナが突然ふらりと立ち上がり、よろよろとフロアから出ていった。

彼女の目的に気付いた松田達が、静かにそれに続く。やがて、フロアの入り口のドアが閉まる、重い音が響いた。

あっという間に、フロアには岩波しか居なくなった。

「俺に気イ使ってくれてんのか…？」
誰に向かってでもなく、岩波が呟いた。心の中で、仲間達に感謝しながら。

一人になってしまうと、隼人が岩波に託した事柄が、現実味を帯びて蘇ってくる。

『いwanaみさん…“あいつら”のこと…』

隼人。最後まで、エレナとレッドイーグルを心配してたんだろ？

大丈夫だって。俺は、解ってるから。お前が思い描いてた目標は、俺が達成させてやるよ。

『それ、から…ヨークのこと…も…』

ああ。車の中で、約束したろ？彼女は、立派な刑事にしてみせるからな。俺のことだから、少々厳しく接するかも知れんが。だから、安心しろ。

『いわ…なみ、さん…』

痛みに耐える隼人の、苦しそうな笑顔が、岩波の脳裏に浮かび上がった。

『…俺のこと…』

信じて、くれて。

…ありがとう…』

バカやる。

最後の最後に、そんなこと言わなくなっていたいいだろうが。

何度も言っけどな。

俺は、お前の言いたいこと、全部わかってるから。

痴話喧嘩ばかりしたけどな。

お前のことを一番解ってるのは、俺だからな。ああ、それだけは自信を持って言えるよ。

だから …

岩波は、気付いていなかった。

長い間、全く縁の無かった、切ない雲が。

きらめきながら、頬を伝ったことに…。

*

「本当に、ごめんなさい…」
エレナが、俯いたまま言った。

月明かりの差す、病室。

岩波は、あの後ふらっと出ていった。恐らく署にでも戻ったのだろう、とヨーコは思った。

由布子は、日用品を取りに、一旦家に帰った。ヨーコが、残りの夏休みを病室で過ごすと言ったからだ。

そういう訳で、今は少女が二人きりで、月光に照らされている。

隼人の寝顔を見つめながら、エレナがヨーコに、事件のいきさつを話し終えたところだった。

ブルーシャークが、通り魔事件の犯人をレッドイーグルだと勘違いし、喧嘩になったこと。

エレナが、今までの寂しさから逃れたくて、死にたくなったこと。

隼人が、エレナを庇って撃たれたこと…。

「隼人が撃たれたのは、あたしのせいなの…。」

エレナは膝の上で、ぎゅっと手を握り締めた。

「ごめんなさい…。」

「なんで、謝るの…?」

ヨーコが、鼻声で微笑んだ。

「え…。」

エレナは、顔を上げた。

「怒らないの…？恨んでるでしょ。あたしのこと…」

「うっん」

ヨーコが首を横に振り、エレナを見つめる。真っ直ぐな瞳で。その視線は、どこか隼人に似ていた。

「隼人は、エレナを助けたかったんだよ。だから、あなたを庇った…。全部、隼人が決めたことだもん。エレナのせいじゃない」

「でも…」

エレナが困ったようにヨーコを見た。

二人の少女の瞳が、重なった。

「これから頑張ろっ、エレナ。隼人が目覚める日まで」

ヨーコがニッコリした。

「ヨーコ…」

エレナの目は、思わず、また涙を流していた。

どうして、あたしを許してくれるの？どうして、笑いかけ
てくれるの？

あたしは、憎まれて当然なのに。

「その代わりっ」

ヨーコが、悪戯っぽく人差し指をピンと立てた。

「隼人のお嫁さんは、あたしだからねっ」

「へ？」

突然のことに、エレナは目をぱちくりさせる。

「エレナには、負けないからねっ」

ヨーコが続けた。

「いくらエレナが隼人を好きでも。あたし、譲ったりしないからねっ」

プツ、とエレナが吹き出した。涙と混じった、へんてこりんな笑い。

「何を言ってるのかと思ったら…」

そして、笑いが落ち着いてきたところで、ヨーコを見つめて頷いた。

「いいよ、それでも。あたしは、隼人の妹ってことにする」

隼人。

あなたと一緒にいられるだけでいいの。

家族みたいに、笑いあえる関係であれば…あたしは、すごく幸せだから。

「…」

「ヨーコは、まさかエレナからそんな返答が返ってくるとは思っていなかった。信じられないとでも言うように、じっとしている。」

「あたしは、うるさい姑だからねっ」

「ちよっぴりおどけて、エレナが笑った。」

「ヨーコのこと、苛めるかもよー」

「ヨーコは、一瞬びっくりしたような顔をしていた。が、すぐに負けじと言い返す。」

「いいもーん。その時は、隼人に守ってもらっから」

「何それっ。ずるいー！」

「ずるくないもんっ」

「哀しいはずの病室で、二人の笑顔が溢れだす。」

「眠る隼人の傍で生まれた、新しい絆。」

「愛する人を思う気持ちを分かち合う、強い強い絆。」

「やがて、空が白み始めた…。」

「はやとー。ただいまー」

バーンと大きな音を立て、ヨーコが病室の扉を開けた。

明るい春の日差しが、柔らかくベッドを包み込んでいる。その中で眠り続ける隼人は、惚れ惚れとしてしまうほど、綺麗な横顔をしていた。

勿論、隼人がヨーコに笑って返事をする事は無い。あの事件から三年経とうとしている、今も。

けれど、病室に来た人は皆、必ず隼人に話し掛ける。目覚めている人間に話すのと、同じように。

「隼人みたいな状態の人でも、声は聞こえてる事があるんだって！」と、介護士になったエレナが嬉しいニュースを持ち込んだからだ。

と言っても、ヨーコとエレナは、そのニュースを聞くずっと前から、隼人に話しかけ続けている。彼の目蓋や指先が、呼び掛けに反応するように、小さく動くことがあるからだ。

そんな小さな反応を見つけたとき、二人の少女　いや女性は、とても幸せな気持ちになる。

病室には、ヨーコの大好きな音楽　ムーン・リヴアーが流れている。切なくなるようで、けれど優しい旋律。隼人も、大好きだった響き。

今日は、エレナは仕事が忙しく、来れないという。因みに、彼女が働く介護施設では、昔のレッドイーグルのメンバーも勤務している。臼井もその一人だ。今では、一児の父親でもある。

隼人の夢は、レッドイーグルだけでなく、ブルーシャークにまで影響を及ぼした。勉強して大学に行った者もいれば、実家と仲直りして家業を継いだ者もいる。

その影には、いつも一人の頑固な刑事の姿があるのだが、これはヨーコの知らないことだ。

ヨーコも、無事に刑事となった。

つい三日前には、警察庁長官の息子が誘拐された事件を解決に導いた。勿論、持ち前の（？）ドジっぷりで、ミスもしてしまったのだが…。

「隼人。あのね」

ヨーコはスーツ姿のまま、ベッドの端に腰掛けた。

「今日、マドンナに褒められちゃった。『桐原さんは泣き虫だけど、やることはやるじゃない？』って。あたし、そんなに泣き虫かなあ」

そつ、と指で隼人の頬を撫でる。三年間、変わらない彼女の仕草。

「でもね、岩波刑事だったら、なーんにも言ってくれないの。それど

ころか、『全然なつてないぞ、桐原』だって。厳しいんだからっ」

隼人が、何となく笑ったように見えた。

けれど、それはもしかしたら、春の光が見せる、幻だったかも知れない。

「あとね…」

ヨーコは、隼人を撫でる手を一瞬止めた。

「誘拐事件の時、あたしを助けてくれた泥棒、いたでしょう？なんかムカつく奴だったけど。」

彼に、色々考えさせられた気がするの。正義って何か、とか…
難しいよね」

窓の外で、はらはらと桜が散った。

うららかで、閑かな日だまり。

だんだんと、これから夏へと変わっていく空気。

BGMのムーン・リヴァーが、最後の盛り上がる旋律を奏で始めた。

「隼人…」

ヨーコは、呟いた。

「…愛してるよ…」

それは。

あの日、蝉が鳴き盛る中で隼人が言ってくれた言葉。

返してあげられなかった言葉。

そして、三年間、毎日ヨーコが囁く言葉…。

ヨーコは、そっと隼人の綺麗な手を握った。

もうすぐ。

夏が来たら…

あなたが眠って、

三年になるね。

この三年は、長かった。

毎日、あなたが目覚めるのを待ってた。

でもね。

それは、これからも変わらないよ。

ずっとずっと、

待ってるから。

あなたが、もう一度。

あたしに笑いかけてくれる日を。

待ってるから。

ずっとずっと、

大好きな、

あなたの傍で　。

〜夏の盛りには〜
E
N
D

。 + 。 * 。 + 。 * + 。 +

エピローグ

〜三度目の夏へ〜（後書き）

こんにちは。奥山メイです。この話をもって、『〜夏の盛り〜』は完結しました。

最初は一編の番外編として始まったこの物語。途中で長い休載期間があったにも関わらず、ここまで沢山の方々に読んで頂けたことに、本当に感謝しております。

もの悲しい展開で終わってしまったので、『バッドエンド』と解釈される方も多いかもかもしれません。

けれど、ヨーコちゃんと隼人くんの物語は『Mr. Justice e〜真実と現実〜』に続いていきます。刑事になったヨーコちゃん、介護士になったエレナちゃん、岩波さん、そして新しい仲間達。新たな展開や恋に繋がっているので、お時間がありましたら目を通してみて下さいね。

『Mr. Justice e〜真実と現実〜』は、近いうちにepisode 2連載開始です！

ただ、まだ解決していないことが。罪を犯してしまった拓人くん・優也くんのことです。

勿論、この二人を放っておく訳にはいきません。明日からは『夏の盛り〜』の続きとして、ヨーコちゃん達のエピソードを混ぜながら、二人の少年についての番外編を描きます。二人の少年を、最後まで見守って頂ければ幸いです。

それでは、これからも、どうぞ宜しくお願い致します!!

2010年2月21日

奥山メイ

° + ° * + ° + ° * ° + ° * +

番外編 事件後夜 1

「岩波サン！聞いてちゃったんだけどさー」

事情聴取の為に狭い部屋に入れられた途端、その少年 拓人は、
馴々しく岩波に質問を浴びせた。

「あの隼人って警察官、撃たれちゃったの！？死んじゃった、って
ホント？」

「バカヤロー！」

岩波が一喝した。

「縁起悪いこと言うんじゃないっ。あいつは、生きてるぞ！」

「あ、じゃあ撃たれたってのはホントなんだ」

拓人は、岩波の言葉を無視するように呟いた。

「人生、何が起こるかわかんないねエ」

「まっただくだ」

岩波がイライラと言う。

「突然、お前に刺し殺されたヤツもいるしな」

通り魔事件から、三日。

不良の喧嘩騒動もあり、本町署はなかなか落ち着かなかった。何しろ、警察官の一人が撃たれたのだ。一部のマスコミまでもが本町署に押し掛けたので、拓人の事情聴取は今日が初めてとなる。

「庄司拓人。お前は、殺人及び殺人未遂の容疑にかけられている」
デスクに向かい合って座り、岩波は機械的に書類を読み上げた。

撃たれる一時間ほど前に、隼人が用意していた書類。そう思うと、何だか胸が締め付けられる。

「ねえねえ。俺が殺したの、ブルーシャークのリーダーだったんだって？」

「またもや、拓人が質問を浴びせてきた。」

「おっどろいたなあ。アイツ、俺を止めようと飛び出してきたんだぜ。そんな道徳的なヤツが、まさかブルーシャークだとはねー」

「お前にブルーシャークをけなす資格は無いぞ」

岩波はフン、と書類をめくる。

「少なくとも、ブルーシャークは無差別に人を殺したことはなかった」

「…」

自分のことを言われているのだと気付き、拓人が少し押し黙った。

拓人は、吉祥寺郊外に住む資産家の息子だ。しかし、裕福だから

とって、決して幸せな生活を送ってきた訳ではなかった。
数年前に、従弟が何者かに殺されたのだ。

警察はレッドイーグルが犯人ではないかと疑った。岩波が隼人と知り合ったのも、彼を犯人ではないかと考えたからだ。しかし、レッドイーグルは全くの無関係だった。犯人は、今も見つかっていない。

その事件は、暗く拓人に影を落としていた。

「お前。身内を犯罪で失う辛さは、知っているだろう？」
岩波が言った。

「どうして、そんなお前が通り魔なんてした？」

「……」
拓人は、先ほどまでの馴々しさとは一転して、鋭く岩波を睨み付けた。

負けじと岩波も睨み返す。

痛いほどの静寂が流れた……。

*

本町署のフロアの片隅でも、もう一つの睨み合いが続いていた。

「だからあ、兄貴の仇をうつ為だったんだってば！」
叫んでいるのは、坂上優也。ブルーシャークのメンバーだ。

同じくブルーシャークの兄が二人いたが、訳あって、どちらも殺されてしまった。それだけ聞けば、優也は何とも可哀な境遇の持ち主に思えるだろう。

しかし、優也は隼人を撃った張本人なのだ。

「拳銃を持ち出したのは、兄貴の仇をうつ為だよ。あの警察官を撃つ為じゃない」

「どんな目的であろうと、罪は許されないのよ！」

向かい合って座っていたマドンナがピシヤリと言った。

…といっても、ここは聴取室ではない。あくまでも、他の刑事たちも仕事をしているフロアの片隅。思いつきり怒鳴ることはできない。

本町署は小さい部署なので、ワンフロアに一つしか聴取室がない。そこを岩波が使っているため、マドンナはこの辺鄙な場所で聴取を行っている。

もともと、マドンナは意図的に岩波に聴取室を使わせた。岩波が大声拔きに聴取ができるとは思えなかったのだ…。

「あなた、全く反省してないようね」

マドンナが冷たい声で優也に言った。

「何を反省することがあるんだい？」

優也は、フフンと鼻で笑ってみせる。

「結局、ボクが撃った警察官が哲也兄ちゃんを殺してたんじゃないか。最高の“仇討ち”になったよ」

「仇討ちなら、人を殺してもいいって言うの?!」

マドンナは、グツと大きな目を見開いた。長い睫毛が、その瞳を強調する。

「それに、坂上哲也が亡くなったのは事故だったのよ。隼人くんは正当防衛が認められたわ」

「だったら何だっていうんだ!？」

優也が声を荒げ、立ち上がった。

「事故だろうが何だろうが、関係ない! 兄貴は殺されたんだ!」

フロアにいた刑事たちが、優也の大声に驚いて、視線を向けてくる。

それでも、優也は叫び続けた。

「犯罪で家族を亡くす辛さを、刑事さんは知らないんだ! ！ボクの気持ちなんか、わかりっこないだろう!？」

「生憎あじにくだけれど」

マドンナもが立ち上がった。

「私たち刑事に、あなたの気持ちを理解する義務は無いのよ。どんな理由であろうと、罪は罪。逃げることなんて、出来ないのよ!」

結局、岩波と変わりなく、マドンナも怒鳴り声を上げてしまった。

優也とマドンナの間に、バチバチと火花が散る。

刑事たちは、仕事の手を止めたまま、ハラハラと二人を見ていた。

その時。

「こんにちは……」

小さな声と共に、フロアの入り口に人影が立った。シーンと静まり返っているフロアを覗き込みながら、入るのを躊躇しているようだ。

「あら」

マドンナが、その人影に気付いた。

「桐原さんじゃないの。いらっしやい」

番外編／事件後夜 - 2

「あの、今…岩波刑事は、お仕事中ですか？」

しどろもどろにヨーコが聞く。何だか、フロアの雰囲気がとても重苦しいことに気付いたのだ。

「岩波さんは、通り魔事件の事情聴取をしてるわ」

マドンナが刑事たちの頭越しに答える。

「桐原さん、遠慮しなくていいわよ。いらっしやい」

マドンナが事情聴取をしている場所は、ちょうどフロアの入り口と対角線上にある。ヨーコと会話するには、かなり不都合だ。

ヨーコは、刑事たちに小さく頭を下げながらやってきた。本人は礼儀正しくしているつもりなのだが、ちょっとピョコピョコして見えて、子供が大人ぶっている時のような可愛らしいイメージになってしまう。

今日のヨーコは、オレンジ色のワンピース姿。しかし、ヨーコの表情は、ワンピースの夏らしい明るい色とは正反対に沈んでいた。

「…岩波さんのお仕事が終わるまで、待っていてもいいですか…？」
少女は、憔悴しきった眼でマドンナを見つめる。

「勿論よ」

マドンナが、男性刑事の憧れの的になっている笑顔で答えた。
「どうしたの？岩波さんなんかに会ったら、もつと顔が暗くなっちゃうわよ」

そんなマドンナの辛口な冗談も、今のヨーコには響かないようだった。彼女は、伏し目がちになりながら言った。

「隼人のことで、相談したいことがあって…」

その名がヨーコの唇から漏れた瞬間。

ついさっきまでマドンナと睨み合っていた優也が、いきなり笑いだした。

猟奇的な笑い方だった。氷のように冷たくて、無機質。フロアにいた誰もが、背中を走る悪寒にゾツとした。

「“隼人”のことで相談、ねえ…」

優也がケラケラとヨーコを見る。

「あいつ、どうなったの？ちゃんと死んでくれた？」

「え…」

突然の残酷な言葉に、ヨーコの身体が一瞬にして強ばった。

しまった、とマドンナは臍を咬んだ。ヨーコは、まだ事件のシヨツクの最中さなかにいる。そんな時に優也の暴言を聞いてしまったら、ど

んなに傷つくか。マドンナですら、苦しくなるような怒りを覚えて
いるというのに…。

「ここよりも、応接室で待っていたほうが良いと思うわ」

マドンナは、優しい声でヨーコに言った。とにかく、早くヨーコ
と優也を引き離さなければ。

「誰かに案内してもらいなさい」

しかし、既にヨーコの意識は、笑い続ける優也にしか向けられて
いなかった。

「どういう意味…?」

彼女のガサガサの唇から、今にも消えてしまいそうな声が出る。

「『ちゃんと死んでくれた?』って

」

「言葉通りだよ」

優也がサラッと言った。

「あいつが消えてくれなきゃ、ボクが救われないね。まだ生きてる
なら、早く死んじまえば良いんだ」

ヨーコの瞳が大きく見開かれたのを、マドンナは見た。

次の瞬間。

バーン!!

音と共に、ヨーコが優也に掴み掛かった。

衝撃で、優也は壁に激突する。書類がバサバサと音を立てて雪崩れた。

「桐原さ…！」

マドンナが止める間も無かった。

「あんたが…！」

優也の胸ぐらを掴み、壁に押しつけながら、ヨーコが叫んだ。

「あんたが、隼人を撃つたのね!？」

「…そうだよ…」

優也は、ヨーコに首を絞められているというのに、平然と笑っている。

「余りに昔と雰囲気が違うんで、最初は隼人だとは気付かなかったよ」

「…」

「あいつがボクの兄貴を殺した男だと解った時は、憎くて憎くて、身体が泡立つみたいだった。だから、迷わず撃った。ボクは、憎い相手に仕返しができたんだ…！」

優也の眼が、ランランと輝いた。

彼の表情は、狂喜と呼ぶしかないだろう。

「どっしり…」

ヨーコの眼から、涙が溢れてくる。
「どうして、そんなに淡々と話せるの…!？」

確かに、隼人は優也の兄を殺してしまった。それは、偶然起きた『事故』。

しかし、隼人は正当防衛が認められた後も、ずっとそのことで苦しんできた…。

「隼人だって辛かったのに…どうして!!」 ヨーコは、力の限りに優也の頬を打った。パシィン、と鋭い音がフロアに響く。

「…わかるよ。大切な人を傷つけた人間は、憎いだろ…？」
優也は叩かれた痛みをもともせず、せせら笑ってヨーコを見た。

「殺したい位、憎いだろ…？」

「そつよ…!!」

ヨーコが叫ぶ。その声は、悲痛な切なさを持っていた。

「憎いわよ…本当に、殺してやりたいわよ…!!」

彼女の手が、拳となって振り上げられる。

「桐原さん…!!」

マドンナが、少女を止めようと一歩を踏み出した。
しかし。。。

ヨーコは、力なく手を下ろした。優也の胸元を押さえ付けていた手も、スルツと下に落ちる。ぺたんと床に膝をついたかと思うと、彼女はそのまま小さな嗚咽を洩らし始めた。

「な…なんだよ」

優也は、ゲホゲホと咳き込みながら、拍子抜けしたようにヨーコを見た。

「殴るなら殴れよ！」

「殴りたい…あんなを殺したい…」

ヨーコが、ぐつと顔を拭う。しかし、塩辛い水は、後から後から、彼女の頬を流れて伝った。

「…でも、出来ない…」

今や、フロアにいる人間の視線は、全てヨーコに向けられている。静まり返った中で、少女の嗚咽混じりの言葉しか聞こえない。

「あたしが、あんなを殺したら…何も変わらない」

兄を殺された恨みを、隼人にぶつけた優也。隼人を傷つけられたヨーコが、仕返しをしたら。また、誰かが悲しみ、憎しみを抱く…。

「こんなこと…繰り返したくない」

ヨーコが、涙声で続ける。

「あんたも、わかるでしょ？大切な人を失ったら…どんな気持ちに

なるか。苦しいんだよ…」

「…」

「こんな気持ち、他の誰かがまた味わうことになるなんて。そんなの、嫌…」

「…」

「それに」

ヨーコは、鼻を吸った。

「あたしが仕返ししても、隼人は目を覚ましてはくれない。喜ばんだりもしない…それは、あんたのお兄さんだって、同じだよ…」

兄の話が出たとき、優也がヨーコをジッと見つめた。呆れたような、馬鹿にしたような、けれど虚ろな顔で。

ヨーコは、涙をこらえて話し続ける。それが優也に向かっている言葉なのか、自分に語りかける言葉なのかはわからない。しかし、優也を見る彼女の瞳は、凜とした光を放っていた。

「隼人と約束したもん。人を幸せにする、刑事になるって」

「え…」

声を洩らしたのは、マドンナだった。

「桐原さん…刑事に、なりたいの？」

「こくん、とヨーコが頷く。

「小さい頃からの夢だから」

どんなに周囲に反対されようと、心に抱き続けてきた夢。

「隼人とも、約束したから……」

あの日。アルコールランプの光の海で。

「だから……」

ヨーコは、優也を見つめた。涙に濡れた顔で。

「あたしは、もう、繰り返さない」

誰もが持つ、大切な人と笑いあえる幸せを。

壊したくないから。

「あなたも、気付いて……」

優也の足がふらつき、床に崩れ落ちた。擦れた叫びが、彼の口から絞りだされる。

「じゃあ。この気持ちも、どうしろっていうんだよ!……」

兄達を亡くした悲しみを。憎しみを。虚しさを。

「誰かにぶつけなきゃ、やってらんない……!」

「私たち刑事が、あなたの気持ちを受けとめるわ」
マドンナが、静かに言った。

「私たちの仕事はね。犯人を捕まえるだけではないのよ。同じ過ち

を繰り返さない為に、被害者や加害者の想いを聞くのも、大切な役目だわ」

優也が、マドンナを見上げた。マドンナが、少年を見下ろした。もう、二人の間に火花は散らない。

「騙されたと思って、私たちにあなたの気持ちを話さない。悲しみは、癒えないかもしれないけれど…誰かと気持ちを分かち合えば、心は落ち着くものよ」

「…うう…っ」

優也の身体が震え、クシャクシャに歪んだ顔から、ぽたぽたと涙が落ちた。

彼の中で捻じ曲がってしまった何かが、変わり始めようとしていた。

番外編 事件後夜 - 3

「ひとまず、一件落着…か？」

ヨーコと優也のやりとりを、岩波と拓人も見つめていた。事情聴取をしていたのだが、騒ぎを聞き付けて飛び出してきてしまったのだ。

一時はどうなることかと思われたが、今はヨーコも優也も、床に座り込んで静かに泣くばかり。もう、お互いに掴み合ったりする気配は無い。

岩波は安心したかのように、長い溜め息をつく。

桐原ヨーコ、か…。すぐ泣く奴だが、頑固で気が強そうだな。さすが、隼人の彼女。

「お前を一人前の刑事にするのか…面白そうじゃねえか」

岩波は不敵に笑い、いきなり拓人を振り向いた。

「今の騒動、聞いてたか？」

「聞きたくなくても、聞こえるよ」

拓人が肩をすくめる。

「あんなに大きな声で泣き叫んだら、さ」

「お前も、坂上優也と一緒になんだな」

岩波が言った。

「従弟を殺されたが、犯人が見つからない。そのぶつけ所のない憎しみを、通り魔事件を起こすことで晴らした。…違うか？」

岩波には自信があった。今日は、最初からこの方向に話を進める気だったのだ。拓人が黙秘し続けたせいで、大分手間取ってしまったが。

しかし、拓人の答えは、岩波を心底驚かせた。

「ちげーよ」

少年が呟いた。

「俺が憎んでるのは、祐太を殺した犯人よりも…親だ…」

*

陽の当たる窓際。

そこに椅子を置いて、エレナは腰を下ろした。

彼女の視線の先には、様々な管に繋がれた、愛しい人が眠っている。

綺麗な横顔。

黒い、真っ直ぐな髪。

凜々しい目元、愛らしい唇

…

「はよと」

エレナは、微笑んで呼び掛けた。

勿論、彼が答えることはない。三日前に胸を撃たれてから、隼人は眠り続けている。今も、そしてこれからも。

静かなはずの病室に、機械的な音が、ピツ…ピツ…と規則的に刻まれている。それが、隼人の心臓が動いていることの、ただ一つの証だ。エレナとヨーコが、最初の夜、今にも止まってしまおうのではないかと恐れた音。けれど今日は、この音がなんだか嬉しい。

「生きてるもんね、隼人は…」

エレナは、そっと呟いて隼人の頬に手を当てた。

「あつたかい…」

思わず、顔がほころんでしまう。彼が、傍にいただけ。

「そついえば、ヨーコは大丈夫かなあ…」

隼人を見つめながら、エレナは首を傾げた。

「すぐ戻ってくるって言ったのに。…まあ、いつか」

今だけ。隼人を、独り占めにしちゃおっと。

エレナはクスツと笑い、隼人の枕の横に、自分の頭を乗せた。黒髪とミルクティー色の髪が、優しく触れ合う。

…ずっと昔。幼かった二人は、毎日こうしていたことがあった。

日だまりの中で、共に生きている幸せを噛み締めながら、暖かい光を浴びていた…。懐かしさに、エレナの胸がきゅゅと締まる。

「ヨーコ…今だけは許してね」

空中に囁くと、エレナは目を閉じた。

木漏れ日が、蝉時雨と共に、眠る二人を見守っていた…。

*

「親が、憎いのか？なぜだ？」

暗い聴取室に戻った途端、岩波が目を細めて拓人を問いただした。
「説明しろ」

「やだね」

拓人は、パイプ椅子の上であぐらをかく。

「説明しろ」

もう一度、岩波が言った。強い口調だ。

「やだね！」

拓人が大声で言い返す。またもや、二人の間で睨み合いが始まった。

「よし。じゃあ、保を呼んでこよう」

岩波が書類をデスクに叩きつけた。

「そうすれば、お前と親の関係もわかるしな」

祐太が眉根を寄せる。

「なんだよ、それは」

「文句あるか？」

岩波が拓人を睨み付ける。

「お前がこのまま何も言わなければ、俺はお前の親も呼び付けるぞ
…」

「何だよ！俺を脅してんのかよ！」

少年が怒鳴り、立ち上がった。ガターン、と椅子がひっくりかえった。

「ああ！脅しだよ！」

岩波もバン、とデスクを叩いて立ち上がる。

「どんな手を使おうと、俺は聞き出すからな。お前が、どうして凶行に走ったのか」

「そんなこと、どうでもいいだろ！」

拓人が喚き散らした。

「俺が通り魔事件の犯人だよ！それでいいじゃんか！理由なんてどうでもいいだろ！」

「どうでもよくねえんだよ！」

岩波が怒鳴る。

「理由が、一番大切なんだ！お前が過ちを繰り返さない為にはな！」

「意味わかんねえよ！」 拓人がパイプ椅子を蹴った。

「俺が言っている意味がわからないのなら、お前は幼稚園児だな。
庄司拓人」

刑事の鼻息が荒くなった。

「俺たち刑事はな。犯人捕まえるだけが仕事じゃねえ。同じような
事件を、“繰り返さない”ようにするのも仕事だ」

「
…」

「
今話したくないなら、それはそれでいい」

岩波は息をついて、再び椅子に腰を下ろした。

「
だがな、俺はしつこいぞ。お前が話すまで、待ち続けるからな」

「
…」

拓人は、ただ、岩波を睨み付けていた。

番外編 事件後夜 - 4

二人が睨み合いを初めてから、四時間が経った時。

「祐太が死んだとき…さ」

拓人が、ぽつりぽつりと話し始めた。

「保おじさんは、すごく悲しんでたんだ。一晩で頭髪が真っ白になつちまつて…。一人息子が殺されたんだから、当たり前だけどね」

「ああ、その時のことは、俺もよく覚えてるよ」

拓人が話したすのを待ちくたびれた様子も無く、岩波が答えた。
「通夜の席で、保は俺に掴み掛かったもんだ。『早く、祐太を殺した犯人を捕まえてくれ』ってな…」

「保おじさんは、本当に祐太のことを、大事に思ってたから…」
拓人が呟いた。

「…祐太は、幸せだよ。死んだときに、親にあんなに泣いてもらえたらさ。それに比べて、俺の親は…例えば俺が殺されたって、俺の為に泣いたりはしないんだ…」

「…何故？」

岩波の眉が、ピクツと上がった。

「何故そう言い切れる？」

シンとした聴取室の中、拓人が切なげに笑った。

「祐太の通夜るとき。俺の親が、保おじさんに何て言ったと思う？」

「…知らん」

刑事は、拓人を真っ正面から見つめ続けた。

「『祐太の変わりに、拓人が死んでくれたら良かったのに』って、言っただよ」

拓人が、顔を歪め、吐き捨てるように言った。

「『祐太みたいな優しい子が殺されるなんて、可哀想だ。殺されるなら、出来の悪い拓人の方がマシだった』って…っ」

少年の肩が、小さく震えだす。思い出したくもなかった、辛い記憶。それを口にしたことで、拓人の感情が高ぶってしまったのだ。

「俺：確かに、頭は悪いし、遊び回ってたけど…まさか、親にそんな風に言われるなんて、夢にも思ってた…」

両親の愛を、信じていたのに。少年の心は、裏切られ、打ち砕かれた。

「この二年間、親に認められなくて、頑張って勉強したんだ…」

拓人が声をも震わせながら、俯いた。

「成績が良いときは、親も喜んでくれたよ。だけど、テストで少しでも悪い点を取ると、すぐ不機嫌になるんだ…。そんなことを繰り返してるうちに、だんだん、親を喜ばせる為に頑張るのが、イヤになっちまって…」

「…うん。それで？」

岩波は、静かに続きを促す。

「もう、親にどう思われようが構わないって思った少年が呟いた。

「…それで…逆に、親を困らせてやりたくなって…」

「で。通り魔事件を起こしたって訳か」

岩波があっさりと言った。

「親を困らせる為に、か。なるほど。確かに、お前の親は今頃困っているだろうな。息子が人を殺したんだ。世間体も何も、あったもんじゃねえ」

「…」

拓人は、顔を上げた。岩波が、自分の言い分を解ってくれたように感じたのだ。しかし。

「ふざけてんじゃねえぞ！」

バシーン！！

雷のような怒鳴り声思いつきり横っ面を張られ、拓人は椅子ごと床に倒れこんだ。

ガッシャーン。

派手な音が、部屋中に反響する。

「いつ…てえ…！」

拓人は、ぶたれた左頬を押さえ、床に転がった。

「…何すんだよっ…！」

彼は、痛みにも目を潤ませながら、キツと刑事を睨み上げる。

「バカにはこれ位してやんねえとな」

岩波が冷たい目で、拓人を見下ろしていた。仁王立ちになり、憤怒の形相だ。

「『親を困らせたかった』だ？ちゃんちゃらおかしいわ。そんな理由に、俺が同情してやると思ったか？甘えるのもいい加減にしろ！」

「な…」

拓人は啞然とした。

「なんだとお…」

急に立ち上がると、目にも止まらぬ速さで岩波に殴りかかる。

しかし、岩波は一枚上手だった。拓人の拳が襲い掛かる一瞬前に身をかわすと、勢い余ってつんのめりかけた少年を、いとも簡単にクルリと投げる。

拓人の身体が綺麗な円を描いたかと思うと、次の瞬間、床に叩きつけられた。

「ウツ…！」

背中を打ち付けた衝撃で、少年が小さく呻く。それでも、彼は再び立ち上がるうとした。

「バーカ。もう勝負はついてんだよ」

岩波が髪を掻き上げながら言った。

「相撲ではな。地面に身体がついた途端、負けが決まるんだ」

岩波は、拓人に馬乗りになるような格好になっていた。少年は、もう動きたくても動けない。

「キレたら、すぐに手足が出る。それが、お前のガキな所だ。反抗したけりゃ、言葉と頭を使え。それでこそ大人の男だ。暴れるだけなら、そこら辺の天井猫でもできるぞ」

刑事の視線は、矢のごとく少年を串刺しにした。

「甘えるな！」

岩波が一喝した。

「親に認めてもらえないのが悔しいなら、努力して見返すしかないんだよ。それも出来ないで、通り魔なんぞして暴れやがって！」

「……」

「もし暴れるしか出来ないなら、一人でやってろ！自分の苛立ちをぶつけて、何の関係も無い人間を傷つけるなんて言語道断だ！自己中心的なのにも程がある！」

「じゃあ、どうしろってんだよ！」

拓人が大声を出した。

「俺は、暴れるしかなかったんだよつ。それに、もう逮捕されちまっつたしよ。刑事サンがどんなにお説教しようが、俺は変われねえんだよ！」

「いや、変わる！」

岩波が、グツと拓人の胸ぐらを掴み上げた。

「俺は、知ってるんだ。毎日喧嘩することしか知らなかったのに、立ち直ってみせた奴をな！」

隼人。

お前が、俺に教えてくれた。『叶わない目標は無い』ってな…。

「庄司拓人」

岩波は息を荒げたまま、少年を見つめた。

「お前は、自分勝手な人間だ。甘っちょろい人間だ」

「…」

拓人も、フーフーいいながら岩波を見上げている。

「お前は、人を傷つけた。最低の人間だ…だがな」
刑事の声と共に、二人の瞳が、重なった。

「最低の人間でも…ずっと最低のままじゃねえ。変わるんだよ」
岩波は、最後の一言に力を込めた。

「だから…これからは、俺の話をよく聞け。暴力は無しで、だ。そうしたら、俺もお前の話を聞いてやる」

「…」

拓人の瞳の中に、小さく光が差した。

「お前が、俺に全てを話してくれたら　俺は、お前のことを諦めたりはしないからな」

岩波は、そう言うつと拓人の胸ぐらから手を離し、ゆっくりと立ち上がった。

拓人は、そのまま床に転がっていた。

やろうと思えば、岩波に再び殴りかかることもできる。

しかし、少年は動かなかった。

「岩波サンさあ……」

少年の口から、小さな声が漏れた。

「俺の話…聞いてくれんの？」

その台詞に、岩波はハッとして目を見開いた。

拓人が発した言葉は。

昔、隼人が岩波に発したものだっただから。

「バーカ」

刑事は、胸が締め付けられて苦しいのを何とか抑えながら、ニッと笑ってみせた。

「当たり前だろう？」

拓人の瞳は、岩波を見つめ続けている。

そこに、睨み付けるような色は、もう無かった…。

番外編／事件後夜 - 5

ちょうど、その時。

聴取室の扉が、コンコンッとノックされた。

「岩波さん。お客様よ」

マドンナの声だ。

「今、取り調べ中だ」

岩波は大きく息をつき、自分を落ち着かせる。サツと目配せすると、拓人が慌てて立ち上がり、パイプ椅子に腰掛けた。流石に、取っ組み合いをしていたとマドンナにバレるのは都合が悪い。

「是非、今会いたいそうよ」

扉の向こうから、マドンナが言った。

「庄司保さん。拓人くんにも、会いたいですって」

ビクン！

保の名を聞いた途端、拓人が震えた。

逮捕された時、保がどんなにショックを受けていたか、拓人は知っている。自分には会わず顔がないことも、よく解っている。

しかし、岩波が問い掛けるように拓人を見つめると、彼は力なく頷いた。逃げ続ける訳にはいかないということも、少年は知っていた。

*

聴取室に入ってきた保は、拓人が逮捕されてからの三日間で更にやつれ、みすばらしくなっていた。岩波に案内され、くたびれた黒いコートをパイプ椅子の背にかけると、彼は甥の前に腰掛けた。

「茶でも、用意しよう」

岩波が呟き、立ち上がる。しかし、保は刑事の顔を見て、首を横にふった。

「いえ。結構です」

「…そうか」

軽く頷き、岩波は席に戻る。大人二人が、少年に向き合って座る形になった。

「拓人。お前の日記を読んだよ」

保が、話し始めた。

「悪いが、勝手にお前の机の引き出しを開けてしまっただね…そして、これが入っていた」

保は、机の上に一冊の大学ノートを置いた。随分とボロボロになってしまっているノートだ。表紙は折れ曲がり、所々破けている。

少年は、嫌なものでも見たように、ノートから目を逸らす。代わりに岩波がノートを手を取った。

「ほう…拓人は、日記をつけていたのか」

パラパラとページをめくると、シャープペンシルで書き殴られた言葉の端々が、目に飛び込んでくる。

『父さんが憎い』

『母さんが怖い』

『本当に、祐太の代わりに俺が死ねばよかった…』

日記は、二年前の祐太が殺された日に始まり、通り魔事件の前日まで続いていた。最後のページには、こうあった。

『もう、何もかもどうでもいい。』

「拓人。お前がこんなに苦しんでいることを、私は全く知らなかった…」

保が、ゆつくりと言った。

「私は、お前の心の叫びに気付いてやる事が出来なかった。…私が拓人を支えてやれていたなら。拓人は、こんな事件を起こさずに済んだかも知れない…私にも、事件の責任はある」

「そんなことねえよ…」

拓人が呟いた。

「何でそんなこと言うんだよ。おじさんは何も悪くねえよ…」

保は、疲れた顔で、しかし優しく微笑んでいた。

「拓人。罪を償ったら、私のところに養子にきなさい」

*

病院の廊下では、いつも沢山の人が行き交っていた。点滴を刺したままの人、車椅子に乗っている人、松葉杖の人。医者や看護師、患者の家族、見舞客。たまに、注射から逃げ出した小さな子供が駆けていく。

そんな雑踏を、ヨーコは俯きがちに歩いてきた。

結局、岩波に会うことは出来なかった。事情聴取が長引いていたからだ。マドンナは聴取が終わるまで待っているよう言ってくれたし、待ちくたびれないよう、お菓子まで出してくれようとした。しかし、ヨーコはそれを断った…。早く、隼人の顔が見たくなつたから。

「ただいまー」

明るい声を出すように気を付けながら、ヨーコは病室のドアを開けた。ベッドに近づくと、まるで光の世界に迷い込んだような穏やかな眩しさが、ヨーコの視界を覆い尽くす。

病室には、正面に大きく開いた窓があり、それに沿うようにベッドが置かれている。だから、窓から差し込む光は、朝日であることと夕日であること、必ずベッドを包み込むのだ。

光の中で、隼人は眠り続けていた。ヨーコは、バッグを椅子に置き、すぐさま隼人の手を握りしめる。そして、その手の温かさを確かめると、ようやく安心して息をついた。

彼女の頭の中では、優也の暴言が何度もリピートされていた。

『早く死んじまえばいいのに』

「いや…」

ヨーコは唇を噛みしめ、激しく首を横に振った。

「いや。絶対に、隼人を死なせたりしない…！」

絶対に。

あたしは、ずっとずっと、隼人の傍にいるから…。

「ヨーコ？」

遠慮がちな声がして、すぐ後ろに人が立つ気配がした。

「大丈夫？何かあったの？」

ヨーコが振り返ってみると、そこにいたのはエレナだった。怪訝そうな表情をして、ヨーコを見つめている。夕日に照らされ、ミルクティー色の髪が、黄金色に輝いていた。

「…何でもないよ…」

ヨーコは、強ばっていた口元を何とか上げた。本町署で優也に言われたことを、エレナに話す気にはとてなれない。

「エレナは？どこか行ってきたの？」

「うん、まあね」

エレナは、風に乱れた髪を指で梳いた。一日中隼人を見守っていた彼女は、少し足を伸ばそうと駅前まで行ってきたのだ。右手に重そうな書店のビニール袋を提げている。中に入っている本のタイトルが、うっすらと透けて見えた。

《介護士になろうって資格取得は、この一冊におまかせ！》

「えっ！」

ヨーコは思わず、大きな声を上げる。

「エレナ、介護士を目指すの！？意外だなー」

パツ、とエレナが真っ赤になった。

「意外とは何よっ。あたしだって、ちゃんと考えて決めただからねっ」

「ご、ごめん…」

エレナの鋭い目付きに驚いたのが、ヨーコの声のトーンが、しゅん、と落ちる。流石はレッドイーグルのメンバーだけあって、エレナの醸し出すオーラは威圧的なのだ。

しかし、当のエレナは、ヨーコの反応を面白がるようにクスクス笑っている。そして、本の袋をヨーコのバッグの隣に置いた。

「…あたし、今まで目標とか持ってたからさ。この機会に、何か目指してみようかな、って思ってた。介護士の資格を取れば、隼人のお世話もどんどん出来るし、一石二鳥でしょ？」

ヨーコが、感心してため息をついた。

「すごい…よく決心したじゃん。今まで、学校にも行ってなかったのよ…」

「すごいでしょーっ」

エレナが胸を張る。

「ま、色々ヨーコにも教えて貰うけどねっ。だって、あたし本読むの5年ぶりなんだから」

これには、ヨーコも啞然とした。

*

「私の養子になりなさい。拓人」

保がにこやかに言った。

「お前は、もう親の元に戻る気は無いだろう？」

「そうだけど…でも」

拓人は、ひたすら当惑している。

「なんで…急にそんなこと言われたって…」

「私は、お前ときちんと向き合ってみたいんだよ」
保が答えた。

「理由は、それだけだ。…嫌か？」

「嫌じゃないけど…」

拓人は、チラッと岩波を横目で見た。どうしたらいいか、迷っているようだった。

「自分のことは、自分で考える」

岩波はブイッと横を向いてしまう。

「俺に聞いてどうする」

拓人は、今度は猫背気味になり、恐々と保を見上げた。

「おじさん…俺のこと、怒ってんだろ？」

「勿論。怒っているよ。お前は人を殺した。それは、決して許されることでは無い」

保が答える。

すると、少年は「やっぱり」と言わんばかりに身をすくめた。彼は、ただ怖がっていたのだ。自分の存在を、拒絶されてしまうことを…。

「…だがな、拓人」

保は、真っ直ぐに少年を見つめ、その両肩に手を置き、前を向かせた。

「勘違いしないでくれ。私は、お前を信じている」

「…」

拓人が、叔父を見つめ返す。

保が続けた。

「信じているから、怒るんだよ。…お前を信じていなければ、わざわざこんな所に足を運んだりはしない。養子の話を出したのも…お前が変われると、確信しているからだ」

「…」

「だから、お前も信じてほしい。私は、いつでもお前を待っているんだよ」

拓人の唇が、小さく震えた。

こんな風に言ってくれる人が、こんなにも近くにいたなんて。彼は、今まで気付いていなかった。

「養子になつてくれるか？」
保が、再び尋ねた。

少年は、無言で頷いた…。

番外編 事件後夜 - 6

「岩波さん。これから、この子のことを頼みますよ」
コートを着ながら、保が深々と頭を下げた。

「ああ。大した力にはなれんと思うが…任せておけ」
岩波が小さく頷く。

拓人は、岩波の隣に立ったまま、ぼうつと保を見ていた。まだ、この人の息子になるということに実感が湧いていないのだ。しかし、拓人と保の心は、深い所でしっかりと繋がっていた。

「それと…岩波さん」
部屋から出ていきかけていた保が、ふと足を止めて振り返る。
「隼人くん…のことは…本当に、残念でした」

「…！」

岩波は、急に押し黙った。動けなくなった、と言ったほうが正しいかもしれない。

彼は、まだ隼人の話をすることが出来ない。三日前の出来事を思い出す度、胸が締め付けられて苦しくなる。

そんな刑事の様子を見て、保は再び口を開いた。
「…岩波さん。辛いときは、私に、何でも言ってくださいね」

「…」

「息子を傷つけられた哀しみは、私が一番解ってますから」

保は、知っていた。たびたび小さな喧嘩をしながらも、ぶつかりながらも、岩波と隼人の間には、親子に似た絆があったことを。

「…」

岩波は、何も答えないうまま、保を見つめていた。

「希望を忘れないで下さい。まだ、隼人くんは生きていますから」

保が微笑む。

「傍に、居てあげてください…私が、祐太の傍に居てやれなかった分まで」

そして、訪問者は拓人に小さく頷きかけてみせると、静かに出ていってしまった。

あとに、現実を信じられないでいる拓人と、動けないでいる岩波を残して。

*

病室は、再び静かな夜を迎えようとしていた。窓からさんさんと

差し込んでいた光の筋はいつの間にか消え、黄昏時の青い闇がベッドを包んでいる。

椅子に腰掛け、意気込んで本を読んでいたエレナが、眠そうに目を擦った。

「ヨーコおゝ。そろそろ銭湯行かない？あだし疲れちゃった」

「まだ三ページしか読んでないじゃない」

ベッドの端に座っていたヨーコがニヤツとして、夏休みの宿題から顔を上げる。英文法の、長つたらしいワークブックだ。

「エレナ、五年も本に触れてなかったもんねえ。読むのが遅いのも、当たり前かー」

すると、エレナは膨れて、ヨーコの手から素早くワークブックを取り上げた。

「またそう言つてバカにするう。ヨーコだって、さっきから全然進んでないじゃないっ」

「だって、難しいんだもんっ！」

「そうかなあ。ヨーコが授業中に隼人の妄想してて、何にも聞いてなかったんじゃないの？」

それを言われて、ヨーコは押し黙った。何故なら、それは事実だったから…。

「とにかくさ。銭湯行こうよっ」

エレナが元気よく言った。

この三日間、二人の少女は病院近くの銭湯を利用している。ヨーコにとっては、初めての体験だ。珈琲牛乳を売っていることや、湯

船に浸かった時、目の前に広大な富士山の絵が広がることに驚いた。

「ねっ。行こっ」

エレナがピョン、と椅子からベッドに飛び移る。スプリングが大きく軋み、ヨーコは隼人の上にデーンと投げ出された。

勿論、それで隼人が目覚めることは無い。しかし、ヨーコは一瞬「起こしちゃうじゃない！」とエレナに怒鳴りそうになった。本当は、「起きてほしい」と心から願っているのに…。

「わかった。行こうか」

少し名残惜しさを感じながら、ヨーコは隼人の身体から上半身を起こす。早く離れなければ、彼の温もりを感じて、泣きそうになるから…。

ちよつどその時。

「邪魔するぞ」

男の声がして、病室の扉がゆっくりと開いた。

「岩波刑事！」

弾かれたように、二人の少女が立ち上がる。

現れたのは、岩波だった。ざっくりとしたコートを脱ぎながら、表情一つ変えずに入ってくる。彼が病室にやってくるのは、事件当日以来、三日ぶりだ。

「桐原。お前、俺に用があって署まで来たそうだな。麗奈から聞い

た」

「あ…はい」

ヨーコは緊張しながら頷いた。岩波がいると、空気がピンと張り詰める。それをものともせず彼と付き合えるのは、マドンナと隼人位なものだろう。

刑事は、隅のクローゼットにコートを掛けた。

「用とは…隼人のことか？」

「…はい…」

ヨーコは、床に目を落とした。

「どうしても、隼人を撃つたのが誰か、知りたかったです。でも、もう会いました…さつき」

その言葉に、エレナがサッとヨーコに視線を走らせる。

「会ったの？…坂上優也に？」

「会った…」

ヨーコは、床を見つめたまま、ふわりと隼人の横に腰を下ろした。「会わなきゃよかった…」

会わなければ、あんな残酷な言葉を聞かずに済んだのに。

「…」

岩波は、無言で灰色のネクタイを緩めた。その厳しい顔つきに、二人の少女は本能的に息を潜める。刑事は、チラリとも二人を見ようとせず、何かに腹を立てているような雰囲気醸し出していた。

「立川。悪いが、少しの間だけ席を外して貰いたい」

それが、沈黙の後に岩波が低い声で告げた言葉だった。

「いいな？」

「…うん」

エレナは、素直に頷く。彼女は、この刑事の言うことには反発できなかった。

エレナにとつて、他の大人達と岩波とは、全く違う。それが何故なのかは、よく解らない。隼人が岩波を慕っていたからかもしれないし、事件の夜、救急車の中で、岩波がエレナに全ての真相を話したからかもしれない。

エレナは、ベッド脇に転がっていたスポーツバッグをひよいと肩にかけ、ヨーコに微笑み掛けた。

「あたし、銭湯行ってくるから。ゆっくり喋っててよ」

「あ…うん…ありがとう」

ヨーコは、歯切れの悪い返答をする。いざ岩波と二人きりになると思うと、身体が強ばってしまうのだ。

すると、ヨーコの気持ちを察したのか、エレナはそつと囁いた。

「大丈夫。隼人が一緒だから」

ヨーコの瞳が、一瞬にして輝いた。『彼』の名が、彼女の中に奇

跡を起こしたかのように。

これを見ていて面白くないのは岩波だ。刑事は、儼然として言った。

「なんだよ。俺と一対一ってのは、そんなに恐ろしいモンなのか？」

まさに、その通りである　と言わんばかりに、二人の少女がこくんとした。

エレナが出ていってしまつと、病室には重苦しい沈黙が流れた。

岩波はどっかと椅子に座り、ヨーコはベッドの端でちょこんとしている。二人とも、どう会話を進めたら良いか解らないでいる。

それでも岩波は、何とか口を開きかけた。隼人に託された『約束』のことを、ヨーコに話そうかと思つたのだ。彼が最後まで彼女の将来を気に掛け、岩波に彼女を見守るよう頼んだことを……。それを知れば、きつとヨーコだつて喜ぶはずだ。

しかし、岩波は思い直したように口を閉じた。

言つてしまえば、自分はヨーコに厳しくなれない。彼女も、岩波に対して甘えが出るだろう。そんなことでは、彼女は立派な刑事になどなれない…。

刑事は、グツと言葉を飲み込んだ。

その間、ヨーコは岩波を見つめられないまま、目を伏せていた。この刑事と二人きりで居るのは、やはり緊張する。彼女は布団の下にそつと手を潜り込ませ、隼人の指先を握り締めた。

血の通つた、あたたかい彼の手。彼が、ヨーコの傍で生きている証。

小さな幸せを感じて、ヨーコは少し落ち着いた。エレナの言つた

とおりだ。隼人が一緒なら、何も怖くない。

「私……」

ヨーコは、ためらいながらも凜と声を発した。

「私、絶対、刑事になります！」

岩波は、窓の外を見つめるばかりで、決して少女に目を向けようとはしない。けれど、彼の全意識はヨーコの言葉に注がれていた。

「隼人と約束したんです。どんな人でも信じてあげられる刑事になる、って」

ヨーコは、真つすぐに岩波を見ている。その視線は、どこか隼人の視線に似ていた。

「昔、隼人の無実を信じてくれた刑事さんみたいに……」

岩波は、わずかに目を見開いた。

その刑事こそが岩波だということを、話し続けるヨーコは知らない。

「隼人を信じた刑事さんみたいに……被害者の痛みも、加害者の痛みも、汲み取ってあげられる刑事になりたい……そう思います」

「……そうか」

岩波は、深く息をつきながら言った。

「そうか……」

岩波とヨーコ。

その日、二人の視線が重なることは、最後まで無かった。

それは、岩波がヨーコの真つすぐにひたむきな瞳を避けていたからかも知れない。あまりにも隼人に似ている、彼女の瞳を。

目を合わせてしまえば、彼女に隼人が重なって、“厳しく”なんてなれない気がした。

病院を出て、欠け始めた月の下を歩きながら、岩波は決意を新たにしていた。

隼人。

俺は守ってみせるからな、お前との約束。

あの子を、一人前の刑事にしてやるから。

だから、心配するな…

賑やかな夜の街角を、刑事の靴音が厳かに遠ざかっていった。

番外編（事件後夜）

END

◦
+ ◦
*
∴ ◦
+ ◦
◦ *、 ◦
+
◦ ∴ ◦
*

番外編〈事件後夜 - 7 (後書き)

これにて、『事件後夜』も完結致しました。少々長く引つ張ってしまった感もありますが、罪を犯してしまった二人の少年の姿をしっかりと描きたかったのでご了承ください。

この番外編が始まった、「刑事としての」岩波刑事とヨーコちゃんの関係は、本編に繋がっていきます。

近日『Mr. Justice 真実と現実』episode 2の連載を開始します！！ヨーコちゃん、岩波刑事は勿論、山川くん・角川刑事の活躍、そして恋の模様を…お楽しみに！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6801i/>

Mr.Justice episode0 ~ 夏の盛りに ~

2010年10月9日22時20分発行